

---

# 魔法少女リリカルなのは マテリアルズ・パニック！！

和利夫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは マテリアルズ・パニック！！

### 【Nコード】

N0808Y

### 【作者名】

和利夫

### 【あらすじ】

都市グラナガンから少し離れた場所。そこに喫茶店『マテリアルズ』という店がある。店主は元時空管理局の隊員であった。だが、娘達が出来てから戦う事をやめ、この喫茶店を開き、娘達と共に日常を生きようと決める。この話はそんな店主と娘達の日常を描いたお話。

第一話 喫茶店『マテリアルズ』（前書き）

マテリアル三人娘の話が書きたい！

って訳でこんなのを書いてしまった。

11/10/31

すみません。小説のタイトルを変更いたしました。

## 第一話 喫茶店『マテリアルズ』

ミッドチルダ。

いくつもある次元世界の中心地と呼ばれる世界。そこは『魔法』がある世界。この世界に生まれし人々はそんな魔法の恩恵を受けて日々を生活している。

そんな世界の中心部グラナガンの都市から少しだけ離れた場所に俺は住んでいる。

『マテリアルズ』

そんな名前の喫茶店。その店長である俺、ギンザン・イツキは27歳、独身。

そしてあるうことが独身でありながらひよんな事から娘達の父親をやらせてもらっている。

「パパ！ お皿運んできたー！」

「ほい。んじゃ、これを2番テーブルな」

「わかった」

さて、この元気に店の手伝いをしてくれるのは娘の一人である。

名前はレヴィ。ちゃんとした名前？があるのだが、名前ぼく無し、なんか長かったから俺はレヴィと読んでいる。

長い青髪をツインテールでまとめ、活発に動き回るのが特徴。素直でいい子なのであるが馬鹿っぽい。と言つか、馬鹿な子である。最近やつと算数の足し算、引き算を覚えたくらいだ。

「パパ？ 何か言った？」

「なんにも言っていないぞ。ほら、早く運ぶ」

「はい」

おっと、意外と勘が冴えているのでうかつにこんな事を思っただけなのだった。たまにコイツは人の心を読んでいるのではと見える。

「父上、この世に生まれる人間の心を現すかのように汚れきった皿やコップを洗い終わりました」

「ん、ありがとう」

「はい」

俺がカウンターでお客様に出すコーヒーを作っていると隣で洗い物をしていた少女がそう報告しに来る。

ちなみにこの子は俺の二人目の娘、シュテルと言う。ちゃんとした名前が（以下略）

レヴィとは対極的で外見の割りには落ち着いた性格をしている。たまに物騒な物言いをするがそこは気にしたらキリが無いのでスル

「する事を勧めるぞ。もちろん、これからちゃんとした教育はするつもりだが……………」。

「でしたら、いつものを所望いたします」

「はいはい。エライエライ」

トテトテと俺の足元まで近づいてくる少女は自分の頭を差し出し、「またか」と内心思いながら俺は彼女の頭を撫でてあげた。よっほど嬉しいのか、無感情だった表情は一瞬にして和らいでしまうのである。

「あー！ シュテル！ 貴様！ 何、親父どのにいい子いい子されておるか！？」

「うわっ！ 馬鹿野郎！ ひつつくな！ コーヒーがこぼれる！」

「ずるいぞ！ 我とて親父どののために頑張っているのだ！ それなりのほつびを所望する！」

「わかったから！ わかったから！ とりあえず、腕にぶら下がるな！」

「おお〜！ これは意外とおもしろいぞ〜」

さてはて、現在俺の腕にぶら下がるこの少女の名をディアと言う。ちゃんとした（以下略）

いかにも俺様な性格をしており、負けず嫌いで無駄にプライドが高い。だが、意外と娘の中でしたっけかりして面倒見も良いので子育て経験が初めての俺としては助かったりしている。

「わー！ 僕も僕も！！」

「おい、塵芥。今は我が親父どのにほうびを要求しているのだぞ！  
あとにせい！」

「ディア、ずるいです。でしたら、私は父上の腕に抱かれます」  
ディアが騒いでいると他の二人も俺にひつついて来た。

右腕にはディア。

右足にはレヴィ。

左足にはシュテル。

唯一残っている左手はお客に出すコーヒーを持っていたためにそれを払う事も出来ず、どうする事も出来ない。

いや、一つだけ方法があるか……………。

「いい加減にしないと三時のおやつは無し！！」

「……わー！ それだけはご勘弁を！！」「……」

大抵三人が言う事を聞かない時はこれで何とかなったりする。

なんだかんだでやっぱり子供なのだ。三時のおやつをよほど楽しみにしているようでそれを取り上げられると言う事は奈落の底に落とされるにも等しいらしい。

なので皆、一目散に各々の仕事に戻って行った。

この後コーヒーを差し出したお客に笑われたのは言うまでもない。

「はぁー……………騒がしいたらありやしねえ」

まあ、コイツ等が家に来てからそんな日常が気に入っている訳なのだが。恥ずかしいので絶対にコイツ等の前では言わない。

絶対にだ。

言ったら言ったで変に騒ぐから嫌なのだ。

「パパー！ ちゅうもーん！」

「はいはい……………って！ 字が汚くて読めねえー！」

レヴィから手渡された伝票を見ると意味不明な文字が書かれていた。いや、もはやこれは何かの模様の様である。

「レヴィはもっと字の練習をしなさい」

「これは酷過ぎる……………」

そんなレヴィの伝票を見たシュテルとディアも呆れかえってしまっている。

「なにをー！ 読めるもん！」



「じゃ、読んでみる」

「……………ゴーヤチャンプル」

「まさかの地球料理！？ そんなメニューはウチにはございません！」

「だってそう頼んできたもん！」

「嘘を言うな！」

ベシツとくだらない嘘を言うレヴィにチヨツプを食らわすとレヴィは泣きながらもう一度お客に注文を取りに行った。

「やっぱり、レヴィにはホールの手伝いをさせたのが間違いだっただろうか？」

「今更です。父上」

「ですよね〜」

と言ってもレヴィの奴は体を動かしていないと気が済まないのか、ジツとしている事が出来ない。お客もお客で元気のレヴィの姿を見て微笑ましく思っているらしいので別に気にはしないが

「お客が来ませんね。父上」

「そうだな」

シュテルが店の扉も見つめながらそう言っ  
て来る。

「ひーまー」

「そうだな」

レヴィは店の長椅子に寝っ  
転がりながらだらしなく言っ  
て来る。

「ふん！ 我の料理が食せぬと言っ  
のか！ 所詮、民衆にはわか  
らぬ味だっ  
たか」

「そうだな」

ディアは一人で腕組しながら何か偉  
そうに言っている。

「……………」

それにしても暇である。

時刻は3時過ぎ。いつもならそれ  
なりの人達がチラホラと店にや  
つて来るのだが今日に限ってそれ  
が無い。まあ、たまにはこうい  
う日があると俺は一人納得し、座  
っていた椅子から立ち上がり娘達  
に告げる。

「オヤツにするか」

「「「!?!?!」」」

予想通りの反応である。三人共その言葉を耳にすると目を見開いて俺の方を見て来るのであった。

「店のやつだが………まあ、いいだろ。ホラ、ショーケースから一つ選んで来い」

「「「はい!」」」

さて、客足が落ち着いて来た時間帯。と言うか店内にはお客がない状態。

本来ならお客が座るためのカウンター席に右からシュテル、ディア、レヴィの三人娘が座っていた。

「んじゃ。シュテルは母のショートケーキだったな」

「はい、ありがとうございます」

「ディアがチーズケーキと」

「ふむ、待っておった!」

「んで、レヴィがモンブラン」

「わーい! モンブラン」

三者三様の喜び様。目の前に差し出されたおやつに三人は目をキ

ラキラと輝かせている。

「飲み物はアップルティーだからな。熱いから気を付けろよ」

「……はい」

まったく、こつ言う時だけは素直に言う事を聞くのだな。

「父上は食べないのですか？」

「あん？ いや、溜まった洗い物が終わったら一息入れるよ。って、レヴィ。もっと行儀良く食べれないのか？」

「ふえ？」

気付けばレヴィの皿の周りにはケーキの食べ屑が散乱していた。よほど乱暴に食べたのかケーキの原型は滅茶苦茶になっており、レヴィ自身の口の周りにはクリームが着いている。

「ホラ。ジツとしている」

「ん……」

あまりにもみっともないので俺はナプキンでレヴィの口周りを綺麗にしてあげること。

「パパ、ありがとう」

「次からもっと綺麗に食べる」

「はい」

と、いい返事をするもまた乱暴にケーキを食べ始めるのだった。

まったく学習能力が無い奴である。シュテルやディアの様に綺麗に食べる事は出来ないのだろうか。いや、こいつにそれを求めるのは酷な話だな。

「くっ、その手があったかつ」

「侮れませんね。レヴィ……………」

何を言っているのだろうか？ ってか、さっきまで綺麗に食べてたのになんでわざわざ行儀悪く喰い始める？

「親父どの！ 口の周りを汚してしまった。取れ！」

「父上。私も」

「……………」

シュテルはともかくディアはなんか偉そうである。だが、さすがにこのままにして置く事も出来ないのでナプキンで二人の口の周りを拭いてやることにした。

さて、二人の口周りが綺麗になった所で洗い物を再開。こんなことなら暇だと感じた時に済ませておけばよかった。

「ち、父上」

「あん？」

洗い物をしている途中。突如シユテルが俺を呼ぶ。そして、いつもは落ち着いた物言いをするのだが、その時は珍しく言葉を詰まらせながらモジモジしていた。

「良ければ一口、どうぞ」

「お、いいのか？」

「はい」

ああ、シユテル。普段は物騒な言動ばかりではあるがこんなにも人に気遣えるいい子に育っているのだな。

父さん感激。

「では、あ〜ん」

「なんだ？ 食べさせてくれるのか？」

シユテルは自分のフォークでケーキを一口サイズに切り、それを俺に差し出す。どうやら、洗い物で手が使えないのを気遣ってくれたのだろう。うんうん、やっぱりいい子だ。

「あ〜ん」

「……………」

「うん、作った自分で言うのもアレだが、やっぱりうまいな。って、

どうしたんだ？ シュテル？」

「……………いえ、なんでもありません」

差し出されたフォークに乗ったケーキを食べ、その味に絶賛してしまう。これでも十分だと思いつつも今度にはクリームを変えてみるか思考を巡らす。

しかし、シュテルは何故か頬を赤くして俯いてしまっていた。いくら父親でもさすがに「あぐん」は無かったか？ だが、小さくガツツポーズをしているのは何故だろうか？

「……………シュテル、貴様」

「むー」

そんなシュテルの様子をジド目で見ている二人は何やら不服そうだった。

「さて、俺も一息入れるかな」

この後ディアとレヴィイからケーキのおすそ分けをしつこくもらうことになる。

「ごちそうさまです。

オヤツを食べ終えた娘三人は満腹の所為か今はお昼寝中。正確にはもう夕方なのだがそんな事は関係ないらしい。

食べて、遊んで、寝る。まさに子供の三大特権である。幸いこの店は俺の家も兼ねている。一階が喫茶店。二階が家と言った感じに。なので、娘達の世話にはさほど困る事もない。

「お待たせしました。ご注文の品です」

夕方にもなれば学校帰りの学生や仕事で一息入れにこの店に来る人も現れる。ピーク時よりは落ち着いている物のやはり、一人で全てをやるには忙しい。

「バイトでも雇うかな。いや、必要無いか」

「マスター。ただいま帰りました」

「おう、おかえり」

微妙ではあるが若干の活気がある店内。そこに一人の少女が入ってきて来る。

腰まで伸びた銀の髪。シユテルとは違う落ち着いた雰囲気を持つ少女。服装は近くのザンクト・ヒルデ魔法学院中等科の制服を着ており、手には学生鞆を持っている。

「レグナ。悪いが、店の手伝いをしてくれないか？ 一人だどうにも手が回らん」



「了解しました。すぐに準備を」

レグナと呼ばれた少女はそのまま二階へと上がり、すぐに下へ降りてくる。鞆だけを部屋に置いて来たのか服装は制服のまま、それにイソイソと前掛けエプロンを掛けて手伝う準備をしている。

さて、このレグナと呼ばれる少女は三人娘と同様に俺の娘である。が、本人は俺の事を『父』としてではなく、『仕えるべき人』と認識しており、三人のような娘と呼べない。まあ、それでも俺の家族には変わらないのだが。

なにげにこの子に「お父さん」と呼んでもらえる事が夢だったりするのは秘密だ。

「お待たせしました」

「ほい、3番にコレな」

「はい。あ、いらっしやいませ」

愛想は無いがミスも無く接客をこなすレグナ。何気にその落ち着いた雰囲気が高評なのか客も何も言わないので特に問題視もしていない。

「レ、レグナさん！ 今日美しいですね！」

「??？ ありがとうございます」

と言うかレグナがホールに出ると変な客が増える。主に男性。同

じ学校の生徒だったり、どこの若者からおっさんまで。

ハッキリ言おう！ レグナはかなりの美少女であると！

なのでここに来る大半の男性はレグナ目的だったりする。夕チが悪いのは最初に飲み物を注文して閉店まで居座るような輩がいる事。一度、最近流行りの『おはなし』をしてみようかとさえ思えてくる。

「マスター。どうかされましたか？」

「ん？ いや、新手の呪詛でもあればな〜と考えていただけだ」

「はぁ……………？」

しかし、レグナは自覚が無いのかこの集団が何故店に来るのがわかっていないらしい。いい感じで朴念仁なのである。

「親父どの……………」

「つと、なんだディア。起きたのか？」

「ん……………」

まだ眠気が取れていないのか目をゴシゴシと擦りながら店へと降りてくるディア。

「あーあーあんまり目を擦るなよ。後で痛くなるぞ？」

「……………だっ」

「はあ？」

「だっこ」

「こう言う時のディアはいつもと違ってかなり甘えん坊になる。現に今も両手を突き出して抱っこをねだって来ている。」

「ふー………よいつしょ。って、抱っこした瞬間また眠るのかよ」

「すーすー………」

「マスター。なんでしたら私が寝かしつけて来ます」

「いや、もう飯にするから皆起こして来てくれ。まあ、ぐずってすぐには起きないと思うけど」

「はい」

レグナからの嬉しい申し出を受け、俺はそっと寝ているディアをレグナに受け渡す。

「「「おお」………」

そんな様子を見ていたレグナ目的の男性陣から妙な声が漏れる。

「美しい。まるで我が子を抱く女神の様だ」

「結婚したらああいう嫁さんが欲しい」

「ってか、お義父さん。娘さんください！」

まあ、そんな気持ちになるのもわかる。四人の娘を持ちながら結婚経験が無い俺としてはああいう奥さんを持ちたいと思う。

だが、全員表に出る！ 『おはなし』の時間だ！ 特に最後の奴！ テメエは念入りにだ！

「マスター？」

「ん？ あ、いや。なんでも無いぞ。ディアを頼む」

「はい」

レグナはディアを抱えて二階に上がるのであった。それを見ていた野郎どもはとても残念そうな表情をしている。

しかし、そんな表情もつかの間。レグナが姿を消した途端に野郎たちの表情は真剣な物になる。もちろん、俺を含めて。

「……………さて、お前等。覚悟は出来ているんだろうな？」

「ここ『マテリアルズ』にはとある掟が存在する。

「き、今日こそは！！」

「あなたを倒してレグナさんを手に入れる！！」

「覚悟！ お義父さん！！」

「誰がお義父だああああ！！」

その掟とは『娘が欲しくば俺を倒せ』

いたってシンプルで馬鹿にも理解できる掟。

そして、始まるのは死闘。店内に結界を張り、外装が壊れないようにする。もちろん上に居るレグナ達に気付かれないように防音、振動も外に漏れないようにしてある。

己の願望を叶えるために俺と言う壁を乗り越えて行くこととする男達。その姿はさしずめ勇者である。そこは称賛しよう。だが、この壁を乗り越えるのは一筋縄ではいかないと言う事を教えてやる。

「娘は渡さーん！ー！」

今思えばどうしてこうなったのだろうと思う。が、気にしない。

「？ マスター。お客様はお帰りになられましたか？」

「ああ……………皆、帰ったよ……………」

「……………すみません。もう少し早く来れば手伝いを」

「いや、大丈夫だ。これだけは……………俺が何とかしなくちゃ、いけなかったから……………それより、皆起きたか？」

「?? はい」

今回の相手はなかなか強かった。まさか、オリジナルのデバイス持ちまでいるとはさすがに思わなかったぞ。なんだよ、最近のデバイスは携帯感覚で誰でも持てる物なのか？

それよりこんな相手にしてたらさすがにこっちの身が持たない。これは早急に対策を取らなければ……。

「パー！ お腹減った」

「へいへい、でもまだ出来ないからレグナと一緒に外の看板をしまつてくれ」

「はい」

一眠り済ますとやたら元気になるレヴィ。姿を現さないシユテルとディアはまだ寝ぼけているのだろうか？ まあ、飯が出来る頃には目を覚ますだろう。

「レグナ。僕も片付け手伝うぞー」

「ありがとうございます。では、そっちの掃除をお願いします」

「わかったー」

今日の営業も無事に乗り越えた俺達は店の片付けを始める。って、言っても俺は皆の晩飯を作るのに手が離せず、片付けはレグナとレヴィの二人がやってくれている。

それがいつも通りの一日の終わり。

後は飯を食って、風呂に入って、ちょっと遊んでまた寝るだけ。目が覚めればまた一日の始まって、また似たような日常を繰り返す。

「うっし！ こんなもんか。おい！ シュテルとディアを呼んで来てくれー」

「はい」

「レグナ。皿を並べるの手伝ってくれ」

「はい」

俺はそんな日常が好きである。だが一見同じような日常でもコイツ等のおかげで少し変わって見えたりする。その変化を見つけて笑ったり、泣いたり、怒ったり、様々な感情が現れる。

まあ、そんなこんなのがこの喫茶店『マテリアルズ』の日常。

どこにでもいる家族が経営する喫茶店の風景である

## 第一話 喫茶店『マテリアルズ』（後書き）

物語の時期的にはVividです。

なんの事件も無さそうだし、書きやすいんじゃないかねえ？というたっただけの案です。

後、マテリアルズとギンザンの出会いとかはこれから物語が進むにつれて書こうと思います。

感想とかありましたらお待ちしておりますね。



## 第二話 お菓子を作ろう！（前書き）

どうも和利夫です。

一話投稿しただけでお気に入りが90に。

……………何があつた？

恐るべし、リリカルブランド。

そして、一話だけでもお気に入りにしてくれた方々。

あえて言おう！

ありがとうございます！

カメラ更新ですがこれからも頑張らせていただきます！

## 第二話 お菓子を作ろう！

本日、喫茶店『マテリアルズ』は定休日である。

だが店が休みと言っても俺のやることは変わらない。

「ん、もう朝か……………」

時刻は早朝5時。朝日はまだ上り始めたばかりでまだ空は薄暗い。俺はまだ若干の眠気に襲われながらもモソモソとベッドから出て、服を着替える。

そして、昨夜の内に仕込みを終えた品を仕上げ、店の準備。もちろん明日出す分である。それが終われば娘達の朝飯とレグナの弁当も作ってしまう。ザンクト・ヒルデには学食があるらしいのだが弁当の方が安上がりでいいし、何より作っていて楽しい。

「ギンザン。おはよう」

「ん？ ああ、ヴィヴィオか。おはよう」

一通りの仕事を終え、店の外を掃除していると一人の少女が声を掛けてくる。この俺がヴィヴィオと呼んだ少女は毎朝この辺りをランニングしている。なんでも、小学校に上がった時から始めているストライクアーツのトレーニングの一環だとか。まだ小さいのによくやると感心されてしまう。

「今日もランニングか？ 毎日偉いな」

「えへへ。あ、こないだもらったお土産、ママにあげたらおいしか

「たったって言った」

「ハハ、そいつは嬉しいね」

「今度お礼を言いたいからお店の方に来るって！」

「そうかい？ 別にいいのに。あ、そう言えば、また試作を作ったんだが良ければまた味見してくれないか？」

「ほんとう！？」

「ああ、娘にも食べてもらったけど意見は多い方がいい。今度友達連れておいで」

「はい！！ 今日学校終わったら行きます！」

「ありゃ、そりゃ気が早いな。まあ、用意して待ってるよ」

「はい。それじゃ！ 失礼します！」

そう言って元気に走り去っていくヴィヴィオ。

「さて、試作の準備しとくか。材料あつたけか？」

そして俺は店内に入り、店内の清掃を始めるのだった。

しかし、その時俺はとある疑問を抱く。

「そう言えば、ヴィヴィオのお母さんってどんな人だろう？」

まあ、いいか。

どうも、はじめまして。シュテルです。

「と言う訳で試作のお菓子を作ります！」

どう言う訳かはわかりませんが父上がそう宣言すると私達は

「「「おー！」「」」

っと、とりあえず元気に返事をしました。

「じゃ、まず手を洗う！」

「「「はい」「」」

さて、まず状況を説明するとお店がお休みで暇を持て余した私達は父上が厨房で何かを作っている所を発見。何をしているかと聞けば今朝ヴィヴィオと会い、その時に試作のお菓子を試食しに今日来るとかでそれを作っているのです。

父上の作るお菓子はどれもおいしいです。だから、新しい物が出て来ると真っ先に私達に試食してくれと頼んでくるのは嬉しいですが、私達以外の意見も取り入れようとしているのは正直気に入らないで

すね。

「って、言ってもお前等に出来るのはデコレーションだけなんだがな」

そして、一人考え事をしていると父上は私達の目の前に一つのスポンジケーキを差し出し、三つの生クリームの入ったチューブを持たせてくれました。

「んじゃ、三人でこの生地をデコっちゃってください。俺は別のを用意するから」

「……はーい」

レヴィは早速丸裸のスポンジケーキにクリームをベタベタと塗り、ディアはその汚さに嘆いて几帳面にクリームを塗り直すのでした。出遅れた私も手にした生クリームの入ったチューブを力いっぱい捻り出しました。

「うわっ！ シュテル！？ 何をしているか!？」

「何事も全力全開です」

「思考が『オリジナル』と一緒にだ………ケーキを作るだけで毎回ブレイカーされても困るのだが」

「あんなのと一緒にしないでください」

「ブレイカーの所は否定せんのだな………」

何故、ディアは呆れた顔をしているのでしょうか？

そう言えば私が料理すると何故かディアと父上からストップが掛ります。特に火を扱う料理は絶対やらしてくれません。

何事も強火で料理すれば早いでしょうに。

まあ、そんなこんなで真っ白なケーキが完成。

「ほい、今度は果物乗せてくれ」

「……はい」「」

そして今度はクリームを塗り終えたケーキにフルーツを乗せることになりました。

「あ！？ レヴィ！ フルーツを食べるでない！！」

「莓おいしいー」

「あ、ブドウもおいしいです」

「シュテルまで！？」

だって、レヴィがあんなに美味しそうに食べるんですもの。食べてみたくるではないですか。

「……ウマァーイ！！」「」

結局三人でフルーツを食べました。美味しかったです。

でもその後、父上に怒られてしまいました。

「なんか、凄い事になりましたね」

出来あがったケーキを見て私は素直にそう思いました。

半分以上フルーツを食べってしまった、量が減ってしまったにも関わらずディアの機転によりフルーツを切る事によって解消され、フルーツケーキが出来あがりました。しかし、レヴィはそれで満足はせず、余ったフルーツもケーキに乗せ、見事に生クリームの部分が見えなくなっていました。

「お、なんかすごい事になってるな」

「父上」

「フルーツタルトでもこの量は出来ないぞ？　ってか、用意したフルーツ盛り合わせを半分以上喰ったのにどうやったんだ？　あ、薄く切ったのか」

それを評価してくれた父上は優しく私達の頭を撫でてくれます。

「ん〜」

「はあ〜」

「わふ〜」

父上の手はとても暖かくて心地のいい物でした。だから私は父上に頭を撫でられるのが大好きです。しかし、それはディアもレヴィも同様らしく、父上に頭を撫でられると見つともなく力が抜けた表情をしてしまいます。

きつと自分の顔もこんな風になっているのでしょね。

「そいじゃ俺のも出来たし、おやつにしますか」

「「「はい」」」

その後、父上が約束していた通りにヴィヴィオが友達を連れてお店にやって来て、皆でケーキを食べることにしました。

「闇統べる王！ デイア！」

「雷刃の襲撃者！ レヴィ！」



「星光の殲滅者。シユテル」

「『三人揃って！ マテリアルスリー！！』」

ババーンと言う効果音が聞こえたのは気の所為だ。

「あはは」

「仲がいいんだね」

「か、カツコいい！」

アレを見て何がカツコいいと思うかはさておき、ヴィヴィオに食べてもらおうお菓子作りが終わるとちょうどヴィヴィオが友達を連れてやって来たのだ。そして相手が自己紹介を終えると三人娘は対抗心を燃やし、冒頭のような自己紹介をしたのである。

「ディア。今度は僕がセンターがいい」

「ならぬ！ センターはリーダーの立ち位置！ レヴィなんかに務まるか！」

「ぶー」

レヴィはどうやら現状のポジションが不服らしい。

つと、何やらヴィヴィオ達がひそひそと話している。

「リオ・ウエズリーです！」

「コロナ・ティミルです！」

「高町ヴィヴィオです！」

「三人揃って！ チームナカジマ！」

長い上にネーミングがまんまである事に絶望した。

ん？ ナカジマって？

「今日はお招きありがとうございます」

そして、丁寧に一礼をするのはコロナと名乗った少女。

「これは丁寧に。始めまして、『マテリアルズ』の店主をします。ギンザン・イツキです」

なのでこっちも丁寧に挨拶を試みた。

「わ、私はリオって言います！」

「うん、派手な自己紹介だったね」

「「あつう……………」」

やって後悔しているのか、二人共恥ずかしそうに顔を伏せてしまう。話しを聞けばヴィヴィオが娘達の自己紹介に感化され真似たとか。

ってか、娘達のポーリングを見てカッコいいと言ったのはヴィヴ

イオであつた事に衝撃を受ける。

当の本人は娘三人とアレだコレだとポーズの話をしていたのは気にしない。

「んじゃ、皆で食べますか」

「「「「「はい!!」「」「」「」

子供が増えると返事するだけでやかましい。

だが、それがいい。

**第二話 お菓子を作るう！(後書き)**

ご意見・ご感想などお待ちしております。

### 第三話 旅行

「つー訳で一緒に行かないか？」

「何がどうなったらつー訳なんだ？」

現在、俺ことギンザン・イツキはいつも通りにカウンターでお客に出すコーヒーを作っていると目の前にいる客が突然そんな話をし  
て来た。

「流れる的に？」

「いや、聞かれても困るしその流れ自体が無いのだが」

「まあそう言うな！」

ちなみにこの客。名前をゲンヤ・ナカジマと言う。見た目は50  
代のオツサン。会話的にどことなく豪快さを持ったオツサン。時空  
管理局に務めるオツサン。

まあ、俺からすればただのオツサンであるが。

「なんか失礼な事を考えてないか？」

「別に」

うむ、相変わらず勘の良さだ。その勘の良さでいくつもの事件を  
解決して来ているのだから驚きだ。今では第108陸士部隊の隊長  
をしているらしい。

「で？ どうなんだ？」

「頼むから主語をいれて話してくれ。何がどうなってオッサンと旅行せねばならんのだ」

「オッサン言うな。オッサンだけど」

「で？ なんでさ？」

「まあ、久々に家族全員で休暇が取れてな。せっかくだからどこか出かけようって話になっただよ」

「なら、家族水入らずで楽しめよ」

「それもいいが。お前、チビツ子達をどこにも連れて行ってないだろ？ 家族サービスも立派な父親の仕事だぞ？ だから一緒に行かないか？」

ぐっ……………痛い所を突いて来やがった。

確かに、ゲンヤさんの言う通り店の事もあって最近ハマともニアイツ等とどこかへ出かけていない。

……………まあしかし、これはいい機会かもしれないな。

「……………わかったよ。行く」

「お！ 本当か？」

「何嬉しそうしてるんだよ。それで？ いつ？」

「来週の土、日曜日の一泊二日でスバルの友達がやっている宿泊口  
ツジがあるんだ」

「へー。スバルちゃんの交友は相変わらずだな」

「まあな。自然豊かでのどかな場所らしい」

「ふーん。自然豊かね〜」

このミッドチルダでは本当の自然なんて場所は数が限られているし、首都近辺にも自然公園つてのもあるがそれは本当の自然と呼ぶには怪しい。まあ、家族連れで遊ぶには問題無いと思うが。

「んじゃ、詳しい事はまた連絡するわ」

「了解。こっちも準備しておく」

「おっ」

そう言ってゲンヤさんは注文したコーヒーを飲み干し、代金を置いて帰ってしまった。

「さて、アイツ等に言っておかないとな……………」

「それは真か!? 親父どの!!」

「わーい! お出かけ〜!」

「私は父上と一緒にならどこにでも」

そんな訳でその日の夜に旅行に行くことを娘達に話した。

「だから、いい子にしないと連れてか無いからな。明日から必要な物揃えに買い物とか行くから準備しろよ?」

「「「はい」」」

そして現金な奴らだ。いつちよ前に言い返事をしやがる。

「マスター、準備が整いました。早速行きましょう」

突如部屋の扉が開いたと思ったらもうすでにお泊まり用のバックとそれなりの遊び道具を装備したレグナがそこにいた。

お前が一番ノリノリだったか。

「んじゃ、明日辺りに旅行に必要な物を買出しに行くか」

「何が必要なのだ?」

「えーっと……まあ、ゲンヤさんの話だと行く所は山みたいな所らしいからな。あ、川で遊べるみたいだから水着もいるな」



「水着！？ それはいかん！」

ディアさんなにがいかんのですかい？

「水着がいると言う事は我らの魅力を十分に引き出すチャンス！」

「はぁ……………？」

「我らの魅力に親父どのを悩殺せねば！」

ベシツと軽くディアの頭にチョップを叩き込みました。ディアは頭を押さえながら涙目になっている。

「痛いのだ〜。何をするのだ〜」

「馬鹿野郎。ガキが変な事を考えるんじゃないやねえ。第一、お前等みたいな未発達な体に俺は発情も何もしねえよ。変態と書いて紳士と読む輩じゃあるまいし」

「むっ、親父どのには我らに魅力が無いと言うか!?!」

「んな訳ないだろ。お前等は十分可愛い。もし大人になったら絶世の美女にでもなれるんじゃないか？」

「へ？」

「でも、そう言う事を考えるのはもう少し大人になってからしろ。今からそんな事を考えているんじゃないや将来が不安でならないっての」

「かかかかかかかかかかかわいい！？　ぜぜぜぜ絶世の美女……………」  
うまく、言いくるめたか？　ディアはほんと変なことばかり身に付けて困る。

「まあ、とりあえず明日はそこら辺の用意だな。今日はもう遅いから寝ろよ」

「こ、心得た……………」

おろ？　何故ディアの顔が赤いのだろう？

はっ！？　いかん！　まさか！！

「ちょっと待ちなさい。ディア」

「な、なんだ。親父どの　　うひゃっ！？」

まさかと思うが熱でもあるのではと思いディアの額に自分の額をくっつけてみる。

「熱は無いな……………うん、風邪でも引いていたらどうしようかと思っただぞ」

「あ、あわわわわ……………」

「うをつ！？　なんか熱くなった！？」

いきなりディアの体温が上がりくっつけていた額から熱が伝わってきた。



「父上のそう言う所が乙女心がわかっていないのだと思います」

マジか。

「おーい！ 帰ったぞ」

ギンザン達が旅行の話しをしていた同時刻。

マテリアルズを後にしたゲンヤも自宅に到着し、玄関で自分が帰ったことをいるはずである家族に告げる。

「あ、ギン姉！ パパリンが帰って来たッス」

「ん？ お父さん帰ってきたの？ おかえり」

「御苦労さまです。父上」

そして、そんなゲンヤの声に反応して娘であるウエンディ、ディエチ、チンクが父親の帰りを出迎えるためにゲンヤの目の前に姿を現す。

「おー、ただいま」

「もう！ お父さん！ 今日は早く帰って来るって言ったのに！ 御飯が冷めちゃうでしょ！？」

「うおっ、なんだギンガそんなに怒って。悪かったよ、今日どうしても寄りたい所があったからさ」

荷物を娘達に預けたゲンヤはそのままリビングのソファで寛いでいると今度はギンガと呼ばれた腰まで伸ばした青髪の女性が怒鳴りつけて来た。ゲンヤはいきなりの事にビックリしながらも自分が約束の時間より遅れて帰って来たことを謝る。

「寄り道？ お父さんが寄り道するって珍しいね」

「スバルよ。俺をなんだと思っているんだ？ 俺だって寄り道ぐらいするさ」

そして今度はスバルと呼ばれたボーイッシュな髪型をしている青髪の女性がゲンヤの隣に座り、他愛無い話しを始める。

「えー小さい頃は寄り道しないで帰って来いってうるさく言ってたのに」

「昔は昔だ」

「じゃ、今度私も寄り道して帰えろっつと」

「むっ、それは聞き捨てならないな」

「大丈夫だよ。ギン兄の所だから。お土産買って帰るから」

「「「ギン兄?」「」」

いつの間にかリビングにはゲンヤの娘達が集合している。ウエン  
デイ、デイエチ、チンクの三人はスバルの口から聞き覚えのない名前  
を耳にし口を揃えてそれは誰と聞いてくる。

「何を言ってるツスか? ギン姉は女ツスよ? それじゃ、お兄ち  
ゃんじゃないツスか?」

「ああ〜ギン兄はギン姉とは違うよ。私が勝手にそう呼んでるだけ。  
ほら、たまにマテリアルズのロゴが入ったケーキの箱あるでしょ?  
あそこの店長がギンザンって名前でギン兄って呼んでるの」

「なんだか紛らわしいわね」

「まっただ」

そんなスバルの説明に呆れるのはデイエチとチンク。だが、ウエ  
ンデイだけは一人で「お兄ちゃんかあ〜それもいいツスね」っと呟  
いていたが誰も気付かない。

「最近行ってないし今度行くのかな〜。あそこのアイス美味しいし、  
久々にシュテルちゃんと遊びたい!」

「シュテル? それは誰だ?」

「ギン兄の子供。なのはさんが小さくなった感じの子供だよ。もう、  
なのはさんみたいで可愛いんだ〜」

「ほう、子供がいるのか?」

「うん。長女のレグナちゃんにシユテルちゃんはやて隊長に似たデ  
イアちゃん。フェイトさんに似たレヴィちゃんって言う子もいるん  
だ」

「……………それは大丈夫なのか？」

「いや、私もはじめ見た時はビックリしたけど本人は三人と面識無  
いから大丈夫……………かな？」

「自信が無いのか……………」

「うわ……………今考えたらすごく不安になってきた」

つと、ギンザンについて説明していたスバルは一人で勝手に頭を  
抱えて悩み出した。さすがに友人であるゲンヤも顔を引きつらせ、  
チンクとデイエチはスバルをなだめ、ウエンディは「そのお兄ちゃ  
んは結構なやり手ツスか」とまた一人で何か言っているが誰も聞い  
ていない。

「ギンザンさんはそんなことしません！」

「え？ ギン姉？」

リビングで微妙な空気が漂うと突如ギンガが割って入ってくる。

と言うのが怒っている。

「パパリン。なんでギン姉は怒っているんすか？」

「ん？ まあ〜アレだ。アレ」

「アレじゃわかんないツスよ？」

「まあ、ギンザンは昔この家に居候しててな。その時に二人と仲良くなっただよ」

「????？」

「つまりだ。まだ小さかったスバルはギンザンの事を本当の兄の様に慕い、ギンガは小さい頃から若干大人びた性格をしていたためにギンザンを兄では無く異性として意識しちまったんだよ」

「ああ〜つまりそう言うことなんツスカ。納得ツス」

なるほどなるほどと頷くウェンディ。そして、口を三日月の様にして笑い、ゲンヤの顔を見直し、告げる。

「つまり、ギン姉の初恋の相手ツスね」

瞬間、金だらいを叩いたような音が辺りに響き渡る。

その正体はギンガが持っているフライパンがウェンディの頭に直撃した音であった。



それを見たその場にいた一同は一気に血の気が引いて行くのを実感したとか。叩かれたウエンディも目をグルグル回しながらその場に倒れてしまう。

「お、と、う、さ、ん。何を、言っている、のかな？」

ギンガはターゲットをウエンディからゲンヤに変え、手にしたフライパンを振り上げる。しかし、それはスバルの咄嗟の対処によって防がれる。まあ、ギンガを後ろから羽交い締めしているだけなのだが。

「ま、待て！ 俺はお前達程体が頑丈じゃ無いからそれは洒落にならない！」

「ギン姉！ さすがにそれはダメだよ！？ お父さんが死んじゃう！」

「うるさい！ 放して！ この人はここで黙らせないと私の話を続ける！ それだけは！ それだけはああああ！！！」

どうやらギンガにとってギンザンとの思い出は禁句らしいとその光景を見ていたチンクとデイエチは思った。しかし、それと同時に本当の事を言われてムキになるギンガの姿が可愛いと思ったのは秘密である。

「……………なに、コレ？」

「あ、ノーヴェエ。おかえり」

リビングでナカジマ親子が喧嘩　　ギンガが一方的に殴ろうと  
しているだけ　　をしているとリビングの入り口に一人の少女が  
呆けていた。デイエチはそんな少女の姿を見かけるとノーヴェと呼  
び、帰って来たノーヴェを出迎える。

「うん、ただいま。……………で、何があったの？」

「見ての通りの混沌だ<sup>カオス</sup>」

「はあ？」

何を言っているのだこの人はつと言いたげな顔しているノーヴェ。  
しかし、その説明だけで感覚的に納得してしまう。

父親であるゲンヤはソファアの影に身を隠して震え、姉であるギ  
ンガは息を荒くしてそれに襲いかかろうとしており、スバルはそれ  
を全力で止めようとしている。

ちなみに床で伸びてるウエンディは視界に入らなかった。

「ギンガ！　落ち着け！　実はそのギンザンについて話がある！」

「フー！　フー！」

「今度皆で旅行に行くだろ？　アイツも誘った」

「フー！　フー……………え？」

「それで今日遅くなったんだよ！　誘ったら行くって言った！」



「「「「はい?」」」」

そして、ギンガの予想外の言動に一同は思わず間抜けな声を漏らしてしまった。

何気にギンガの初恋は今だに続いていたりしたのだ。ギンザンが家にいた時から始まり、彼が管理局をやめてからもその気持ちは変わらず、影ながら彼の事を思っていたのである。周りはそんな気持ちに答えてくれない男のことなど忘れて別の男を作れと言うがギンガにはどうもそれが出来なかった。今までの人生で何人かの男性に食事を誘われたり、デートもしてみたがどうも違つと言う気になつてしまう。

この人はあの人程魅力的ではない。

この人と一緒にいても楽しくない。

あの人なら……………。

などとそんな事を何度も想い、気付けば他の男性とギンザンを比べてしまっているのだ。

そしていつしか自分の気持ちギンザンに向いていることに気付くのであった。

「そうだ！ ウエンディ！？ あなたいい洋服屋さん知らない？  
ねえ？ ねえ！？」

「わー！ー！ ギン姉！ ウエンディを揺らさないで！ 頭打つて  
るんだから！？」

「あうあう………」

未だに床で目を回しているウエンディの肩をつかみ激しく揺らすギンガ。スバルは自業自得？とは言えウエンディは頭に怪我を負っている。レスキューとしては頭を打った人の体を激しく動かすことを見過ごすことが出来ず、またギンガを羽交い締めしてまで止めようとしたがギンガの力は凄く止まらない。

「本当にカオスだな」

「うん」

「ああ」

そんな様子をただ傍観しているノーヴェ、ディエチ、チンクの三人は呆れ、ゲンヤは疲れがドツと出たのか深いため息をついていた。

## 第四話 出発！（前書き）

意外と早く書けた自分にビックリ。

では、本編どうぞ。

## 第四話 出発！

次元空港。第一世界ミッドチルダを中心にいくつもの次元世界を繋ぐ空の港。現在、ギンザンとその娘達はそこへやって来ている。

「つてか、集合早くねえ？」

「船が8時発なので十分かと」

「それなのに4時にお前に起こされた時はビックリだわ」

「……………」

さて、今日はゲンヤさんと約束の旅行の日。しかし、船が朝の8時に出るからと言って4時に起こされるのは勘弁願いたい。その所為でディアとレヴィは俺の背中中、シュテルはレグナの背中中寝息を立てている。

え？ 誰に起こされたかって？

そりゃ、今回の旅行を一番に楽しみにしていたレグナさんですよ。

出発は今か今かと待っている内に一睡も出来なかつたとか。普段は無感情で何を考えているのかわからないのに興味がある事にはかなり積極的になる。親としては嬉しい事ではあるが思考が一点に集中してしまうのは悪い癖だな。

「……………申し訳ありません」

「……………」

若干テンション高めから冷めたレグナは自分の行動を思い返して反省していた。

「それより、寝てないんだろ？　せめて飛行機の中では寝ておけよ？　でないと、到着した時には力尽きる」

「マスター……………」

実際少し眠たそうなレグナ。一睡もしていないのに空港に向かう途中の車でも寝ずにいたのだ。

「さてと、そろそろあの大家族が来るはずなんだが……………」

「ギー……………に……………」

「……………噂をすれば」

まるで閑古鳥の鳴き声が空港内に響く。声のした方を見ればボーイッシュな髪型をした女性がこっちにやって来ていた。

もちろんスバルちゃんである。

「スバルちゃん。ディア達が寝てるからもうちょいボリューム下げてくれ」

「あ、ごめん」

ちょっと声が大きい事を注意。ってか、こんな公共の場で人の名



前を大声で呼ぶのは何たる羞恥プレイ。

「わあ〜……………やっぱり、かわいいにや〜」

そして、チビツ子三人の寝顔を見てキャラが崩壊していくスバルちゃん。

これこれ、さすがにほっぺを突つつくのはやめなされ。

「……………あむ」

「はづうううっ!?!?」

スバルちゃんがディアの頬を突つついて遊んでいたら寝ぼけたディアがスバルちゃんの指をくわえた。そのあまりにも愛らしい行為はスバルちゃんの心を驚掴みにしてなのか、スバルちゃんはその場で悶え始める。

「やばいよ！ ギン兄！ 可愛いよ！ ねえ、一人ちようだい！

……………つてあれ？ だんだんと指が痛くなつて

ダダダダダッ!?!?!?!」

「……………ここよままくいちぎつてくれるわ」

あ、起きたかのか。うん、さすがのディアさん。典型的なお約束を見せてくれる。

「んー……………もう、着いたの?」

「……………なぜ、私だけレグナの背中なのですか?」

さて、スバルちゃんが今にも指を食いちぎられそうになっている  
最中、そのあまりの五月蠅さからレヴィとシユテルも目を覚ます。

「にぎやーーーーー！ ギン兄！ ギン兄！ た、助けてえー<sup>ー</sup>  
ー！」

「おい、ディア。指なんて喰ったら腹壊すからそれぐらいにしろ」

「ひかたない。きょうはこれくらいにしてやる」

「うつつ………酷い目に遭った。そして、ギン兄の私の扱いが酷い  
………」

なにを今更。

「さて、皆起きたし。ゲンヤさんの所に行こう」

「ウエンディ・ナカジマツス！」

「ディエチ・ナカジマです。はじめまして」

「チンク・ナカジマだ」

「……………ノーヴェ・ナカジマ」

そんなこんなでゲンヤさんと合流した俺達。始めて見るゲンヤさんの娘達が自己紹介してくるのであった。

「いやゝあなたが噂のギン兄ツスカゝ。会えて嬉しいツス！ あ、ギン兄の事をギン兄って呼んでもいいツスカ？ 答えは聞いて無いツス！」

かなりフレンドリーなウエンディ。

「あ、あの。いつも美味しいお菓子ありがとうございます」

礼儀正しいのはディエチ。

「……………スバルの言う通りだな。三人共あの人達と似ている」

あの人達とはどの人だ？

何故かチビツ子三人を見定めているのはチンク。

「……………」

そして、ノーヴェは俺を睨むようにこっちを見ている。まだ、言葉も発していないのに。

「あ、あの！ ギンザンさん」

「ん？ おおっ、ギンガ」

そして、スバルちゃんの姉であるギンガが登場である。

「元気にしてたか？」

「はい」

「ん？ どうした？　なんか顔が赤いぞ？」

「な、なんでもないです！」

はて？　なぜこんなに慌てているのだろうか？

「つと、それよりも……………」

「はい？」

「その子誰？」

気が付けば、ギンガの後ろには一人の少年がいる。

歳はレグナと同じくらいだろうか。だが俺を怖がっているのかギンガの背後に隠れて覗き見をしている。

「ハッ！？　ギンガまさか！」

「??？　どうかしました？」

「ついにお前にも結こ　　プゲッ！」

言い切る前にギンガの拳が俺の顔面にめり込む。

比喩じゃない。

マジでめり込んだ。

「もう！ そんなんじゃないありません！ ……それに、結婚するならギンザンさんと……………」

ぐっ……………あまりの痛みで最後の方はなんて言ったか聞こえなかった。

にしても、ギンガの奴以前に増して力が強くなってる。

「この子はスバルが連れて来た子でトーマって言うんです」

「まさかのスバルちゃんの子か」

「それも違います！！」

「ごめんなさい。だからその拳を納めてください。」

「……………ぷい」

「「???」」

「あははははっ」

ギンガとそんなやり取りをしていると突然トーマと呼ばれた少年が笑いだした。

「……………トーマが笑ってる」

「はあ？　なんでそんな不思議がるんだ？」

そんな笑いだしたトーマを見て一同は何故か呆けていた。

「すごいッス！　ギン兄！　トーマはちょっとした事情があって人見知りが激しいんッスよ。打ち解けるにもかなり時間が掛るッス。でも、会って数分でトーマを笑わすなんて感激ッス！　ギン兄には笑いの神様でも宿しているんッスか？」

やだよ。そんな神様。

……………にしても、笑わない子供ねえ。

まるで『昔の自分』みたいだ。

「よっ、トーマだっけ？　俺はギンザン・イツキ」

俺はトーマと同じ目線にしゃがみ挨拶をした。

「トーマ・アヴェニールです。今日からよろしくお願いします。イツキさん」

「ああ、堅いのは無しな。俺の事は好きに呼んでくれ。初対面なのに俺の事をギン兄って呼ぶ奴もいるし」

「なっ!? アタシの事ツスか!?!」

他に誰がいると言うのだ。

「あはは。……………えっと、じゃ僕もギン兄って呼んでいいですか?」

「別に構わんぞ。好きに呼べと言っただから」

「うん、ギン兄!」

トーマは俺の事をギン兄と呼ぶと嬉しそうに笑った。

「ってか、本当にトーマは皆が言う程人見知りなのか?」

とてもそうは思えないんだけど……………。

「出ましたね。父上の希少能力<sup>レアスキル</sup>」

「何！？ お前の父親はレアスキルを持っているのか？」

そんなトーマとギンザンのやり取りを見ていたシュテルがボソリと呟くと希少能力と言う単語にチンクが喰いついた。

「ええ。名づけるなら『子供たらし（チャイルドフラグメーカー）』です」

「むむう、世の中にはその様な希少能力が存在するのか……………」

「いや、それ絶対違うし……………」

と、ありもしない能力名を真に受けたチンクにノーヴェは小さくツッコみを入れる。

「ぐぐぐつ、ギン兄め。私もトーマと打ち解けるのに時間掛つたのに……………さすがだね！」

「妬んでるの？ 褒めてるの？」

そしてスバルはどちらとも言えない感じでギンザンを褒めたたえ、ディエチが不思議がっている。

「ディア。パパとトーマが仲良くなったよ。よかったね！」

「うむ。さすがは親父どの。……………しかし、いかん。あやつは我らの敵になるぞ」



「え？　なんで？」

「このままでは三人で独占していた親父どのの両手、肩車のいずれか一つがあやつで埋まってしまう！」

「な、なんだってー！？　ダメだよ！？　てっぺんは僕の場所だ！」

「何を言う！　頂点こそ王である我にふさわしい！　下郎は地面に這いつくばれ！」

「あ。でも、パパと手を繋ぐのも好きだからそれでもいいかも」

「なっ！？　ぐっ……………たまには変わってください」

つと、ディアとレヴィが変な事で言い争いになるかと思えば欲に負けディアが下手に出ていた。

「おーい！　そろそろ、船が出るぞー！　準備しろー！」

「……………はい……………」

最後にそんなゲンヤの声に一同が反応し、各々の荷物を手に取りその場を後にするのだった。

目指すは皆で楽しい時間を共有する場所へ。

「つまり、今回の旅行の目的はトーマに楽しい思い出を作っただけ  
たいって訳か？」

「そうだな」

臨行次元船の中俺は隣に座るゲンヤさんに今回の旅行の目的を聞いた。それと、トーマの生い立ちについても聞いた。

トーマは第3管理世界ヴァイゼンの出身で謎の襲撃者達に住む所と家族を殺され浮浪者として生きていた。そして、浮浪している途中に自主トレーニングをして来ていたスバルちゃんと出会い、保護され、『ほぼ』ナカジマ家の一員として生活をしていた。

ちなみに、『ほぼ』と言うのはまだ正式な家族の一員として迎え入れていないかららしい。まあ、スバルちゃんもゲンヤさんも近いうちに養子として引き取るつもりでいるらしいが。

「やっぱお前を連れて来て正解だったな」

「そうかい？」

「ああ、トーマもお前と会って楽しそうだ」

「それだったら何よりだ。ならば、そちらの思惑通りに楽しい思い出を作っただけじゃなくないか」

「そいつは頼もしい。まあ、メインはお前の家族で構わないからな。そっちもしっかりやれ」

「了解した」

ゲンヤさんは俺の反対側に座るレグナの方を見ていた。空港でも言った様に今は寝ている。

ちなみに、チビツ子たちはスバルちゃん達に任せた。レグナのおかげで俺も早起きだったからな。さすがに、眠い。

「まあ、それはそれとしてもう一つ今回の旅行には目的があるんだ」

「はあ？　なんだよ？」

「お前にちよつと会わせたい人がいるんだ」

「俺に？」

まるでイタズラを思いついた様な悪く笑うゲンヤさん。たぶん、俺とその人を会わせてどんな反応をするのかを想像したのだろう。

「ま、そいつは会ってからの楽しみだ」

「オッサンがそんな悪巧みした顔してもキモイだけだぜ？」

「キモイ言っな」

「なら、教える」

「嫌だ」

ガキかあんたは。

「まあ、お前にとって懐かしい人だ」

「懐かしい人？」

「それ以上は教えん」

「へいへい。会ってからのお楽しみにしておくよ」

などと言って俺は目をつぶり眠ろうとした。

ゲンヤさんの言う俺にとって懐かしい人とは誰だろう。

だがそんな悩みは襲い掛る睡魔によってどうでもよくなってなり、俺はそのまま目的地に着くまで眠りについてしまった。

無人世界カルナージ。

クラナガンから臨行次元船で約4時間。

一年を通して温暖な気候であり、自然がとても豊かな世界。

そんな場所にとある親子は住んでいる。

名をアルピーノ。母親のメガーヌと娘のルーテシアが住んでいる。

「ルーテシア〜。そろそろ起きなさい！」

「はい……………」

メガーヌの声に反応してルーテシアがまだ眠たそうにしながら姿を現す。

「また、ロツジの設計考えて夜更かししていたわね？」

「だって、後少しで完成するんだもん……………。今回は間に合わなかったけど……………」

「もう。もう二人は朝から私の手伝いしてくれてるのよ？ お客様ばかり働かせてどうするのよ？」

「うう〜……………」

地味に怒られた事によりルーテシアは眠たそうにしながらも機嫌を悪くしている。それを見かねたメガーヌは優しく娘の頭を撫で告げる。

「ほら、朝ごはん出来たから外にいる二人を呼んで来て。今日はあなたの好きなホットケーキにしたから」

「ホント！？ 二人を呼んで来る！！」

ホットケーキと言う単語に先程まで機嫌を損ねていたルーテシア

は表情を一変させ、素早くメガーヌの元から去ってしまった。

メガーヌもそんな現金な態度のルーテシアを見て微笑ましく思い、ニコニコと笑っていた。

「あ、そう言えばそろそろゲンヤさん達出発したかしら？」

そしてこれから来る客人達の事を思い出し、ふっと部屋のインテリアと一緒に置いてある写真建てを手に取った。

写真に写っていたのはかつて自分が所属していた部隊の写真。

中央には腕を組んで立っている隊長であったゼストの姿が。

そのゼストの前に自分と反対側には親友で同僚であるゲンヤの妻クイントの姿。

そして、そんな自分達に挟まれながら不機嫌そうな顔をして写っている少年の姿。

「ふふ。早く会いたいなあ〜ギンくん」

第四話 出発！（後書き）

明かされたギンザンの希少能力（笑）

もっといういネーミングは無い物か？



## 第五話 過去の因縁（前書き）

タイトル通り、シリアル展開な上長ったらしくなっていました。

まあいいか。

## 第五話 過去の因縁

メガーヌ・アルピーノ。

その人と俺の関係は同じ部隊の先輩と後輩と言ったものだ。厳しいゼスト隊長の元でしごかれ、共に現場で犯罪者を捕まえ、時には笑い、時には泣き、沢山の時間を共に過ごした人の一人だ。

だが、それも終わりを告げてしまった。

とある日、隊長率いる俺を含む少数部隊である研究施設の調査に行った時。それは起こった。一見、廃棄されたかと思われた施設内には当時管理局が悩みの種としていたガジェットが複数とそれを率いる戦闘機人との戦闘。ただでさえ人数が少ない部隊は相手の策略にハマってしまい、次々と倒されてしまう。

ゼスト隊長も。

クイントさんも。

メガーヌさんも。

部隊で唯一の生存者となった俺はそんな仲間の死を受け入れずにいたまま部隊は解散。それから先は酷い物だった。お世話になっていたゲンヤさんの家からも去り、ただひたすらに部隊を壊滅に追いやった奴等を追った。

この手で復讐を果たすために。

「ギーンく〜ん」

ヒラリ

「あ、あら？ もう、照れちゃって。かわいいわっね！」

ヒラリ

「なんで逃げるのかな？ 懐かしのお姉さん、よっ！」

ヒラリ

無人世界カルナージ。首都から約4時間の旅を終えたナカジマ家とイツキ家は目的地であるアルピーノ邸に到着した。

そして、そこに住んでいるメガーヌ・アルピーノは懐かしの人物に飛びつこうとしていたが巧みにそれをかわされてしまっている。

「もっつ！ なによ！ ここは感動の再会とかじゃないの!？」

数十年ぶりに出会った二人。だが、メガーヌの感動の再会はもう一人が逃げ回る事により空回り。

そしてそのもう一人はと言うと……………。

「うっさい！ 来るな！ 俺はお化けなんか信じないぞ！！」

「はっはっはっは！！ お前まだそう言うのダメだったのか！？  
相変わらずだな！！！」

「うっさい！ 初めに説明してくれれば良かったんだよ！」

先程までメガー又さんと鬼ごっこ染みた事をしていたのは他でも  
無い俺、ギンザン・イツキである。

あの後、事情の説明を受けた俺は彼女が幽霊ではないと解り、や  
っと落ち着きを取り戻したのであった。

「ギンくん、酷いわよ……………幽霊でも会えて嬉しいとか言ってほし  
かったわ」

「無理っす。あの類だけはどうしてもダメっす！」

「おかげで涙を流すような感動の再会が台無しよ」

「……………それは面目ないと言えない」

だっていきなり目の前に今まで死んだと思っただ人が現れるんだぜ？

幽霊や妖の類と疑わないでなんと思えっただ。

「でも、メガー又さん。本当にメガー又さんなんですね？」

「ふふっ、そうよ。信じてくれる？」

「……………まだ半信半疑ですけど……………本当によかった」

やべっ、少し涙腺が緩くなったのかな？ 今にも泣きそうになる。

「お姉さんの胸で泣いてもいいのよ？」

「いや、それは遠慮しておきます」

「あんっ、昔は素直で可愛かったのに……………」

歳甲斐にも無く可愛いしぐさをするメガー又さん。それがまた似合っているからたちが悪い。

「それにしてもあのギン君が子持ちとはね、時が流れるのは早いわ

」

あなたを見ているとまったくそんな事無いと思います。

「ルーテシア〜！ おいで〜」

そしてそんなメガー又さんに招かれてメガー又さんそっくりの一人の少女が姿を現す。

「紹介するわ。娘のルーテシア」

「ルーテシア・アルピーノです。ママからギンザンさんの事は聞いています」

「ん？ ちなみにどんなこと？」

「もしかしたら私のお兄ちゃんになったかも知れないって」

チラリ。

「……………ル、ルー？ い、いきなりそんな事言っちゃだめよ？  
ギン君も困ってるじゃない」

「えー私この人ならお兄ちゃんでもいいのに。もしくはパパでも可」

「はっ！？ ルーテシア！ あなた天才だわ！！ そうよ、私は十年近く眠ってたんだし、その間肉体的には歳取ってない！ 今なら歳の差夫婦とかじゃなくて許容範囲内の結婚が可能ね！ と言う訳でギン君！ 結婚して家族になりましょ！！」

「しねえーよ」

冷たく一蹴。俺の一言にメガー又さんは地面に手を付いて落ち込んでしまった。

「そんなに否定しなくてもいいじゃない」

いや、いきなり結婚とか言われても困るだけだし。なにより実の娘が信じられない物を見たって感じになってますよ？

「……………こんなママ見た事ない。むしろ、あまり見たく無かった」

「えー！？　なんでよー！？」

「実年齢と精神年齢が一致して無いのはしょうがないけど、それを披露されると娘として複雑……………」

もはや容赦無い言葉だった。ってか、俺より酷くね？　メガー又さんもそんな娘の言葉にさらに落ち込んでしまったし。

子供って何気なく大人を傷つけるよね。精神的に……………。

「め、メガー又さん……………元気出してください」

「その優しさが心に染みるわ……………」



「なんか保護者組で盛り上がってるツス。それにギン兄がオカルト  
苦手とは……………えらいギャップっすね」

「ってか、ギンザンさんとメガーヌさんって知り合いだったのか？」

「えーっと……………うん……………」

ギンザンとメガーヌとのやり取りを見ていた一同は状況について  
行けず、なんとなくその場に取り残されていた。

しかし、そんな一同の中でスバルはこの状況を良くないと感じと  
っていた。

「（そう言えばギン兄ってお母さんと一緒の部隊にいたんだっけ。  
どうしようすっかり忘れてたけど、これってかなり不味いのかな？）

スバルは小さい頃とは言え、ギンザンと母であるクイントが同じ  
部隊にいた事を知っている。そして、母と親友で同期であるメガー  
ヌもその一人だ。なので、ギンザンとメガーヌが知り合いだと言っ  
るのは前から知ってはいた。

どうして母達の部隊が壊滅したのかも知っている。

その原因はスカリエツティである。

当時の母達は戦闘機人関連の事件を追っており、最悪な結末を迎  
えてしまった。母は死に部隊の隊長であったゼストとメガーヌは人

造魔導師素体として連れ去られ、致命的な傷を負いながら奇跡的に助かったギンザン。

そして、生き残ったギンザンがそれからどれだけスカリエツィを恨んだかも知っていた。

当時のスバルとギンガはそんなギンザンが怖くてしかたなかった。

他者を寄せ付けず、差し伸べる手を全て振り払い、ギンザンは一人になる事を選んだ。管理局もやめ、ゲンヤの家も出て行き、一人で何もかも背負いこもうとしていた。

そんな人を見てスバルは弱かった自分が許せず、兄のように慕っていた人を助けられない自分を呪った。他にも要因はあるがスバルの信念はそんな所から来ている。だから己を鍛え、強くなり、管理局に入隊し、見事に過去の因縁との決着を果たす事ができたのだ。

しかし、事件を解決して再会したギンザンは昔のように憎しみに捕らわれておらず、家で暮らしていた頃のように優しい顔になっていた。

しかも四人の子供を引きつれて。

ゲンヤは何か吹っ切れたギンザンを快く歓迎し、ギンガは子供達の顔を見てシヨックを受けてたりもした。

スバルは自分の力でギンザンを救いだせなかった事に少し残念な気持ちになったが昔の彼が戻ってきたかのようでそれがたまらなく嬉しく、そんな事どうでもよくなっていた。

「（吹っ切れた感はあるけど………やっぱり、言わない方がいいの

かな？」

さて、ここでスバルが考えている悩みとはノーヴェ達のことである。

直接的では無いとは言え、ノーヴェ達は元スカリエッティの一味であり、母の所属していた部隊を全滅させている。

もちろん、そんな事でノーヴェ達に非は無い。だが、果たしてギンザンはそれで納得するかが解らなかつた。もし、ノーヴェ達が元スカリエッティの一味と知ればギンザンはまた復讐に捕らわれた頃に戻ってしまうのではないだろうかと不安になる。

「（でも、そんなの時間の問題だよ………いずれは、知られる事かもしれない。でも、どうすれば………）」

なので悩んだ。

「（タイミングを見て、話してみよう。………今のギン兄だってきっと解ってくれるはず）」

悩んだ結果。平穏な日常に最悪な結果なんていらないうつ答えに辿り着く。それを回避するためにも、スバルは真実をギンザンに話して彼女達を許してもらおうと思った。

「おーい！ スバルちゃん！ 荷物置いたら川に行こうぜー？」

「え？ あ、うん！」

さて、メガー又さんとの微妙な再会を果たした俺達は水着に着替え、アルピーノ邸近くの川にやって来ている。

ちなみに、子供達の引率は俺とギンガで担当。もういい歳のゲンヤさんは家でのんびりしており、メガー又さんは飯の準備をするとか。俺も手伝うと言えば何故か子供達の面倒を見てくれと言われそうした。

「わー泳ぐなんて久しぶりです！」

「うん、たまにはいいよね？」

そう言うのはピンクの髪をしている少女と赤毛の少年。それと小さな竜がいた。

「つてか、誰だ？」

「えーっと……一応、ルーの自己紹介辺りからいたんですけど……エリオ・モンディアルです」

「キャラ・ル・ルシエです。この子はフリードって言います」

「きゅ〜」

「そうだったか、これは失礼したな。俺はギンザン・イツキ。クラ

ナガンで喫茶店を運営しているから、もし来ることがあったら寄って  
くれ」

「はい！」

うん、元気のいい返事だ。

「パパーコレ膨らまして〜！」

「はいはい」

そして、元気で負けないレヴィがしぼんだビーチボールを持ってやってくる。スポーティなタンキニタイプの水着の着替えており、いかにもこれから活発に遊ぶと体現している。どうやら自分で膨らます事が出来ないのので俺に頼んで来たらしい。

「ふえ、フェイトさん!?」

「??？」

はて? レヴィの姿を見たエリオとキャロが声を揃えて驚いた。

最近娘と初めて会う人は何かしら誰かに似ていると言う。主に管理局務めの人に。

「フェイト? 違うよ? 僕はレヴィってカッコいい名前があるんだ!」

「え? あ、そいうだよな。ごめんね。僕はエリオ」

「えーっと、キャロです。こっちがフリード」

「きゅ〜」

「わードラゴンだ！ かっこいいー！」

「きゅい〜」

レヴィがフリードを褒めるとフリードも嬉しそうにし、くるくるとレヴィの頭上を飛びまわり、レヴィの頭の上に止まる。

「あ、だめだよフリード」

「わーい！ ドラゴンと合体！ これで僕は最強だね！」

アタイったらサイキョーね！ みたいなの？

「エリオ、キャロも一緒に遊ぼう！」

「「え？」」

「パパ〜！ 早く膨らませて〜」

「今やっとするわい！ フー」

どうやらレヴィは二人と遊びたいらしい。なので早くとせがむレヴィの要望に答えて俺はビーチボールに空気を入れた。

「ほい、出来た」

「わーい、ありがとう！ エリオ、キャロ！ 行こう！」

「うわっ！」

「あ、待って」

出来あがったボールを持ってレヴィはエリオの腕を引っ張り、キヤロもその後続く。さらに続いてトーマも加わり、ルーテシア、ウエンディ、ノーヴェ、デイエチ、チンクもそれに続いてみんなで遊んでいた。

「親父どの……」

「父上……」

「あん？ どうした、二人共」

そして今度はディアとシュテルが登場。

ちなみにディアは子供用のビキニタイプの水着である。旅行に行く事が決定した日にあんな事をほざいていたのに懲りて無いらしい。まあ、可愛いから良しとする。

もう一方のシュテルは子供らしさを引きだしたレオタードタイプにひらひらのスカートが付いた水着。

そんな二人が何やら暗い表情でこちらを見ている。

「浮輪を膨らませてください」

納得。レヴィ同様自分の肺活量では浮輪を膨らませる事ができないらしく俺に頼んで来たのだった。

何気にこの二人は泳ぐ事があまり得意ではない。だから、こつ言った水場で遊ぶには浮輪が必要不可欠なのである。

「了解。膨らませたら泳ぐ練習でもするか」

「真か！？ ならば手取り足とり」

「私は他の事も教えて」

二人が言い切る前に脳天チヨップを食らわす。

まったく、どこでそんな知識を覚えて来るんだか……………。

「ほい、出来あがり。んじゃ、準備運動してからな」

「こ、心得た……………」

「はい……………」

脳天にチヨップを食らった二人は頭を擦りながら返事をした。

そして始まる俺主催の水泳教室。

「つても、バタ足している二人を引っ張るだけなんだけどな」

準備運動を済ませた俺達は早速水に浸かり、二人が俺の手を持って一生懸命バタ足をする。



浮輪は念のために装備させているので俺が引つ張る事もないのだがどうやら二人はそんな補助をも必要とするぐらいうまく泳げないらしい。

「何を言う！　もしもの時があるではないか」

「そうです。浮輪があっても父上の補助無しではうまくいきません」と言いながら必死に俺の手を離さないように掴んでくる二人。

とりあえず、まずは浅いところで一人で泳がしてみるかな？

「あ、ギン兄。みんなも早速遊んでるな」

「ん？　スバルちゃんか？　やけに遅」

不意に背後から声を掛けられた俺はその声の主の方を振り向く。そして、言葉を詰まらせた。そこに居るのはスバルちゃんだけでなくギンガもいたのだ。

スバルちゃんはギンガの横でニヤニヤしており、ギンガは恥ずかしそうにモジモジとしている。

なぜ恥ずかしそうにしているかって？

ギンガさんは肌の露出がすごいビキニの水着を着ておるからです。ギンガの性格から絶対チヨイスされる事の無い水着。思わずそれに見惚れてしまったのは言うまでもない。

「あ、あの……あんまり、見ないでください」

「何言ってるの？ 似合ってるよギン姉。ギン兄もそう思うでしょ？」

「あ、ああ。似合ってる」

ってか、似合いすぎてそれしか言葉が浮かばない。ギンガは管理局でも前線に立つ事があり、かなりの運動をしている所為でスタイルシユな体型をしている。だが、それでも出ている所は出ていて、引込む所は引込んでいるのだが。

「父上、鼻の下が伸びてます………助平ですね」

「くっ！ やはり、胸なのか！？ いや、尻なのか！？」

何を言いますかこの子たちは。男なら当然の反応だ。

それと、ディア。今後について少しオハナシするか。

「……ぎ、ギンザンさん」

「いや！？ 違うからな！！ ディアが勝手に言ってるだけだぞ！俺はそんないやらしい目で見ない！ 純粹に綺麗で似合ってるって思ったただだからな！？」

「き、綺麗………」

娘達の言葉にジド目で見て来るギンガとスバルちゃん。

俺はそんな視線に耐えきれず言い訳をしたのだが何故かギンガは顔を赤くしてその場でうずくまってしまった。

「お、おい、大丈夫か？ ギンガ？」

「な、なんでも無いので近づかないで！」

「え？ あ、悪い」

突然うずくまるから体調でも悪くしたのかと心配し、ギンガに近寄ろうとしたのだが拒否られた。

……………あれ？ 俺嫌われてる？

「えーっと……………とりあえず、ギン姉は大丈夫だよ」

「それならいいが……………」

スバルちゃんの前フォローにより俺の心はギンガに拒否された事により心は砕かれずに済んだ。

「……………あのね。ちょっとギン兄に話があるんだけど？」

「あん？ どうした、あらまたって？」

「えーっと……………ちょっとこじや離しにくくて」

少し困ったような顔をするスバルちゃん。それでいて、普段陽気な彼女からは想像も出来ない真剣な顔つき。それは何か覚悟を決めた様な表情であり、俺はそんな彼女を見て大人になっただんなあゝ

つと感心させれてしまう。

「……………そうか。ギンガ、すまないがちょっと子供達を見ていてくれ」

「え？ あ、はい」

不謹慎ながらも俺はそんな成長した彼女がどんな話を繰り出すのが楽しみだったりした。なので、子供達をギンガに任せてスバルちゃんの後に続くことに。もちろん、ディアとシユテルは俺が行く事に決ってはいたが話が終わったら盛大に遊んでやると約束して納得してもらった。

「……………いいだろう？ で、話って？」

現在、私とギン兄は川の上流に位置する所に来ている。

「……………ちゃんと話すって決めたんだ！ 弱気になるな私！」

不安な気持ちを無理矢理押さえ込んで気持ちを整理する。

落ち着くために深呼吸もした。

うん、大丈夫と自己暗示も掛けた。

「ノーヴェ達の事なんだ」

そして若干震えた声で話を切り出した。

「……………今では家族だけど。ちょっと前までノーヴェ達とは敵同士だったんだ」

「敵？」

「……………ジェイル・スカリエッティ」

その名前を聞いて、ギン兄の表情が変わる。

それは家を出て行った時に見せた顔。

他者を拒絶し、復讐だけを考えていた時の顔。

このまま話しているのだろうかと不安になる。もし、話してノーヴェ達の事を嫌いになってしまったらどうしようと思いが巡る。

「ギン兄がスカリエッティをどう思っているかは知ってる……………」

でも、やっぱりノーヴェ達がこれまでどうして来たかを知ってもらいたい。

だから、話す。

「ノーヴェ達は私と同じ戦闘機人でね。スカリエツィに作られたの…… 4年前は敵として戦ってた。でも！ 事件が終わった後にお父さんとギン姉とかの更生プログラムを真面目に受けて、ちゃんと罪を償ってるんだよ！ チンクは妹思いでみんなの面倒見てくれるし！ デイエチは優しいし、ウエンデイは明るくていつも笑わされるの！ ノーヴェも最近知り合いの子供達にストライクアーツとか教えている！ みんないい子なんだよ！」

「……………」

最悪な結果になってしまふ可能性があるを知っていると泣きそうになる。でも、涙は流さずに話を続けた。途中、声が出なくなりそうになったりもしたがこれまでの彼女達の事を沢山喋った。

ギン兄がどれだけ苦しんだか解ってるつもりだ。だけど、ギン兄に彼女達の事も解ってもらいたかったから。だからなりふり構ってられない。

あなたの憎むべき存在はもういない。

だからそんな憎しみに捕らわれずに自分の娘と平穏に暮らしてくださいと伝えたかった。そして彼女達の事も許してほしいと。

「別にもう恨んでないんだが………」

「……………へ？」

だが、ギン兄の言葉を聞いて拍子抜けしてしまう。

「な、なんで!？」

「んー……………まあ、スバルちゃんの話してくれたノーヴェ達の事は実はゲンヤさんに聞いてるし、チンクに初めて会った時は『あ、コイツ部隊を壊滅させた戦闘機人だ』って程度しか思えなかったんだよ」

「え!?! ええええええええ!！」

意外だった。よくよく考えればお父さんがそんなことも考えずギン兄とノーヴェ達を会わせるはずが無い。とりあえず、娘である自

分にそんな大事な話しをしなかった父を後で殴ろう。でなければ気が済まない。

だが、直接手を下したチンクの存在に気付いていながら何とも思わないのはどうなのだろうと思った。そんなにもあの時抱いた憎悪はそんなにも軽い物だったのか？

そんなはずは無い。

少なくともあの時のギン兄は母さんや大切な仲間を殺されて、まるで目に見える物全てが敵と言わんばかりの雰囲気を感じ、怖かった。

「どうして、そんなに吹っ切れるの？」

なので聞いてみることにした。

「そりゃ、初めは憎んでいたさ。俺の大切にしていた人達を奪って、憎くて、憎くて、殺してやりたかった」

「……………」

あの優しいギン兄の口からそんな酷い言葉が出ると私は思わず体を硬直させてしまう。

「でも、そんな時に娘達に会ったんだ」

「え？」

そして、いつもの優しい笑顔で告げる。



「なんて言うか……アイツ等の存在は俺の闇を光で照らしてくれるんだよ。で、いつしか憎しみよりもコイツ等を守りたい。コイツ等という日常を守って、一緒に笑って、喜んで、泣いて、落ち込んで、色んな事を感じたいと思ったんだ。そんな事をしてたらスカリエツテイとか考える暇が無くてな、いつのまにか憎しみが薄れちゃったんだよ。だから今の俺はあいつ等を恨んだりしてない」

「……………ギン兄」

「にしても、まさかスバルちゃんがあの時の決着を付けてくれるとは思っても無かったな。……………うん、ありがとう。それから、強くなったね」

ギン兄にお礼を言われて私は今まで溜めていた感情が爆発する。

「う、うわああああああん!!」

「つて、うお!? どうした?」

なんてことない。

ただ泣いた。

不安だった気持ちを吐き出すようにただ泣いた。

「よがっだ! よがっだよ!!」

「はあ……………少しは大人になったと思ったんだけどな。やっぱり、スバルちゃんはスバルちゃんだ」

「ぐずっ……………どう言う意味？」

「成長しても根っ子は変わらないって事」

「なにそれー！」

「そのままの意味だー！」

あまり褒められていない気がする。

ちよつとムカついたので拳を突き出したが見事にかわされてしまった。

「避けるなー！」

「はっはっは！ 遅いわ！ 拳が止まって見える！ って、うわ！？」

自分のパンチが巧みに避けられる物だから私はムキになって追撃をしていると調子に乗ったギン兄は足を滑らせて川に落ちてしまった。

ざまあーみる！ そして、チャンス！

「覚悟はいいね？ ギン兄？」

「ま、待て！ 現役レスキューの馬鹿力で殴られたら洒落になん無えって！？」

「問答無用！ 一閃必中！ デイバイイイイイン」

「はああああ！？ もはや物理攻撃じゃない！ 生身の人間に高速砲は」

「バスタアアアアアアアアア！！！」

「ぎゃああああああああああ！！！！！！！！！！」

自然豊かな森の中でギン兄の悲鳴が木霊する。私のデイバインバスターをもろに食らったギン兄は気を失い、そのまま下流まで流されて行ってしまった。

「はぁー！ スツキリした！」

ほんと、色んな意味で。

「マスター。何をしていますか？」

「……………絶賛死にかけ中だ。レグナこそ何をしています？」

「川と言ったらフィッシングと本にありましたので、フィッシングを」

「……………この川、魚いないぞ」

「なんと」

## 第五話 過去の因縁（後書き）

ごめんなさい、ギンザンの立ち位置を明確にしようとしていたらマテリアルズが存在が薄くなっている……………。

今回はこそはそんな彼女達にスポットを！！

……………できるだけ浴びせるようにします。

第六話 意外な才能（前書き）

前回話しを重くし過ぎた事に反省。

ま、いいよね？

## 第六話 意外な才能

スバルちゃんの話しを聞いてからちょっと。

川遊びから帰った俺達は現在アルピーノ邸のリビングに集まっている。メンバーは俺、ゲンヤさん、メガー又さん、スバルちゃん、ギンガ、チンク、ノーヴェ、ウエンディ、デイエチ。つまり、子供達以外のメンバーが集まっている。

そんなメンバーが集まって何をしているかと言うと………まあ、俺の身の上話しをしているのだ。そして、その話しを聞いたノーヴェ達4人は暗い表情をしていた。

「………まあ、そう言う訳だ。俺はお前達にとにかく言うつもりは無いし、何もするつもりも無い」

「だが！」

声をあげたのはチンクだった。

「あの時の子供があなただったなんて………私は、取り返しのつかない事をしてしまったんだ！　なのになんでそんな簡単に許せる？」

「言っただろ？　色々あって、恨みよりももっと大事な物を見つけたって」

「………しかし」

「はあー……………わかった。なら、ごうじよう。俺はお前を許さない」  
「え?」

「許さないから、お前等がこれからどういつ風に罪を償うかを見せろ。それで俺が満足した時、俺はお前を許してやる」

「……………」

それで全部チャラだ。

俺がそう言っているとチンクは顔を伏せてしまい、声を殺して泣いていた。

隣に座っていたデイエチはそんなチンクを支えるように寄り添い、優しく包む。

「覚悟しろよ。俺の残りの人生全部使ってお前等の事を見るかな?」

「……………ふふ、ならば気を付けなければな」

「ああ。……………んじゃ、この話はお終いだ」

さて、重く苦しい空気が漂う中で俺はこの話題を切り上げる。これ以上楽しくなるはずの旅行がお通夜みたいに暗くなったらたまらん。

そもそも、俺達は遊びに来たんだ。楽しみに来たのに何が悲しくてこんな重い空気を作らなければならんだ!



「まあ、これにて一件落着だな。ギンザン、家に戻って来る気は無  
いのか？ 俺は歓迎するぞ？」

「嬉しい申し出だけど俺には俺の家族がいるからな。ま、たまにそ  
ちに遊びに行くぐらいはするようにするよ」

「うーん……そうか、そうだな。いつでも来い」

「ああ」

ゲンヤさんの申し出を断ると少し残念そうにしていたが、たまに  
遊びに行くと言ったら嬉しそうに笑った。

「パパリン。もう、ギン兄とギン姉を結婚させちゃえばいいと思う  
ツス。ってか、私はギン兄みたいなお兄ちゃんが欲しいツス!!」

「ふえ!?」

そして、何を言い出すかと思えばウエンデイがとんでもない事を  
言いだした。

ギンガも突然の事で変な声で驚いている。

「おお！ そいつはいいアイディアだ！ ギンガ、俺が認める！  
ギンザンと結婚しろ！」

「ええええええええええ!!!!」

おいおい二人共。ギンガが困ってるぞ。

ギンガもこんなおじさんと付き合うなんて嫌だろう。

「……………本気で言ってるんスか？」

「ああ……………こいつは昔からこう言う奴だった」

何故落ち込む？　そして何故ギンガも落ち込む？

一方、子供達はと言うと……………。

「すげえー！　カッコいいー！！」

「うむ、なかなかだな」

「まるでダークヒーローみたくて素敵ですね」

順にレヴィ、ディア、シュテルがある物を見て感激をしていた。

「良かったわねガリユー。みんなに喜んでもらえて」

「……………」

三人の視線の先にはルーテシアの召喚獣であるガリユーがいる。

主であるルーテシアは三人の意外な反応に驚きもしたが、それよりも三人に見られているガリユーの反応に面白いと思ってしまうた。

三人に純粹に尊敬の眼差しで見られているガリユーは珍しくどう対処していいのか解らないでいたのだ。

大抵の人はガリユーを見れば驚き、警戒する。だが、この三人はそんな事無く純粹にガリユーの存在に憧れを抱いている。

「忍者！ 忍者みたい！」

「おお！ それは言い例えだ！ 闇夜に忍ぶ影！ まさにお主にふさわしい！」

「そのマフラーも古風でいいですね」

褒めるに褒める三人。もはやガリユーはタジタジであった。

「あんなガリユー見た事ないね……………」

「うん、なんか可愛い」

「すごいなー三人共」

そしてそんな様子を見守る様にしていたのはエリオとキャロとトーマの三人だった。何気にこの三人は先程の川遊びでかなり仲良くなっていたりする。

「ね！ ガリユーは忍術使えるの？」

「忍術？ なにそれ？ 魔法の一種？」

「この前パパが持ってたDVD見てたらガリユーみたいなのがドロンって煙に包まれて消えちゃうの！」

「へえーそんなのがあるんだ？ 煙は出ないけどガリユーは消える事ができるわよ？ ガリユー」

レヴィの要望に答えてルーテシアはガリユーに消えるように指示するとガリユーがその場から姿を消してしまった。

それを見ていたチビツ子三人組みは「おおー！ 消えた！」と大はしゃぎ。ルーテシアもただガリユーが消えただけでここまではしやぐとは思っておらず、ちょっとビックリしてしまう。

「あ、そうだ」

「「「???」」」

そして、何かを思いついたルーテシア。

「これからガリユーと鬼ごっこしましょう！ 捕まえた人には私が良い物をあげるわ！」

「「「良い物？」」」

「それは捕まえてからのお楽しみ」

「わかった！」

「ふっ、我が捕まえて褒美を頂く！」

「おもしろいですね。私の培った戦略が生かされる時です」

こうして、ガリユールとチビツ子三人組との鬼ごっこが開始されたのだった。

ルーテシアの提案により始まったガリユールと子供達のかくれんぼ。しかし、ガリユールはある事に疑問を抱いていた。

……………おかしい。

主人の命で自分はその子供達の相手をして鬼ごっこをしているのだが……………おかしい。

「あつ！ いた！」

「待てー！」

「逃がしません！」

また、見つかった。

さすがに擬態して姿を消すと見つからないので姿を現しているのだがことごとく子供に見つかってしまふ。人に見つからないように隠れる事は得意であり、自分の誇れる能力だと自負している。なに何故かあの子供達はことごとく自分の事を発見してくるのだ。

普通に物影に隠れていても。

「いた！ 捕まえろー！」

屋根裏に隠れても。

「いったぞ！ であえー！」

気配を消して隠れても。

「いました！ こつちです！」

と言つ具合にだ。

なぜだ？ なぜこんなに発見されるのだ？ 実は自分の能力はそこまで凄くないのか？ いやいや、そんな事は無い。実際にご主人と騎士ゼストと旅をしていた時はこの能力は大いに役に立ったではないか。どこぞの施設に潜入するときも、敵に奇襲をかけた時も、ご主人の危機に陥った時は逃亡にも役だった。

いったい何がいけないのだ？

「今度はこつちにいたよー！」

むっ、もう見つかったか。

とにかく、この場から逃げなくては。ここで捕まったらご主人の面目が立たない。しかしこつちも発見されては隠れる場所に困るな。不本意だが、アスレチック広場の方まで逃げるか。さすがに子供の身体能力で自分の動きについて来る事はないだろう。

………そんな事なかった。

『ソニックムーブ!!』

一筋の雷がもの凄い速度で迫る。

それは光速の域。

初見でこれをかわすのは無理に等しい。だが、自分はこの速度を知っている。』

自分と死闘を繰り広げ、今では良き仲間となり、鍛錬の一環でこへやって来ては自分と組み手をするエリオの魔法だ。

「あーまた逃げられた!」

しかし術の発動者はエリオではない。青い髪を両端で結び、いかにも活発そうに動き回る少女であった。

と言うか何故魔法が使える!?

『弾幕集中、アクセルシユート』



そして今度は背後から魔力で形成された弾幕が飛んで来る。容赦無い密度の濃い弾幕だ。

さすがにこの中を逃げ切る自信は無い、なので咄嗟に背中の羽を広げ弾幕の範囲から空へと逃げる。

「これもかわしますか。やりますね」

そう言うのは無表情の少女。だが、無表情ながらもその表情はどこか悔しそうに見えた。

しかし、意外だった。まさかこの子供達が魔法を使えるとは思わなかった。広い所へ出て逃げ切るつもりが、これでは逆に追いつめられてしまう。

「二人共！ よくやった！ 後は任せる！！」

最後にそんな事を叫んだのはいかにも我<sup>が</sup>の強そうな少女。

自分が逃げた先の空間を包み込むように魔力を形成し、発動の呪文を唱える。

「来よ、漆黒の風、天よりそそぐ矢羽となれ……………」

ちょっと待て！ その呪文は！？

『フレースヴェルグ！！』

まさかの広域攻撃。

空一帯に広がる魔力の力場に逃げ場所など存在せず、こいつは無  
理だと思った瞬間には自分の視界は霞みが掛り、暗くなってしまっ  
た。

本気出して負けるとか……………不覚。

さて、ガリユーが柄にもなく本気で逃げ、三人の魔法少女に撃墜  
された後である。

「「「ごめんなさい!」」」

そんな謝罪の言葉を発しているのはその三人である。三人は床の  
上で正座し、そのまま土下座をしていた。

そして、それが誰に向かっているかと言うと

「……………ガリユーが本気出して逃げたから魔法を使ったのはしょう  
がない。でも、ここまでやる必要は無かっただろう」

もちろん俺である。あ、どうもギンザンです。

なにやら外が騒がしかったんで見に来たら子供達がはっちゃけていたので叱ってます。

「だってガリユーが外に逃げるんだもん！ 僕のソニックムーブでも捕まんないし！」

「だから私の弾幕で逃げる方向を限定して……………」

「我の一撃で葬った！」

ベシッ！ ベシッ！ ベシッ！

三発の手刀を三人の頭に振り降ろす。

「限度を考えろ！ お前等の所為でガリユーが壁に向かって体育座りしてるんだぞ！ なんか嫌だ！ 初対面だけドアレはなんか嫌だ！」

そう、子供達に撃墜されたガリユーはすっかり自信を無くしてしまったのか俺の言った通りになってしまっている。

「えーっと……………ギンザン？ ガリユーも柄にもなく本気だしちゃったんだし、この子達も必死だったんだからあまり怒らないで」

そして若干顔を引きつりながらも子供達を許してと言うルーテシア。これでも先程まで落ち込んでいたガリユーを見て「ああ……………私のガリユーが……………ガリユーが……………」とか放心状態になっていたのだがもういいのだろうか？

「はあー…………お前等ちゃんとガリユーに謝れよ。後、ルーテシアに感謝もしろ」

「ルーテシアさん！ありがとうございます！ ガリユー！  
ごめんなさい！」「」

本気で言っているのか疑いたい。むしろ、言っただろ？

「そもそも我らは悪く無い。子供相手に本気で逃げるあやつが悪い」  
うわあ……………今の一言が心に突き刺さったのかガリユーがさらに落ち込んだよ。いや、ディアの言う事も正論なんだけどな。

「いや、ガリユーだっけ？ その、気を落とさないでくれ。アイツ等の魔力は規格外でな、普通の魔導師でも手を焼くぐらいだ。お前は決して弱くない。むしろディアの魔法でその程度で済んだ方がすごい」

「……………」

「え？ そうだな……………ランクなら空戦魔導師のAA以上はあるんじゃないのか？」

「！？……………」

「魔法は俺が教えた訳じゃないよ。まあ、似たような事はしたけどぶっちゃけアイツ等は才能の塊みたいなもんだ」

「……………」

「気にする事無いさ。お前だって鍛錬次第で強くなれるし、召喚魔法を介して主が力を与えてくれれば十分に強い」

「……………」

「そうだな。見た所、お前さんが独自の魔法を一つ二つ覚えれば良い状況を作るんじゃないのか？ リンカーコアもあるみたいだし」

「……………」

「……………ってか、なんでガリユーの言葉が解るの!？」

はて？ 何故か家の娘達以外の子供達が驚いている。

「ギンザンさんはガリユーの言葉がわかるんですか？」

そしてとても不思議そうに質問してくるのはキャラロである。

「んー……………一言で言えば『魔法』？」

「え？」

「魔法で言語通訳してみた」

「そ、そんな魔法聞いた事ありませんよ？」

「そりゃそうだ。俺が作ったオリジナルだから」

「へ？」

「念話の亜種ってところか。アレって自分以外の人と交信できる魔法だろ？ でも、そうじゃ無い。アレは相手が自分の感情、思考を発して、受信した人がそれを読み取り理解するってのが正しい。俺はガリユールの感情、意思を読み取って理解し出来るように念話の術式を組み替えているだけなんだよ」

「ギンザンさんって魔導師なんですか？」

「『元』魔導師だけだな。今はしがない喫茶店の店長で四人の娘の父親だ」

「はあ………」

「まあ、そんな所だよ。キャロちゃんは召喚師として契約を結んだ竜とはそれなりの意思疎通が出来るだろ？ アレと似たような物だよ」

「……………私もその魔法覚えたらフリードともっと仲良くなれるんでしょうか？」

「そいつはキャロ次第さね。第一フリードとキャロちゃんの間には切れない絆が存在するし、その必要もないと思うけど」

キャロちゃんとフリードを見て感じるのは絶対的な絆。お互いを信じており心で通じ合っている。

それだけあれば言葉など要らないよ。

「そ、そうなのかな？」

「きゅい〜」

「ふふっ、ありがとうフリード。でも、ちょっとあなたとお喋りできたらなって思っただけ」

まあ、でも。言わなきゃわからないって事もあるんだよな。

「キャロちゃん。ちょっとケリユケイオンを貸してくれないか？」

「え？」

「あ、展開させてくれればいいから」

キャロは俺に言われた通りに自分のデバイスであるケリユケイオンを展開した。展開を確認した俺はそのケリユケイオンに包まれたキャロちゃんの手をそつと握り目をつぶる。

#### 術式展開

固有名称『ケリユケイオン』のステータスを表示。

拡張容量空き容量確認……………仕様領域63%

「……………うん、コレぐらい空いてれば良いかな？」

「へ？」

構築式を改造開始。<sup>リメイク</sup>

オリジナルからミッドチルダ式に改造。<sup>リメイク</sup>

術式解析、意味理解、呪文分解、術式再構成。

魔術展開……………問題無し。

仕様動作……………問題無し。

魔力使用量……………微調整。

最終確認……………問題無し。

続けてケリユケイオンへのダウンロードを開始。

ダウンロード完了までの時間30秒。

ダウンロード完了。



それはとても不思議な光景でした。

元魔導師と名乗るギンザンさんが言葉を発しないガリユールとお話をしている。どうやって話しをしているのかと聞けばそれは魔法の力だと言いました。

もし、私にもその魔法があればフリードとお話する事ができるのかな？

フリードの言いたい事はなんとなくわかる。それはルシエの一族が持つ能力みたいなもの。竜と使役する者が竜の言葉が解らないのでどうしようもないですから。でも、それも漠然としたものです。私もフリードの言葉はなんとなく理解している程度なんです。

「キャラちゃん。ちよいとケリユケイオンを貸してくれないか？」

「え？」

そんな事を思っているとギンザンさんがそんな事を言ってきました。そして私は訳もわからないままケリユケイオンを展開します。するとギンザンさんはそんなケリユケイオンに包まれた私の手を取ってきました。

エリオくんとは違う男性の大きな手です。

私は内心ドキドキしてました。だって、ギンザンさんの手はとても暖かくて気持ちいんです。管理局に勤めてから大人の人に頭を撫

でられたりしたこともありましたが何と云つかそれとは比べ物になりません。

あ、シュテルちゃん達がこっちを睨んでいます。

「……………うん、コレぐらい空いてれば良いかな？」

「へ？」

そしてギンザンさんは再び私の手を取って何かを呟いていました。

それと同時にギンザンさんの足元に魔法陣が展開されます。ミッド式の魔法陣に似た魔法陣。ですが、良く見れば術式が所々違い、どちらかと言えば私達召喚師と似た独自の魔法陣です。そして何より驚いたのはその魔法陣から発する魔光の色。

その色は黒でした。見ているだけでその色に吸いこまれそうな色。

例えるなら闇。

一度捕らわれたら二度と光を浴びる事が出来ない様な闇。

ですが、不思議と恐怖はありません。

その闇はどこか暖かく、すごく心を落ち着かせてくれます。

「（キヤロ？）」「

「……………え？」

気付けば声が聞こえてきました。ですが聞いた事の無い声。エリオくんのもトーマくんとも違う。ルーちゃんともシユテルちゃんのも違います。もちろん、ギンザンさんのとも違う。

じゃ、誰？

ううん、私はこの声が誰の物かを知っている。

「……………フリード？」

「（ボクの手がわかる？）」「

「うん。うん！ わかるよ！ ハッキリ聞える！！ 何を言ってるかわかるよ！！！」

「(ホント!?)」

今まで漠然としかわからなかったフリードの言葉がハッキリと伝わってくる!

「……………でも、なんで?」

「ふー……………うまくいったみたいだね」

「ギンザンさん?」

「ケリユケイオンに翻訳術式を組み込んだ。あー……………設備無しでダウンロードすると疲れる。主に頭が……………今ならお湯が湧かせそうだぜ」

とても疲れた様子でギンザンさんはフラフラとしながら立ち上がる。

もしかして私の所為?

「こーら、何しけた顔してるんだ。せつかくフリードと『喋る』事が出来るようになったんだからもっと嬉しそうな顔をしろ」

「え? わっ! きゃうっ!」

口に出す前に私の内心がわかったのかギンザンさんは力一杯に私の頭を撫でる。でも、これじゃ撫でると言うより揺するに近いかもしれません。

少し頭がクラクラしますう〜。

「あ、わりい。やり過ぎた」

「あつう〜……………」

強く撫でられた所為で髪の毛がぼさぼさになってしまいました。ギンザンさんはそんな乱れた私の髪をあの暖かい手で整えてくれます。

手を繋いだだけであの気持ちよさ、それが頭を撫でるだけでもの凄く心地よく感じます。少しだけこの手を堪能しているシュテルちゃん達が羨ましく思ったのは秘密です。

「みんなー！ そろそろご飯が出来るわよ〜！」

しかしそんな心地よさもつかの間。ルーちゃんのお母さんメガー又さんが私達を呼びに来たことよって終わってしまいました。

「ん？ もうそんな時間か……………うっし！ たらふく食っぞー！」

「食っー！…！」

「あ、レヴィー！ 待て！ 貴様が先に行くとお飯が無くなる！」

「ま、待ってください」

そしてギンザンさんの後に続いてレヴィーちゃん、ディアちゃん、シュテルちゃんが家の中へと入っていきます。

「キャラよかったね。フリードとちゃんと話す事ができて」

「エリオくん」

「いいなりキャラ。後でその魔法教えなさいよ。私もガリユーチちゃんと話してみたい」

「ルーちゃん」

「と言うよりどうやって構築式を書き変えたんだろう。アレって何百って式が並んでいてそう簡単に改造なんて出来ないのに」

「え？ そうなの？ トーマくん」

トーマくんが言うには魔法とは術者が難しい計算をして初めて成り立つのだとか。今まで感覚的に魔法を使えるのは何故だろうと考えているとトーマくんがデバイスにある程度の術式がインプットされており、術者は発動のコマンドするだけで発動するようになるらしいです。

難しい話しはよくわかりません。

「（キャラ、お腹減ったー）」

「あ、そうだね、私達も行こうー」

フリードがお腹が減ったと言うので私達もルーちゃんの家の中に入る事にしました。

今度、フェイトさん辺りに聞いてみようかな？

## 第六話 意外な才能（後書き）

突然ですが……………。

第5話の時点でなんと嬉しい事に10万アクセスを突破いたしやした！

ひゃほー！ マジで！？ 今まで書いてもこんなペースで10万なんて行ったことねえーよ！ と自分でも引くぐらい驚きました。

この作品を読んでくださった皆様誠にありがとうございます。これからもカメ更新ですが挫折せずに頑張っていきたいと思えます。

## 第七話 大人の時間

「ふいー……………いい湯だった」

時が立って夜。俺はルーテシア自慢の露天風呂を満喫して来た所である。

ん？ サービスシーン？ 俺ので良ければ回想を始めるが？

「ぶはあくやっぱりお風呂上がりはコーヒー牛乳だね！」

「いいえ、フルーツ牛乳が一番です」

「何を言う。シンプルに牛乳で良いではないか」

おっと、どうやらチビツ子達も風呂から上がっていたらしい。そしてそれぞれが風呂上がりの牛乳は何が一番かを論じていた。

風呂上がりはビールでしょうが。

「パパ、オヤジくさい」

「オヤジくさいですね」

「オヤジくさいな」

「君達、人の心を読まないでくれ」



つてか、そんな事を言つてたらなんか飲みたくなってきたな。

「ん？ あ、レグナ！ お前！」

「はい？」

何か無いかと辺りを探していると子供達と一緒に風呂に入っていたらレグナを見つけた。

「お前風呂出て髪乾かしてないだろ？ ちゃんと乾かさないと風邪引くぞ」

「私は人ではないのでそのような事にはならないのですが」

「それでもだ。お前達！ レグナを確保！」

「了解！」「」

そして合図と共に子供達がレグナに飛び付く。

レグナが動けない間に俺は準備、準備つと。

「あら？ いいわね、レグナちゃん」

「ん？ メガー又さんか。すみません勝手に借りてます」

「気にしないでいいわよ」

さて、捕えたレグナ座らせ俺はその後ろに座ってレグナの髪をブラッシングしている。

せっかく綺麗な髪をしているのにこいつは手入れをしようとしないので困る。なので、時折こつやって俺がやっているのだ。

その度に他の奴らが騒ぐけどな。

「パパー！ 次は僕だよ！」

「何を言います。次は私です」

「下郎が！ 次は我に決まっているだろう！」

「いやいや、次はアタシッス」

ほらな。……………ん？

「何どさくさに紛れてんだ」

「ああ〜ノーヴェー！ なにするッスか〜！？ アタシもギン兄に髪とかしてもらいたいんっすよ〜」

「自分で出来るだろうが！」

「ダメだよウエンディ。迷惑かけちゃ」

突然現れたのはウエンディであった。そしてその後続くようにノーヴェとディエチがウエンディを止めに来た。

どうやら、俺がレグナの髪をとかしているのを見て自分もやってもらいたかったらしい。

ってか、風呂上がりの所為か髪を降ろしているので一瞬誰か解らなかつた。

「んー……まあ、チビ達の後で良ければやってやるぞ?」

「本当ですか! やったー!」

両手を上げて喜ぶウエンディ。対してノーヴェとディエチはため息を吐いていた。

「はあ……ごめんなさい。この子が我が儘言つて」

「いいつて。なんならノーヴェ達もやってやるつか?」

「え!? い、いいよ! そんなの! あたしの髪短いし!」

「長かるつと短ろつと関係ないだろが? いいから少し待ってる」

「は、はい……」

この際一人二人、ましてや三人増えた所で変わらんさね。なので、ノーヴェもほぼ強制的にその場に残るようにさせた。

「あふ〜…………ヤバい。…………これはかなり気持ちいい。チビッ子達が寝てしまうのも無理ないっす」

そんなこんなでウエンディの順番がやってきた。

ちなみに、チビ達は髪をとかしていると寝てしまい、後の事をレグナに頼んでもうおやすみ。

そしてウエンディもチビ達同様に欠伸をして眠たそうにしている。

「しかし、お前さんは意外と癖っ毛なのな？ まあ、良い具合に形作ってるから可愛いけど」

「えへへ、そう言ってもらえると嬉しいっす。ってか、ギン兄のテクニクがヤバいっす。これはもうプロの域っす」

ブラッシングのプロってなんだよ。

「ってか、寄りかかるな。ブラッシングができん」

「いいじゃないっすか。こんな美少女と密着できるんっすよ〜。ギン兄は幸せ者っすね〜」

「はいはい、美少女ね」

「……………なんかカチンとくるっすね」

「いやいや、美少女で可愛い娘と密着出来て嬉しいですよ」

「はい、ダウト」

え〜……………。

「にしても、たまにギン姉にやってもらうっすけどそれとはまた違う心地よさ。癖になるっす」

「そいつは何よりだ。……………ほい、終わったぞ」

「あーもうちょっとやってくれッス！」

「ノーヴェ達が待ってるだろうが。ほら、どいた、どいた」

「ぶー」

一通りウエンディの髪の毛をブラッシングし終わると今度はノーヴェの番。渋々、ウエンディは自分がいた場所をノーヴェに明け渡し、ノーヴェはウエンディと入れ替わりで俺の目の前に座る。

「よ、よろしくお願いしますー！」

「お、おう……………」

なんだ？ 緊張しているのか？ ってか、正座されると微妙に高くてやりづらいんだが。

「あ、ご、ごめんっ!」

「ノーヴェ、緊張してるっすか?」

「なっ!? ち、違う!」

からかい気味にウエンディがそう言うとムキになるノーヴェ。隣にいるデイチエはクスクス笑っている。

「はいはい、ジツとしてる」

なので大人しく座らせることに。そして、ノーヴェの髪をブラッシングし始める。

「うーん……………お前の髪質ってスバルちゃんと似てるのな」

「え?」

「外見も似てるし……………なんかあるのか?」

「……………スバルの母さんの遺伝子を使ったクローンなんだ」

「ほー。じゃ、マジでギンガとスバルちゃんの妹になるのか」

「……………うん」

背後からなのでノーヴェの表情は見えないが声を聞くだけでどんどん暗くなって行くのが伝わってくる。

「あ、枝毛」

「マジ!?」

「マジマジ。……………で? なんか考え事か?」

「うーん……………その、チンク姉を許してくれて、ありがとう」

「ん? 何故そこでその話しになる?」

「家族つて話しで……………チンク姉はあたし等の中で一番苦しんだんだ。自分が姉妹の中で一番罪を犯しているんだって。人に見られない所で苦しんで、誰にも寄りかからずに一人でそれを償おうとしてたんだ。家族にさえも……………」

淡々と語り出すノーヴェ。

「でも今日アンタに会って、話しを聞いて、なんかふっきれた感じがした。たぶん、アンタの言葉を聞いて重荷みたいのが軽くなったんだと思う。ってか、人前で泣くチンク姉なんて見た事無かったからビックリしたし、風呂場でなんか鼻歌なんか歌って上機嫌だったんだぜ?」

それはどこか嬉しそうで、少しだけ寂しい感じがした。

「あたし等にそれが出来なかったのはちょっと残念だったけど……………感謝してる。だから、ありがとう」

「ノーヴェよ。お前さんは一つ勘違いしているぞ」

「え？」

「俺はお前等のしたことを『許さない』って言っただろが」

「……………あっ」

俺の全てを話した時の言葉を思い出したかのノーヴェは声を漏らした。

「許さないからどうやってこれから罪を償うかを見せてみる。俺はそう言ったぜ？ 間違った事をしているようなら容赦無く修正してやる」

「……………」

「感謝されるのはお前達が導き出した結果を見てからだ。くじけそうになったら嫌でも支えてやる。迷ったら無理矢理にでも正しい所に戻してやる。結果が出るまで、何度でもだ」

「はは、なんだそれ」

「うっせ」

うん、自分で言っていて少し恥ずかしくなった。湯上りとは別で体が熱くなって来た。

だが、やると決めたからには……………な？

「おっし、次はディエチな」



「よろしく。お兄ちゃん」

え？

「いや、ビックリした。まさか『お兄ちゃん』と来るとは」

「はっはっは！ おい、ギンザン。ちょっと殴らせる」

なぜに？

「ギン君は包容力があるからそんな感じがするのかしらね？」

「ぐっ……………このままでは妹達に取られちゃう」

「そんなつもり毛頭無いのだが……………」

さて、みんなの髪をブラッシングする作業が終わり、今はゲンヤさんとメガー又さん、ギンガの四人でお酒を飲みながら談笑。そして、先程の出来事を話したらゲンヤさんがいきなり食って掛って来そうになった。

「はぁー……………どうしてお前は子供達とそんなに仲良くできるんだ

？ 転職して先生にでもなれよ」

「生憎人に教える程の知識は持ち合わせて無いんでね」

「いや、本気でそう捉えられると……まあ、いいか」

「ふふふ」

「先生……うん、いいかも……」

はて？ 何故ゲンヤさんはつまらなそうにしているのだろうか。  
そして、ギンガは何をブツブツ呟いているのだろうか？

「にしても酒なんて久々だな。最後に飲んだのはゲンヤさんと飲み屋に行った時ぐらいか」

「なんだ？ 家じゃ飲まないのか？」

「ぶつちやけ、それほど好きって訳でもないんでね。そう言う席でしか飲まないよ」

「そうか。俺より酒が強い癖に生意気だ。ホレもつと飲め」

いや、単にあんたが出来あがるのが早いだけだからな。俺は至って普通だ。

「そうね、部隊で飲み会した時もギン君が潰れたみんなを介抱してたわよね？」

……あれ？ そう言えばそうだったな。

「あのゼスト隊長でさえ潰したんだもん。あの時はビックリしたわ……」

「ほゝあのゼストが……よし、ギンザン勝負だ！」

そう言いながらゲンヤさんは酒の入ったボトルを取り出す。

って、それかなりキツイやつじゃん。

「今日こそお前を潰してやる。覚悟しろ」

「えゝ……」

そして、問答無用で俺の空いたグラスにその酒を注ぎ込み、ゲンヤさんは自分のグラスにもそれを注いだ。

「じゃ、私がジャツジを務めるわね。よーい！ どん！」

こうして、メガーヌさんの宣言により俺とゲンヤさんの飲み比べ対決が開始される。

「……………気持ち悪い」

「……………俺の勝ちでいいか？」

「……………おっ」

結果、辛くも俺の勝利。だが、さすがに6杯辺りから危なくなっていたので正直俺も目が回り気持ち悪い。

「やっぱり、ギン君は強いわね」

「……………うっす」

一番ビツクリしてるのはこっちですよ。何気にメガー又さんとギンガは俺達と同じ酒を飲んでいたので。ギンガはさすがに一杯だけ飲んでリタイアしゲンヤさん同様に寝てしまった。

そんで俺達の勝負とは関係なくマイペースに飲んでいるのは確か今手にしているのは8杯目じゃ無かったか？

「それにしてもこのお酒美味しいわね〜癖になっちゃっ」

うわあ、なんだかポワポワしたオーラが彼女を包んでる。

「ああ〜……………ゲンヤさんは完全に潰れたか」

「そうね〜……………それにしてもこうしてギン君と一緒に飲む日が来るなんて時が立つのは早いわね」

「……………かもしれないね」

メガー又さんとまたこうしてお酒を飲むなんて思っても見なかった。

今から15年ぐらい前だろうか？ ゼスト隊に入って隊のみんなで飲みに行った事がある。まだ未成年だと言うのに必要以上に酒を勧めて来る先輩達。そんな先輩をゼスト隊長が叱り、結局なんだかんだで隊長と飲み比べをしたり、酔ったクイントさんがゲンヤさんの愚痴を延々と喋ったり、メガー又さんは相槌を打ちながらそれを聞いていた。

最後には飲み屋を占領して酔い潰れ、店側からのクレームがレジアス中将の所に行き、二日酔いの状態でゼスト隊長が怒られていたのは見物だった。

「ギンザンしゃん!!」

「うお!? ど、どうした? ギンガ?」

思い出に浸っていると突然潰れていたギンガが起き上がった。そして何故か俺に詰め寄ってくる。

「ってか、顔が近いです。」

「何思い出に浸っているんだすか!」

え？ 流れるにそうではないの？

「そーんーなー事よりー!!」

「は、はい」

「ギンザンさんは誰にでも優しくすぎます!」

「へあ?」

「人に優しくする事はいいことです! ですが! 時に厳しくする必要もあります!」

「う、うん。そうだな」

「……………本当に解ってるんですか?」

やばい、かなり酔ってらっしゃいます。

ギンガの顔は酒の所為で赤みを帯びており、喋る度に酒のキツイ匂いが俺の鼻を刺激する。それでいてメガーヌさんが用意した浴衣が微妙に着くずれして胸元が大きく露わになっている。

正直、エロすぎる……………。

「と、とにかくだ。ギンガ、君の言いたい事は十分に理解した」

さすがにこれ以上はまずいと思い俺はギンガを引き離すように押

しのける。

「んーなんだか理解して無さそうですね。では、練習です」

「練習？」

「今から私が思いっきり甘えますので優しくしてください」

「はい？」

「ギンザン」

そしていきなり俺に抱きついて来る。と言っても腹にタックルをかまして俺の腹に突撃して来ただけなのだが。

当然いきなりの事だったので俺はどうする事も出来ずにされるがままになってしまった。

「ギ、ギンガさん!？」

「んにゃ〜ギンザン暖かくて気持ちいいです」

さらにエスカレートしてギンガは俺の胸に顔を押し付けスリスリと動かして来た。

ちょっとくすぐったくなっただのは我慢した。

ってか、これはヤバい。色んな意味でヤバい。

「メ、メガー又さん！ 何とか」

「あらあら、お邪魔かしら？」

「え？ ちよつ！？」

「ではごゆっくり」

唯一まともな思考をしていたメガー又さんは何を勘違いしているのかその場を退散しようとしている。しかも、潰れて寝てしまっているゲンヤさんを担いで。

女性が酔って潰れた男性を担ぐとか………なんともシユールである。

いやいや、それよりも己の身に降りかかるであろう 色んな意

味で 危機から脱しなければ！

「どーこーに行こうとするんですか？」

「イダダダダッ！？」

しかし、この場から脱しようとするれば俺の胴体に回っているギンガの腕がより一層に強く締めつけてくる。さすがは戦闘機人と言ったところか。背骨がミシミシと音を立てて悲鳴を上げてしまう。

やめて！ これ以上締めたらエビではあり得ない方向に曲がってしまうっ！？



「さーここで厳しくしなくちゃ〜私は甘えるのをやめませんよ〜」

なにか色々おかしい気がするがそう言えばこれってその練習なんですよ？　　ってか、俺はそこまで過保護なのだろうか？　子供達にも褒める時は褒めるし、怒る時は怒るようになっているつもりなのだが……………あ、無粋に娘達に群がる男どもには制裁を加えているからそんな事もないのか？

まあ、いいや。

それよりも身の危険を感じるのでさっさとギンガの要望通りになくしては。

「お、おい！　ギン」

「スピー……………」

ええええええええ……………。

これからそれを実施しようと言うところでなんであなたは気持ちよさそうに寝てらっしゃるんですか？

「スーサー……………」

「……………」

なんとも気持ちよさそうに寝ているギンガ。そんなに気持ちよさそうに寝られては怒る気もしない。幸いギンガが寝てしまった事で俺の胴体に回っている腕は力を緩め、痛みは無い。あるのは膝の上に乗っているギンガの頭の重みぐらいである。

「ふー……………よくわからん」

もう、全てを諦めて俺は残った酒を飲み干した。

「んっ……………」

ギンガはなんとも言えない頭に走る痛みで眠りから目を覚ます。

「イツタ〜……………え？」

あれだけキツイ酒を飲んだのだから当然二日酔いになるのはすぐに理解する事は出来た。だが、それでも違和感を感じたのは自分が寝ていた場所である。

どうやら、お酒を飲んだままりビングのソファで寝てしまったらしい。

「（うん、それはわかる）」

だが現在自分が枕にしたいるのはなんだろう？ ソファの腕掛

けにしては柔らかい。でもクッションにしては少し硬い。

何と言うか、とても懐かしい感じである。

なので少し顔を上げて自分が何を枕にしていたのかを確認する。

「え？ あ、え？」

そして気付いた。自分が何を枕にしていたのか。

見ればそれは人の膝である。

では、誰の？

そう思ってその人の顔を確認する。

そこには寝ているギンザンがいた。

それを理解した途端。ギンガの顔は赤くなる。そして昨晚の出来事を思い出した。

「あ、あわわわ……………」

酒を飲んで都合良く記憶が飛んでいれば良かったとどれだけ良かった物か。だが、自分の記憶はハッキリと覚えている。意味不明な事を言っただけの自分のした行為に激しく後悔する。

「うわぁ……………恥ずかしい……………」

「ん……………」

一人であたふたしていると寝ていたギンザンが目を覚まそうとする。が、ギンザンは目を覚まさずにまた眠りに付いてしまった。その事に安心したギンガはホッと胸を撫で下ろした。

「……………あれからずっとこうしてくれてた、のよね？」

申し訳無いと思う反面、妙に嬉しくなってしまう。

無理にでも起こしてベッドで寝る事も出来ただろうに。それをしなかったのは熟睡してしまった自分に気を使ったのだろうか。

「やっぱり、優しすぎます」

初めてギンガがギンザンと会ったのは母であるクイントに自分達が引き取られ、家に連れてかれた時であった。まだ幼かったギンガには自分より一回りも大きいギンザンの事を恐怖の対象にしか思っていないかった。

だが、共にナカジマの家で暮らす内に彼の優しさを知る。妹のスバルはギンザンの事を本当の兄の様に慕い、自分はいつの間にかその優しさに恥ずかしいと思いつつも甘えていた。

そしていつの間にか自分は彼の事が好きになっていた。

「……………もうちょっと、いいよね？」

そう言えば昔似たような事があった。

今しているように自分とスバルがギンザンの膝を枕にして寝ていた事を思い出す。今はスバルはいない。自分だけがこの温もりを独占できる。そう思うと少しだけ嬉しくなった。

なのでギンガは辺りに誰もいない事を確認し再びギンザンの膝を枕にして横になる。

「……………えへへへ」

不意に出た笑みと同時にギンガはまた眠りについてしまった。

「……………お世話になりましたー！」「……………」

時刻はお昼過ぎ。朝、目を冷ませばギンガはアレからずっと寝ていたのか俺の膝がとてつもなく痛い。そしてそんな現場をよりによってウエンディに発見され、盛大にからかわれた。そして、何故か子供達は無言で俺の事を蹴って来たのは何故だろうか？

さて、一泊二日と言う時間はあつと言う間に終わり俺達はメガー

又さんとルーテシアに別れの挨拶をしている。

「父上、もう少しここにいたいです」

「ん？ 珍しいなお前が我が儘を言うなんて」

なんと意外に駄々をこねたのはシュテルであった。

「ここにある書物は私の知らない物ばかりでした。読破するまで帰れません」

「んーそうかーではシュテルはここに残って俺達だけで帰るか」

「「はい」」

「え？」

お、意外と言った顔をしているな。

「わ、私も帰ります！」

そして、涙目のシュテル。自分が置いて行かれると解って寂しくなったのがギョッと俺のズボンを掴んで来た。

「ギン君。あんまり子供をからかっちゃ駄目よ」

「ははっ、すみません。つい」

「シュテルちゃん。また遊びに来てくれれば読みたい本を用意して置くわ。だからまた、いらっしやい」

「……………はい」

さすがに冗談にしてはきつかったのだろうか。本格的にシュテルはぐずってしまっている。

「あー……………シュテル。ごめん、だから泣かないでくれ」

「……………私を優しく包んでくれたら許します」

「そいつは容易い。ほら、追いで」

謝罪のため目線をシュテルに合わせるようにしゃがみ、俺はシュテルの要望通りに両手を広げた。そしてそれを確認するとシュテルは俺の胸へと半ば突撃し、小さな腕を俺の首に回す。

「しゅ、シュテルさん……………見事に決まっているので少し緩めていただけませんか？」

「父上が余計な事を言うからです」

うん、ごめんなさい。

「さてさて、んじゃ帰りますか」

仕方ないのでそのままシュテルを抱きかかえて俺達は本格的に帰り仕度を済ませてしまう。

「みんなー！ 今度の休みにまた来てねー」

「またね〜！」

そして少し歩くとアルピーノ邸の二階からルーテシアとキャロちゃんとエリオが身を乗り出してこちらに手を振っていた。そしてそれに答えるのはスバルちゃんである。

ちなみにエリオとキャロちゃんはもう一泊して帰るとか。

「ガリユーもギンザンの所でしたっかりね〜」

気付けば俺の隣では昆虫の様な甲冑を身に付けた召喚獣が手を振っていた。

え？



## 第八話 レンタル貸し出し中

「なるほど、この前の鬼ごっこで負けてお前さんは景品としてアイツ等の僕しゅとなつた訳か？」

「……………」

無言ながらも黙つて頷くのはガリユーであつた。ちなみに俺はガリユーの声が聞こえるが今のは何も喋つていないのであしからず。

さて、アルピーノ邸を去つた俺達は船の旅を終え、再びミッドチルダへと戻つてきたのである。そしてここは俺の店の中。念のためと思つて店は旅行から帰つて来た次の日も取つていたため店内には俺達以外誰もいない。

「ガリユー！ 何をしておるか！ 早く茶を出せい！」

「あ、私にもお願いします」

「僕もー！」

「……………」

そしてそんな命令に忠実にこなすガリユー。

本来なら俺が止めるべきなのだが生憎思考が現状に追いついていないためにそれが出来なかつた。

頭が痛くなってくる。

「ドンマイです。マスター」

「……………うん」

よくわかんないけどそんなレグナの言葉が心に響く。

「とにかくだ！ 付いて来てしまった以上は仕方ない。当面は俺が責任を持って面倒を見る！ だから、ガリューは僕じゃなくしてお客さんとして扱っように！」

「「「え……………」」」

「……………三時のおやつをしばらく抜きにしてやるっか？」

「ガリューよ！ しばらくだがよろしくな！」

「歓迎いたします」

「よろしくね！」

はあ……………頭が痛い。

それにしてもこれからどうしようか？ どうやらガリューはスバルちゃん達が今度の連休にまたルーテシア達の所に行くからその時に一緒に帰るらしい。だが、それでも3カ月以上先の予定。その間は家で面倒を見なくてはならないのだ。幸い、客間用の部屋があるから寝る場所は困らない。それにガリューの申し出ている間は店を手伝ってくれるとか。

そいつが一番のネツクだ。

正直、ガリユートの申し出は嬉しい。どうやら、それなりの料理スキルもあるようで最初は厨房でも頼もうかと思った。だが、この店はホールから客間が丸見えな状態であり、言っては悪いがそこに異様な姿をした人型の何かが料理をしているところを客が見てなんて思うだろう。

たぶん、よろしく無い。

「……………」

「ん？ どうしたガリユート？」

色々思考を巡らせていると不意にガリユートが俺の目の前に立ってくる。

「……………」

「え？ ああ、コーヒー淹れてくれたのか。ありがとう」

「……………」

「いや、いい。俺はブラック派だから」

ちなみにガリユートは「ミルクと砂糖はいるか？」と聞いて来た。

そして俺がいらないと答えるとガリユーは子供達に自分が淹れたであらう紅茶を差し出した。

「……………うまいな」

俺が淹れるコーヒーよりうまい。……………ショックである。

だが、これだけのスキルがあるのに有効活用しないのはもったいない。何かいい方法は無いだろうか？

「あっ」

「どうかいたしましたか？ マスター」

思わず声を出してしまった事に隣にいたレグナは不思議そうな顔をしていた。

「はははっ！ いい事思いついたぞ！」

夜天の空。

漆黒の空には宝石のように輝く星達が光を放っている。  
下は海なのだろうか。光は無く漆黒の闇がそこにある。

そんな光を放つ空と光を放たない海の間二人の少女がいる。

一人は紅い宝石が埋め込まれた魔道の杖を持ち、白い魔道服を身に纏い、いかにも魔導師の様な格好をしている。それでいて少女らしい幼い顔立ちをしていた。

対してもう一人の少女は杖の代わりなのかその手にはハンマーのような物が握られており、その服装は赤を強調したゴシックドレスである。見た目、相手の少女より幼くも見えるが、目は釣り上がり、強気な感じがする。

《Stand by ready Engage》

そして両者が動き出した。先に動いたのは白い少女である。

手にした杖を相手に構え、杖先に魔力を集束させて一気に解き放つ。放たれたのは極太の集束砲。それが赤い少女へと迫る。

だが、赤い少女はそれを予見していたのか、その集束砲をかわして一気に距離を詰めて来た。

「はあああつ！！」

赤い少女は手にしたハンマーを振り被り、白い少女へと振り下ろされる。かろうじて白い少女は魔法壁を手の平から展開し、それを防ぐ事に成功。

だが、赤い少女の猛攻は止まらない。

魔法壁の上から連続でハンマーを叩き付けている。さすがの白い少女もその勢いが殺せないのか、魔法壁を張りながらも苦しそうな

表情へと変わる。

《Guard Crash》

そして魔法壁は破られ、白い少女はまともに赤い少女の猛攻を食らってしまった。

「くっ!？」

「ブチ抜けーーーー!!!」

トドメの一撃。そう言わんばかりの攻撃が白い少女に迫り来る。だが、白い少女は冷静にそれを見極め、紙一重の所でかわし、距離を取った。

「シユート!」

距離を取った白い少女は再び杖を構えて魔力を集中させた。そして次に放たれたのは先程の様な集束砲ではなく無数の魔力弾が放たれる。

「うわっ!？」

大振りで体勢がまだ整っていないかった赤い少女は咄嗟に自分の魔法壁を展開。何とか魔力弾をやり過ごす。しかし、赤い少女は魔法壁と魔力弾同士がぶつかって巻き起こった爆煙の所為で相手を見失ってしまった。

「いくよ! これが私の全力全開!!!」

そして赤い少女はそんな掛け声を聞き相手の位置を特定し、こちらの方を振り向く。

だが、それがいけなかった。

赤い少女はこの光景を見なければよかつたと思っっているのだろう。勝ち気だった表情はだんだんと呆気に取られ、思考が停止してしまつた。

赤い少女が見たのは白い少女が展開した大きな魔法陣。それは通常の魔法陣よりも一回りも二回りも大きく、それだけ巨大な力を物語っている。

次第に大気に漂う魔素が空に向けられた白い少女の杖の先に集まり始めた。

その光は力強く、それでいてどこか暖かさを感じる光。

「スターライト！ ブレイカーーーーーー！！！」

白い少女がそう叫ぶ。

集まった魔力を一気に目の前にある巨大な魔法陣へと放ち、そして放たれた魔力は巨大な魔法陣を通過すると集束砲撃魔法へと変わり、赤い少女へと迫る。

「う、うわあああああああ！！！」

成す術も無く、迫ってきた集束砲撃魔法の光は赤い少女を包み込まれた。

そして、大きな爆炎と共に赤い少女は暗い暗い闇の広がる海へと落ちて行く。

「……………」

「やったー！ また僕の勝ちー！」

ガリユーはテレビ画面に映し出された『1P WIN』と言う文字を見て唾然としていた。

「これで10連勝！ ガリユーはゲーム『も』弱いな！」

グサツ！！ と何か突き刺さる音が聞こえた気がした。

ガリユーの隣で対戦していたレヴィがあえて『も』と強調したのは嫌みなのだろうか。どっちにしる今のガリユーにとっては精神的に大ダメージを受けている。

いや、前向きに考えれば自分はゲーム初心者なのだ。なので負け



て当然。

……………うん、そう言うことにしておこう。

ガリユーは一つの生き方を見つけた。

「ほれ、ガリユーどけ。次は私の番だ」

「……………」

敗者はさっさと立ち去れと言わんばかりにディアが言う。

「我が貴様の伸びきった鼻をへし折ってくれるわ」

「ふっふっふ！ 望む所だ！」

ディアはガリユーからゲームのコントローラーを奪い取るとサツサとレヴィの横に座り戦闘体勢に入った。対してレヴィも「まだまだ負けないよー」と意気込んでいる。

「お疲れ様です。ガリユー」

「……………」

ディアに場所を取られてしまったガリユーはシュテルの座っている横に座った。

何気に気遣ってくれる言葉に感動していたのは秘密だ。

「遠距離型に対して近距離型で挑むとは勇者か大馬鹿者ですね。で

すが、接近戦に持ち込む所までは良かったです。でも、距離を簡単に取られてどうするのですか？ あなたはもつと状況をよく理解するべきです」

シユテルに感動した自分を殴ってやりたい。そんな気持ちになったのは生まれて初めてガリユーは己の拳を強く握りしめている。それはもう、爪が肉に食い込んで血が出るのではないのだろうかといわんばかりに。

「じゃ〜今度はコレで行こ〜」

「なら我はこれにしよう」

どうやらゲームをしている二人がキャラクター選択を終えたらしい。

レヴィが選択したのは金髪ツインテールで黒のレタードの様な服装に白いマントを羽織った少女。対してディアは剣十字の杖と魔道書を持った魔道騎士の少女を選択していた。

どこことなくガリユーは知人に似ているな〜と思っていた。が、思っていただけで深く考えなかった。

ちなみにガリユー達がしているゲームは現在ミッド内で発売されている格闘ゲームなのであるが、拳で戦うなんて生易しい物では無かった。

どうやらキャラの一人一人が現在活躍中の管理局魔導師にモチーフにされており、独自の魔法で相手をふっ飛ばしたり、近距離はもちろん遠距離からの砲撃も可能であるのだからもはや格闘とは言えない様な気もする。

ん？　なんでこんな事をしているかって？

そんな事はもちろん暇だからである。

先程、ギンザンが何かを思いついたと思えばサツサとレグナを連れて自室に籠ってしまったのだ。おまけに籠った扉には『静かにしろ！　絶対開けるな！』と張り紙までもが張られている徹底ぶり。そんな部屋のドアを見た子供達は「またか」と小さくため息を吐いていて各々のしたい事を始めた。そんな所にレヴィから遊びの誘いがガリユ一の元にやって来て今のようになっているのである。

だが、結果はご覧の通り。連戦に連戦を重ね全てに負けたガリユ一はもう心がズタボロである。

「ならば、いい所でやめればいいのです」

「……………」

自分にも意地がある。と言いたげそうにガリユー。それにいい所などどこにも無かったのだ。引くに引けなかったのである。

そんなシュテルの視線に耐えきれず、ガリユーは気まずい感じでテレビ画面を見ていた。そしてテレビ画面に《Stand by ready》と表示され、彼女達の対戦が始まるうとした時だった。

「でーーーーーきーーーーーたーーーーー!!!」

家主である男が何かを叫び、それはリビングまで聞こえて来たのだった。

「アハハハハッ!! なにそれ!? それでガリユーがこっちに来てるの!?!」

『うん。期間限定でレンタルされてます』

ミッド南部にあるとある一軒家。

そこで見た目は10代前半の活発で強気の少女。烈火の剣精アギトは自室で通信相手の話しを聞いて爆笑をしていた。ちなみに通信の相手はルーテシアである。先日旅行に来たスバル達がどうだった

のとかガリユーが現在ミッドに来ている事を報告していたのであった。

「はあ〜……………お腹痛い……………でも、ガリユーだって弱くないだろ？ そんな子供に負ける要素なんてあったのか？」

『まあ、ガリユーの油断と向こうの作戦勝ちつて所かな？ でも、三人共結構な魔法を使ってたし、その三人のお父さんも面白い魔法を使ってたからあながち実力かも』

「ふ〜ん。ミッドともベルカとも違うんだろ？ さっきデータ見たよ」

そう言いながらアギトはルーテシアとの通信とは別に空中投影ディスプレイを展開。そして展開されたディスプレイには数字や文字の羅列がびっしりと並べられている。

「でも、コレ凄いな。一見解読不能に見えるけどちゃんと読めばしつくりくる。ベースは念話に使う魔術構築式だけどころやって所々を変えるだけで動物とも会話できるなんて……………」

『私も見た時ビックリしたわよ。これだけの構築式をたった数秒で完成させるなんて……………今度、弟子入りしてみようかしら』

「ルールー。魔女にでもなるつもりか？」

『珍しい技術が目の前にあるのに手を出さないでどうするっていうの……………』

「いや、怒鳴られても……………」

昔はあんなに大人しかったのにどうしてこう表情豊かと言つか感情がよく表に出て来るよなとアギトは苦笑いしながら思った。

『あ、そうそう。ちなみにガリユールがいる所の地図も送っておくから良かったら遊びに行つてよ』

「ん？ 知らない人の家に勝手に行つて迷惑だろ？」

『それは大丈夫よ。ガリユールがいるのは喫茶店みたいだから。気がねなく行けるよ』

「へー、案外あの格好で店を手伝つたりしてるかもな」

あの甲殻の鎧姿でエプロン姿のガリユールがお客様の注文を聞いている所を想像して見る。

「『ないない』」

つと、二人同時に首を横に振りながら結論付けた。

『あ、それとそこの店主さん。あのゼストの元部下だったらしいわよ』

「え？ 旦那の？」

『ママと同じ部隊にいたって話だから。もしかしたら、ゼストの話で気が合つかもね』

「……………」

ゼストと言う言葉を聞いてアギトは少し昔の事を思い出す。

自分がまだどこかの研究所で研究対象とされ、心身共に疲弊していた時。そんな場所から救い出してくれたのはルーテシアとゼストの二人だった。

アギトにとって二人は恩人なのである。

だが、そんなゼストはもういない。JS事件終局の時。ゼストの友であったレジアスから真実を聞き出そうとし、体に負担をかけて色々無茶をやってしまったのだ。己の誇りも貫けぬまま、このまま死ぬのだろうと覚悟した時に現れたのは現在のアギトのロードであるシグナムであった。

そしてゼストは騎士としての最後を全うし、この世を去った。

それからと言う物、アギトはルーテシアとナンバーズと一緒に更生プログラムを受け、プログラム終了と同時に八神家にお世話になっている。

「まあ、アタシは今度の休日休みだし。そんぐらいの日に行ってみるよ」

『了解。一応こっちからも連絡は入れておくわね。それじゃ、またねー』

そう言って通信を終えるアギト。

「一応シグナムとマイスターの許可も貰っておくか」

なので今度の休日にガリユーの元へ遊びに行く事を報告しに自室を出て、皆がいるであろう居間へと向かう。

案の定、家の居間にはこの家に住む皆がいた。

「ん？ どうした、アギト」

最初にアギトに気付いたのはアギトの現ロードであるシグナムである。

「シグナム。今度の休日なんだけどさあ〜」

「休日がどうかしたのか？」

「さっきルールーと通信しててさ。ガリユーがミッドに来てるみたいなんだ」

「ん？ ガリユーが？ 何故？」

「期間限定レンタル貸し出し中らしい」

「はあ？」

シグナムはアギトの言っている意味がわからないと言いたげに首を傾げ頭に？マークを浮かべる。

「まあ〜そんな訳で今度の休日、ガリユーの所へ遊びに行こうかと思ってるんだけどさあ。いいかな？」



「別に構わないが……………」

「なんやおもしろそうな話しをしとるね？」

そして、二人で話している所にこの家の家主が話しに加わる。

「今度の休日やったら私も休みやし。行ってみようかな？」

「主、さすがに見ず知らずの人の家に行くのは」

「ああ、それなら大丈夫！ ガリユールがいる所、なんか喫茶店やってるらしいから！」

「そうなのか？ なら平気か」

礼儀正しいシグナムはさすがに見ず知らずの人の家に勝手に行く事を遠慮していたらしく躊躇していたが、アギトの言葉でそんな気も無くなってしまった。

「そうなんや。ちなみにお店の名前ってわかるか？」

「えーっと……………ちよっと待って。地図出す」

そしてアギトは先程ルーテシアから送られてきたデータをディスプレイに展開してはやてに見せた。

「『マテリアルズ』……………ああ、ここならなのはちゃん家が近いやん」

「あ、そこなら知ってる。なのはがたまに教導隊の所にそこのお菓

子持ってくるぞ？ 結構おいしかった」

「ん？ ヴィータおつたんか？」

「……………はやて、今まで一緒にテレビ見てたじゃん」

「冗談や、冗談。せやからそないに拗ねんといて」

はやてのからかいに拗ねるヴィータ。若干ウル目であり、外見さ  
らがなの幼さがヴィータの心境を一層引き立ててくれる。

はやてはそんなヴィータを見てキュンキュンしていた。

「なんならなのはちゃん達も誘って皆で行ってみようか？」

「残念。なのはとあたしは休日も仕事。ちなみにフェイトも仕事だ  
つて」

「ええ〜！」

ヴィータの一言ではやてはショックを受ける。

「ちなみに私とシャルも仕事です」

「ええ〜！」

「い、ごめんね。はやてちゃん」

さらに追い打ちを駆けるようにシグナムがそう告げると同じリア  
クションを繰り返した。

「主……………」

「ザフィーラは大丈夫なんよね？」

「すまぬが……………休日には道場の方が……………」

「裏切られた！ 家族皆に裏切られた！」

別に裏切ったつもりは無いのだがとはやて以外の一同は心の中で思った。

「はやてちゃん！ リインは暇ですよ！」

「何言つとるんや？ リインは私と一緒に仕事しているからあたりまえやろ？」

「あれ？」

そしてアギトと同じぐらいの少女リインフォース？（ツヴァイ）が自分だけが味方だと弛張したにも関わらず一蹴されてしまう。

「まあ、そんな事言ってもしゃーないし。その日は私とアギトとリインの三人で行きますか」

「「はい」「」

結局、ガリユーの所に行くことになったのがはやてが言った通りの三人となった。

アギトに関しては久々にガリユーに会える事を楽しみにしており、

ラインにいたってはヴィータからそのお店のお勧めを聞いて大はしやぎしていた。

「あ、ライン見て思い出したんだけど……………」

「どうしました?」

「やたら似たような奴がいてさ。えーっと……………」

そう言いながらアギトは先程地図を出した要領でディスプレイに数枚の写真を写し出した。そこに写っていたのはルーテシアが送ってきた旅行にやってきた面々の画像データ。皆、愉快で楽しそうにしている表情が窺える。

そして、写真を見ていた一同はとある銀髪の少女の写真に釘付けになった。

「……………<sup>アインス</sup>初代!?」

「……………?」

第八話 レンタル貸し出し中（後書き）

ついに登場！原作主人公の一角！

## 第九話 闇の書

今から数年前。『闇の書』と呼ばれた魔道書はとある魔導の少女達の手によって深い眠りに付いていた。

「ここはどこだろう？」

そこは一寸先も見えない闇の中だった。

何故自分は目覚めているのだ？

そして、気付けば自身が目覚めている事を自覚する。

私は……………確かに眠りに付いたはずなのに。

必死に自身が覚えている過去の記憶を思い出す。

また、あの悲劇を繰り返すのか？

自身に掛けられた呪いを思い出す。

また、自分を眠りに付かせてくれた人達を悲しま  
せるのか？

永遠を終わらせてくれた少女達の事を思い出す。

あの時願ったのに。

少女達に送った自身の願いを思い出す。

あの人達に祝福があらんことを。

「そこにお前の幸せはないのか？」

え？

最後の願いを胸に秘め、自らの意思でまた深い眠りに付こうとした時。どこからか声が聞こえた。そして、その声が聞こえたと同時に何も見えなかった闇の中で一つの小さな光が目の前に舞い降りる。

それはとても弱々しく、今にでも消えてしまいそうな光。

だが、それが放つかすかな光はとても暖かく思えた。

そして、無意識ながらも自身はその光に手を伸ばして触れ、触れた途端に光は力強く輝き始めた。

「……………」



「……………」

黒から白へ世界が変わったと思えばそこには色の付いた世界に変わる。そして自身の目の前には一人の青年が立っていた。

「あなたは誰？」

「……………」

青年は何も答えない。何故、私を眠りから覚ましたのかと色々と言いたい事があったのに私は別に質問をしてしまった。

「何故泣く？」

「……………」

青年は泣いていた。目からは大粒の涙が溢れ出し、次第に力が抜けるように地面の上に座り込んでしまった。

あ、あかん……………緊張してきた……………。

「はやてちゃん大丈夫ですか？」

「大丈夫や。心配せんでもええよ」

どうやら緊張が顔に出ていたみたいや。

先日、アギトがルーテシアから連絡を貰ってガリユーが喫茶店『マテリアルズ』と言う所にお世話になっているらしい。せやから、アギトは久々にガリユーに会いに行こうと私達に許可を貰いに来て暇やったから私も行こうって事になったんやけど……………。

「ホンマにあの子はアインスであの子達はあの時にマテリアルなんやろうか？」

ルーテシアから送られてきた写真に写っていた少女。それは忘れもしないリインフォース（アインス）の姿とアインスのインパクトで見落としていたんやけど自分の小さい時の姿をした『闇の書の残滓』が生み出したマテリアルの子らが写とった。

普通なら「また世界を闇で覆うんか!？」って思う所なんやけど写真から窺えるその姿はさながらどこにでもいそうな普通の少女達である。せやから、ヴィータ達には心配せんでええなんて言うて出て来た。

……………なんやけど。

「なしてなのはちゃんとフェイトちゃんもおるん？」

「にはははは、私はスバルから貰った写真見て、つい」

「私もエリオとキャロから」

偶然にも親友である高町なのはとフェイト・T・ハラウンと遭

遇。どうやら二人も私と同じ事を思ったらしく休日を利用して事の真相を確かめに来たらしい。

「二人は休日仕事やったんじゃない………?」

「……………」

仕事ほっぽってこっちに来たわけやな。わかります。

「あ、ヴィータの姐御から連絡だ」

そんな気まずい空気の中でアギトの端末に着信があったらしく。着信相手の名前を知った途端なのはちゃんがビクツと反応した。

「どつたの？ 姐御？」

『アギト………!! そっちになのは行ってないかあああああ  
ああ!?!』

「うわっ！ 姐御、声が大きいよ！ ……なのはさんなら一緒にいるよ。代わる？」

『代われ!』

「はい」

そして、無情にもなのはちゃんはヴィータのお怒りを受ける事になった。

どうやら残りの仕事をヴィータに押し付けてこっちに来たらしい。

気持ちはわかるんやけど親友としてはあまり感心できひんなあ。

「ちなみにフエイトちゃんは？」

「シャーリーに任せて来た」

いや、そんなキリツとした顔でサムズアップされても……………まあええわ。

「はう……………ヴィータちゃんがお怒りだ」

「自業自得やね」

「だ、だって！ やっぱり気になるもん！ マテリアルの子達がなんでいるのかとかなんでリインフォースさんがいるのかとか！」

「呼びました？」

ちっこいリインやないよ。

「それにそのお店、たまにヴィヴィオが試作のケーキとか貰ってますごー！ つくおいしんだよ？ いつもタダで貰っちゃ悪いしお礼もしたいなあ……………って思ってます」

つまり私利私欲なんですね？ 友達として付き合いを考え直さなあかんかな？

「あ、お店が見えて来た」

そんなこんな話しをしながら歩いっとたら目的のお店が見えて来たらしい。アギトはガリユーに会うのがよほど楽しみだったのか真っ先に駆け出しお店の方へと行ってしまった。

「ガリユー！……………ガリユーー！！！」

うわっ！？　なんかあつたんやろうか？　一足先にお店に入って行ったアギトが何やら驚いた様な声が聞こえて来る。アギト以外の声も聞こえて来たから誰かと遭遇したんやろ。

「アギト？　どないしたん？」

「マ、マイスター！？」

「わっつと……………」

店の中を覗けばいきなりアギトが抱きついて来た。そして、ウル目になりながら私の顔を見上げてくる。

「ガリユーが！？　ガリユー！？」

「ガリユーがどないしたんか？」

「人間になつてる!？」

「「「え?」「」」

アギトは何を言っているんやろう? ガリユーが人なわけないやろう。長い付き合いなのに見間違えるなんてガリユーが可愛そうやで? なんて思いながらブルブルと震える体でアギトはとある方向を指さしていた。

なので皆でそっちの方を見て見る。

「……………」

そしてそこにいたのは無表情ながらも一人の青年。シャツにジーンズで店のエプロンをしていたのでこの店員だと言う事はわかる。だが、季節外れのマフラーはどこかで見た事があったような気がした。

「……………ガリユーだ」



「……………ギンザンが教えてくれた」

「ギンザン？」

「……………この店の主だ。むっ！ 殺気!？」

そんでまた訳の解らん状態に。

ガリユーが何かを感じたのか咄嗟に横に飛ぶと何かがガリユーのいた所に垂直に振り下ろされた。

「ガリユー……………お客様を案内せずに立ち話とはいい度胸ですね」

「……………すまぬ」

現れたのは10歳ぐらいの少女。そしてその少女は忘れようの無いあの少女だった。

つつかなんで容赦なくモップを振り下ろしたん!？ さすがのガリユーでもアレは痛いで!？ ってか、あのガリユーの表情が心なしか恐怖で青ざめてとる!？

「申し訳ございません。ただいま席に」

礼儀正しく一礼をする少女が顔を上げて私らを見ると何故か固まった。

「や、夜天の主!？ それに、高町なのは!？」

「え、え〜っと……………」



「お久しぶり？」

あ、なんかワナワナと震え始めた。

「ディアー……！！ レヴィ……！！ て、敵襲です……！！」

「ん？ なんだ？ って、夜天の主……？」

「あ、へいとだ〜」

そしてどこからともなく姿を現すマテリアル達。

「な、なにしに来た！？ まさか、また我らを消し去るつもりか……？」

「パイロシューター！ パイロシューター！ パイロシューター！」

「シュテル！？ モップを構えても魔法は出んぞ！」

「ハッ！？ 私とした事が」

どうやら私達を見てかなり私そっくりな子となのはちゃんそっくりな子が動揺しているらしい。

あんな事しておいて言うのもなんやけどそれはそれで傷つくなあ……。

「うわ〜へいとが大きい〜」

「フェイトだよ」

「フェイト？ フェイト、フェイト、フェイト……うん、覚えた  
」！」

「偉いね」

「えへへ、僕はレヴィー！ へいとは何しにきたの？」

「フェイトだよ」

そこでこっちはこっちで漫才をしてらっしゃる。そしてさすがフ  
イトちゃん。この子のボケにも動じひん。

「はやてちゃん。これって……」

「何も言わんといてなのはちゃん。……自分でもようわからん」

なんと言うか……この状況を理解するのに苦しむ。

「親父殿ー！！ 助けてー！！」

「お、おい！ まだケーキの下ごしらえが終わって って、  
どうした？」

「魔王御一行が来たー！！！！」

「はあ？ 魔王？」

私そっくりな子がクリームの入ったボールを抱えている男性を店

の奥から引きずり出して来たよつた。見た目二十代後半でガリユールと同じぐらいの背の高さ、んで持ってミットでは珍しい灰色の髪の色ですこし癖っ毛が目立つ人。たぶん、この人がここの店主なのだろう。

あ、なのはちゃんが……………。

「魔王じゃないの—————!!」

NGワードに反応して切れた。

その所為で子供達はすっかり怯えて店主さんの後ろへ隠れながら怯えとる。

「マスター。スポンジは何分チンすれば……………あっ」

「「「あ「「「

そして、今回の目的であった少女が店の奥から姿を現すと場の空気が一気に凍ってしまった。

なんや思っていた再会の感動はそこにはあらへんかった。

「どうも、初めまして。喫茶店『マテリアルズ』の店主をしております。ギンザン・イツキです」

突然の来客………なのではないのだが、予想外な客がやって来た。

「八神はやてです。ガリユーの友達であるアギトの保護者の様なものをしております。で、こっちがリインです」

「リインフォース？（ツヴァイ）です」

「アギトです！」

と、俺の自己紹介に答えるように八神さんが自己紹介をする。

「初めましてイツキさん。高町なのはです。いつも娘がお世話になっております」

「娘？ 高町？ ああ、もしかしてヴィヴィオのお母さん？」

「はい！ いつも美味しいケーキありがとうございます！」

んで、高町さん。あのヴィヴィオの母親って言うのには驚いたがなんだか優しいそうなんだ。

なんで魔王なんだ？

「フェイト・T・ハラオウンです。先日ルーテシアの所に行った時エリオとキャラコがお世話になったみたいで」

「エリオとキャロ？ えーっと……………お母さんですか？」

「保護責任者です」

ああ、納得。

にしても世間は狭い。まさか、最近知り合った人達が家の子供達のオリジナルと関係者だったとは。

……………そりゃ、勘違いされてもしょうがないよな。

「にしてもお前等……………そろそろ降りてくれない？」

「「「やだ！」「」」

三人娘は現在俺に引っ付き中。何故だか知らんがお客さんであるこの人達が来てからシュテルとディアは怯え俺から離れようとしな。レヴィにいたってはなんだか仲間はズレにされた様な感じに思ったのか便乗して俺の背中へとよじ登ってくる始末。

お前等この人達に何されたよ？

「問答無用で存在をかき消された」

「フルボッコにされました」

「覚えてない！」

順にディア、シュテル、レヴィである。

まじか……………。

「あ、あの時はしようがなかったんや！ 話ししようにも聞いてくれへんし。それにいきなり自爆みたいな事されたら……………」

「わ、私も！ ただちょっとバインド掛けてブレイカー撃つただけだよ!？」

「私は…………… なんかあつたつけ？」

三者三様の答えを聞いて納得した。

高町さんが魔王と呼ばれるゆえんを。

「違うもん!!」

あれ？ 顔に思った事が出てたか？ しかし、お前等。高町さんが凄むと身を縮込ませるなよ。レヴィに関してはその小さな腕が首に掛って見事に決まっているので苦しいとです。

「早速ですがイツキさん。あなたとそのマテリアルの子達とその…………… レグナちゃん？ との関係を教えていただけませんか？」

あ、うん、そうね。色々知りたいだろうし、ちゃんと教えなくちゃならんよな。

「ある日突然現れた『闇の書』と言われる魔道書とレグナをいじく  
つてたら三人が出て来ました」

「「「はい？」「」」

「ですよー？」

でも実際、色々あって突然闇の書と一緒にレグナが現れて、うわあ、これはヤバいと思って修復したら三人が出て来ただけなんだから。

なんで俺の前に現れたのかは……心当たりがあるけど確証じゃないから話さない。

「マスター。その事について私から説明します」

「ん？ そっかい？」

「はい」

そんな訳で我が家のレグナちゃんからの説明です。

「その前に……お久しぶりです。主はやて、そして皆さん」

あれ？ 説明しないの？

「え？ ってことはやっぱり……」

「はい、私はあなたと共に一時を過ごしたリインフォースです」

「……………なんで？」

「……………」

「なんで生きてる事を教えてくれへんかったの!？」

レグナと再会を果たした八神さんはどうしてレグナが生きていると言う事教えてくれなかったのかが納得いかなかったらしい。それはもうテーブルに身を乗り上げ、目には涙が溜まって潤んでいる。対してレグナは申し訳無さそうな表情をして八神さんを見ていた。そして、その理由を喋る。

「申し訳ありません。ですが、私はこの方から離れる事が出来ないのです」

「え？」

「主と別れてから私と言う存在は闇の書と共に消えました。ですが、微かに残った闇の書の残滓が闇の書の消滅を許さず、不完全な形でこの世に留まったのです。そしてこの方、ギンザン・イツキと出会い、修復してもらいました」

「しゅ、修復？」

「ああ〜そこに付いては俺が」

俺が補足説明をいたします。

「発見当時のこいつはそりゃ〜酷いもんだった。融合騎としての機



能はもちろん存在を構築する機能、自身の核、リンカーコアまでロボロ口だった。それでよく半年も存在維持できたもんだって感心するさね」

淡々と説明をしていると八神さんの他にも来客した皆さんが黙ってその説明を聞いてくれている。

「幸いなことは切り離れた機能の中に闇の書のバグ。『闇の書の闇だっけ？ まあ、それも一緒に無くなっていたから修復は時間が掛ったが手間は無かったよ。かすかに残っている構築プログラムを修復して傷ついたリンカーコアの代用。そんでもって融合騎としての修復。まあ、いろいろやってたら起動まで3年も掛っちゃまったけど……それでもまだ治らない所もあるし」

指を折りながら説明していると皆さん何故かあんぐりした表情をしてくらっしやる。

何か変な事を言ったか？

「え〜っと……つまり、壊れかけたリインフォースを修復したのがあなたって事でええですか？」

さつきからそう言ってるじゃないか。

「なんで管理局が投げ出すほどの破損を一個人で直せてしまうのが気になりますけど……とりあえず、お礼を言っておきます」

何やら複雑そうな顔をして頭を下げる八神さん。それに続いて高町さんとハラオウンさんも頭を下げる。

「もう一つ聞いていいですか？」

「なに？」

「その子にはリインフォースって名前があるのになしてレグナって呼んどるんですか？」

「ん？ ああ、その事か。それは

「私が新たな名を所望したからです」

説明しようとするレグナが割って入ってくる。

「リインフォースと言う名は私の意思を継ぐその子に授けました。ですから、私とその名を名乗る訳にも行きません。ですから、マスターから新たな名をいただいたのです」

リインフォースと言う名は八神さんが連れて来た長髪の銀髪の子に託された名。自分で託しておいて同じ名を名乗るのに抵抗があるらしく本人の希望により俺が命名しました。っと言っても、正式名称はリインフォースのまま愛称はレグナってただけなんだけど。

「ちなみにレグナってどんな意味なんです？」

「ただの言葉遊びだよ」

「ふえ？ レグナ、れぐな、Legna……………ううゝわかんないですゝ！」

レグナの名前の意味が気になったリインフォース？は俺にその意

味を聞いて来るが普通に教えるのもつまらないので謎かけの様にしてみた。

ヒントは『墮天使』です。

「ハツハツハ！ 悩め、悩め！」

「ううゝ教えてください！」

「恥ずかしいので嫌だ！」

「ええゝ…………お姉ちゃんに恥ずかしい名前付けたんですか？」

「……………今思えば俺はまだ青かったってことさね。って、お姉ちゃん？」

「アインスはラインのお姉ちゃんのような存在です！ だからお姉ちゃんです！」

なるへそ。そりゃ、同じような存在だし、実際姉妹の様なもんだしな。

「はやてちゃん！ お姉ちゃんが生きてくれて私は嬉しいですよゝ」

「ライン……………せやね、どうしておるとか、やなくて今ここにいる事に喜ぼうか」

「はい！」

それで納得したのか八神さんはラインフォース（ツヴァイ）の頭

を撫で、再び会えたリインフォース（レグナ）を見つめ

「おかえり、リインフォース」

再会を喜んだ。

「はい、ただいま戻りました」

そしてレグナも本当の主に出会えた事を喜んで微笑んだ。

おお………し、信じられない物を見た！ あ、あのレグナが  
微笑んだ！

「な、なんですか？」

「あ、いや。お前がハッキリと笑うところなんて初めて見た」

長い事一緒に暮らしていたがこうまでハッキリと笑う所なんて見た事無かつたし、………ちょっと悔しい。

「私んとここにいた時は結構笑ってましたよ？」

「なにツ！？ それはマジか！？」

「はあ………イツキさんってあんまりレグナちゃんに愛情注いでないとちやいますか」

勝ち誇った顔でニヤリと笑う八神さん。

なんかムカつく。

「黙れ！ 腹黒狸！」

「なっ！？ 人が気にしている事を！ 初対面の人に対して失礼とちやいます！？ ましてや、こっちはお客様ですよ！？」

「ハン！ 客が店を選ぶんじゃない。店が客を選ぶんだ！ ましてや家の娘に手を出す様な輩は断じて許さん！」

「どんな暴論や！？ 第一娘って、リインフォースはあなたの娘ぢやいます！ 私の家族です！」

「それでも今は俺の家族だ！ 八神はやて！！ これより貴様は俺の敵とみなす！ 娘はやらー！ーん！！」

「ふん！ おもろいやないですか？ 元より可愛い物は奪ってでも愛でたい！ ならば我が道を通し通していただきます！」

最低な性格をしているな！？



「ああ、そう言う事か。確かに主はやはり私の帰るべき場所でもあるが……………」

「??？」

少し悩んでいると高町なのはが不思議そうな顔をして私の顔を覗いて来る。

思わずその視線を反らしてしまった。

「えっと……………ここにいる人達も私の家族だ。その……………正直、どうしていいのやら解らない。とりあえずそれを決めるのは私の体が完全に治ってから決めようと思ったのだが……………」

「ふふ、そっか。それでいいと思うよ」

私の答えはおかしかったのだろうか？ 高町なのはは嬉しそうに笑っている。

「私はおかしな事を言ったか？」

「ううん。そんなことないよ？ でも、主が二人もいてこれから大変だね？」

高町なのははそう言いながら未だに口論をしている二人を見て苦笑いをしていた。

「高町なのは。あなたは一つ勘違いしている」

「え？」

「私の主は八神はやてただ一人だ。それ以外の主など存在などしない」

「え？ イツキさんはなんでマスターなの？」

「この店の店主だからだ」

「あ、そっちのマスターね？ でも、それ本人が聞いたら泣いちゃうんじゃないかな？」

「そんな事ないさ。それに付いてはマスターも了承済みだ」

「なんで？」

「……………いや、忘れてくれ」

未だに恥ずかしくて言えないが……………

私はマスターの事を本当の『父親』だと思っているのだから。



## 特別編 クリスマス（前書き）

クリスマス？ え？ なにそれおいしいの？

そんな訳で今回季節ネタと言う事でクリスマスに関する話しをやり  
ました。

尚、話は本編とは時系列は関係なく、まだ登場していないキャラが  
登場しております。

ちなみにガリユーは出てませんw

## 特別編 クリスマス

「はぁー……………暇やわ……………」

「お客様。お出口はあちらになりますのでとっととお帰りください」

「客を無碍にするとは……………責任者呼んで来い！」

「俺が責任者だ。オイ、狸。コーヒー一杯で3時間も粘るんじゃない  
エ！」

冬のとある寒い日の事。俺の目の前にいるのはかの有名な八神は  
やて司令官であらせられる。

いや、別に特に何をしろって訳ではない。

何せ暇さえあれば店にやって来て「レグナを出せ」って言うって  
来るのだ。

いい加減ウザい。

「家に帰っても皆仕事やし、一人じゃ退屈なんよ？ せやったらレ  
グナにでも合いに行こうって思ったんや」

「生憎レグナは学生だね。今は学校だ」

「なして融合騎が学校なんて行つとるん？」

「なんでって……………子供だから普通に行くだろ？」

「見た目だけの話しやる？」

「生憎、俺製の魔道具は特別製だ。見ろ、その証拠に！」

ポケットに入れていた財布から一枚の写真を取り出して八神に見せた。

「なっ！？ レグナちっさ！？ どないなってんねん！？ つうか可愛いいい！！」

俺が見せたのはレグナと出会ったところの写真。確か、闇の書を起動させて3カ月ぐらいだったか？

そしてその写真には5歳ぐらいのレグナが写っていた。別に八神の融合騎のリインフォースの様に小さくなっている訳ではない。本当に5歳ぐらいの小さな子供なのである。

「前に言っただろ？ レグナの破損して所を修復したって。ただリンカーコアだけではどうにもならなかった。自己修復を直しちまうと防衛プログラムまで再生させ

「あ、待った。その話し長くなる？」

「……………なる」

「ならええわ。それはまたの機会に」

お、おう。

「はあ〜……………にしてもイツキさんの魔法って無茶苦茶やな」

「よせいやい。照れるじゃないか」

「違法魔法やったらしょっぴくで？」

「……………大丈夫だ。問題無い」

「なんや？ 今の間は？ …………… ああ〜所でイツキさん？」

「ん？」

「クリスマスパーティーせえへん？」

「はい？」

そんな突然の八神の申し出をされてから一週間。

本日は12月25日。

「ものども！ 今日がクリスマスパーティーだ！」

「「「わーい!」「」」

「ディア? 店の状態は?」

「いつも通り誰もいない!」

おい、ゴラア。今日のために休みにしたんだから当たり前だ。

「レヴィ? 飾り付けは?」

「よくわかんないからテキト〜!」

うん、ほんとよく解らん飾り付けが店に付けられてるな。

なんだあのタヌキの置物は? 八神への嫌がらせか?

「シユテル。クリスマスケーキは出来たか?」

「失敗しました」

うむ、お前に任せたのが間違いだった。

レグナに作る様にと言ってくれって言っただけなのに何故お前が作る?

「よし! 今日は中止だ!」

「「「ええー!?!」「」」

「だって、何にも出来てないじゃんよー?」

なにせミッドではクリスマスなんてイベント無いし、そんなの地

球独特の記念日だ。突然そんなことやろゝなんて言われてもお店にやゝそんなイベントグッズなんて売って無い。

「だから我等が用意して来たが……………」

「おろ？ 誰かと思えばシグナム、シャマルさんにザフィーラ」

「こんにちは。イツキさん」

「世話になる」

はて、八神ファミリーの三人がいつの間にかやって来た。だが、約束の時間は夕方のはず。今はまだ昼前だぞ？

「主がどうせ用意出来て無いだろうと思ってな。色々持ってきた」

「マジですか。助かります」

「気にするな。所でなんだこの装飾は？」

「レヴィちゃん作です」

「ああゝなるほど……………」

誰がこの店の装飾をしたのかと聞けば納得してくれたシグナム。レヴィ、胸張ってエツヘンってやってても褒められて無いぞ。

「にしても凄い荷物だな？ ってか、ザフィーラのそのもみの木何に使った？」

「クリスマスツリーだが？」

「クリスマスツリー？ ああ〜そう言う事。へえ〜ツリーってそんななんだ」

「クリスマスは知っているだろ？ お前は地球出身と聞いたが？」

「生憎地球で過ごしたのは5歳ぐらいまでだ。八神に言われるまでクリスマスが存在すら忘れるぐらいだ。そんな小さい頃の思い出なんて覚えてない」

「うむ、すまぬ」

「気にするなつて。んじゃ、準備を始めますかね？ とりあえず、装飾はザフィーラと子供達で俺とレグナはケーキの作り直しかね？ ……………シグナムとシャマルさんはどうする？」

これから準備に入ろうと適当に作業分担の人員を振り分けていたら二人余った。なのでその余った二人に装飾と料理どちらかを頼もうかと思っただが…………シグナム、何故そんなに顔を青ざめている？

「わ、私が料理を手伝おう！ シャマル！ お前はザフィーラの手伝いを！」

「え？ でも、シグナム料理」

「な、なに！ たまには私も料理を試みたくてな！ ハッハッハッ！」

「そ、そう？　じゃ、装飾の方を手伝うわね？」

「ああ！　よろしく頼む！」

はて？　あの冷静沈着のシグナムが妙に慌てている。いきなり自分が料理をすと言い出し、装飾はシャマルに押し付けてしまったのだ。ザフィーラも首を激しく残像が見えるぐらいに縦に振ってシグナムの言う事に同意していた。

一体何があったんだ？

「なるほど。シャマルは壊滅的に料理が出来ないんだな？」

「ああ、だから無理矢理にでも厨房に立たせる事はさせないでくれ」

「了解。………って、お前さん何を作ってるんだ？」

さて、店の厨房で俺とレグナ、そしてシグナムの三人がパーティー用の料理を作っている時である。

なぜあれだけシグナムが料理をすと言い出したのかと問い正せば、シャマルの料理は壊滅的であり、一種の科学兵器を作りだして



しまつと言われた。

……………マジか。

家のシュテルも料理は壊滅的であるがそれでも丸焦げにする程度だと言つのに。

「何とは？ マツシユドポテトだが？」

「なんでジャガイモをそのまま潰す？ 皮は剥け。それに潰すのはジャガイモを一回蒸してからだ」

すり鉢の中にはジャガイモが丸々そのまま突っ込まれ、シグナムが悪戦苦闘しながらそれを潰していた。

お前もシャマルといい勝負じゃないか？ などと思い、しょうがないから一通りの作業をシグナムに教える事にした。

「……………すまん」

「謝るのは後。んじゃ、皮はこうやって剥いて、最後にジャガイモの目を切り抜く。　　んで、沸騰した鍋で茹でてもいいし、蒸し器で蒸してもいいから。で、潰す」

「い、こうか？」

「ん、その調子。で最後にジャガイモを蒸している間に切った玉ねぎ、そんでミックスベジタブルとマヨネーズを適当に入れて混ぜれば出来あがり」

「うむ、意外と簡単にできるのだな。そしてお前は私に料理を教え

ながら器用に別の料理をするのだな」

シグナムの言う通り、俺はシグナムに料理を教えながら自分が調理していた料理を仕上げてしまう。

「これで飯食ってる身としてはこれぐらい当たり前。俺とレグナ、ディアはさすがに簡単な物しか作らせないけど、それでも回らない時があるかな。一人で二人分の働きをしていたら出来るようになった」

「マスター。下ごしらえが終わりました」

「あいあい。仕上げは皆が来てからでいいから次やってくれ」

「はい」

そんな話をしているともう一人の厨房担当であるレグナがそう報告して来る。なので次に作る料理を指示して再び作業に戻らせた。

「しかし、あのリインフォースがこうして料理するとはな……………」  
「一緒にいた時は想像も出来なかった」

「そうなのか？」

「あ奴も料理が苦手だな。いつも失敗してた」

「始めはそんなもんだろ？ 現にシグナムだって失敗した」

「うっ……………」

「それで教えて学んで出来るようになった。たったそれだけの事だよ」

「ああ、こうして見ていると『普通』の子供だ」

シグナムは微笑ましくレグナが料理している姿を見ている。俺も視線をシグナムが見ている方へとやる。

そこには一人の少女が一生懸命に料理をしている姿があった。それは本当に人間の様な仕草で彼女が魔道具の一種だと教えなければ解らないぐらい自然である。まあ、魔道具だって言っても信じてもらえるかはわからないが。

つまり、それだけ『人間』らしいのだ。

「主はやてではなくお前が主だったら………なにか違ったのかもな」  
「んじゃ、乗り換えるか？ シグナムの様な美人さんが店にいくれるだけでも客足が増えそつだ」

「……………接客は好かん」

「くつくつく……………解りやす」

「……………」

珍しい事をぼやくものなら思わずからかってみた。案の定、シグナムは頬を赤くしてそっぽを向き、らしい言い訳をして来る。  
あまりにも予想した通りの返答だったので思わず笑った俺は悪く無い。

ただその視線だけで人を殺せそうな目で睨まないでほしい。

「つと、こつちも出来上がり。んじゃ、シグナム次は」

「そんなやり取りをしながら俺達はパーティの料理を仕上げた。行った。」

「『メリークリスマス！』」

「そんなこんなで夜。遅れて来た八神とリインとアギト。そして、今日は仕事だったヴィータは高町親子とフェイトちゃんを連れ、なぜかスバルちゃんとティアナ、エリオ、キャロちゃんまでもが家の店にやってきた。」

「そして今は店のテーブルに並べられた料理を前にして皆さん大はしゃぎ。」

「まあ、料理は大量にあるからおかわりしてくれ」

「『おかわり！』」

「『早ッ！？』」

ちなみにおかわり宣言したのはスバルちゃんとエリオ。そして、レヴィである。

「あんたもつとゆっくり食べなさいよ」

「だってギン兄の料理おいしんだもん！」

「まあ、確かにおいしいわね。……でも、男の人に料理で負けるとか。いや、プロだしいいのか？」

「どうしたの？ ティア？」

「なんでもないわよ。バカスバル！」

おかわりの皿に料理を盛り付けているとそんなスバルちゃんとティアナの会話が聞こえた。

「エリオくん。口の周り汚れてる」

「え？ ほんと？」

「うん。ジッとジッと」

「わっ！ いいよー！？ それぐらいー！」

「ジッとジッと」

「は、はい……」

さらに料理を盛り付けているとエリキャラココンビがピンク空間を

展開していた。

フリード。プチトマト喰うか？

「（食うー！）」

ならばフライングキャッチだ。

「あ、ギンザンさん！フリードに変な芸を教えなくてください！」

「別に芸でもなんでもないとと思うのだが？」

そして何故か怒られた。

とりあえず、おかわり希望の奴等に飯を渡して俺も子供達と一緒にテーブルに座ることに。

「パパー。ジュースのおかわり！」

「座った直後に立てと申すか？」

だがここで娘の我が儘を聞いてやる俺は父親の鏡。  
メンドクサイのでジュースの入ったジョッキをそのまま持って来る。

「へー。このマッシュドポテトはシグナムが作ったん？」

「はい。ギンザンから教わりながらですが」

「うん、美味しいで！家で作る時はシグナムに頼もうかな？」

「きよ、恐縮です」

よほど自分が作った料理が褒められたのが嬉しいのかシグナムは身を縮めてしまった。何気にあの後シグナムに他の料理をやらせてみたのだが見事に失敗。

唯一の成功品がこのマッシュドポテト。

ただ、もうちょっとマヨネーズの配分を押さえてくれたら俺的には合格。ちよつとしょっぱい。だが、あえてそれを言わないのは八神の優しさ。あいつは本当に家族に甘いと言うか優し過ぎる。

あ、人の事言えねえ。

「そうか？ 結構普通だぞ？」

「その割にはヴィータはおかわりしすぎですう」

「姐御。何気にそれ3杯目」

「うつつるせえー！」

んで、ヴィータがシグナムのマッシュドポテトを食べて素っ気ない感想を言うとリンとアギトにからかわれている。

あれ？ なんでシャマルはそんなに落ち込んでるんだ？

「ところでイツキさん？」

「あん？　なんだよ八神」

「そろそろ始めへんか？」

「……………そうだな。始めるか」

そんな八神の申し出に答えると俺は席を立ち上がり準備をする。

始まるのは『決闘』だ。



クリスマスパーティー。皆で楽しく騒いでいると主はやてとマスターの二人がおもむろに立ち上がり、店あったテーブルを移動させて対面するように二人が立っている。この場にいる者は一体何が始まるのだろうと思いつながら二人の事を見ていた。

「八神。実際これは今日の前座の様な物だが……………全力で行かせてもらおう」

「奇遇だな。私も最初から全力で行かせてもらおうで？」

「……………だったら始めよう」

「……………せやな」

「「<sup>デュエル</sup>決闘を！！」」

ドオン！！

そんな重音が響いたのはすぐだった。

二人はどこから出したのか一冊の分厚い本を取り出し、それをテーブルの上に置いたのだ。

あれは……………アルバム？

「私の先攻！ 私は『大人版リインフォース』を召喚！」

そう宣言して主はやてが取り出したのは一枚の写真。それも、以前主達と共に平穩を過ごした私の写真である。

.....え？

「グハッ！！」

「父上は500のダメージを受けた」

「シュテル！？」

その写真を見るやいなやマスターは何故かダメージを負った様な  
仕草をして、私の横にいたシュテルが何かを言っている。ディアは  
シュテルの言葉にビツクリしたようだった。

「.....くっ！ まさかレグナがそこまでの美女になるとは.....  
成長が楽しみでならない」

「ふふっ、そんな調子で大丈夫かあ〜？」

「なんの！ 次は俺のターン！ 『レグナ6歳。小学校に入学する』  
を召喚！」

「ブハッ！！」

「八神はやては800のダメージを受けた」

「だからシュテル！？」

そして今度はマスターが主はやてに見せつけるかのように写真を

見せ、マスター同様に主が何かダメージを負っている。

「ま、まさかのランドセル姿……………これは来る……………想像以上に来るぞ」

何が来るのだろうか？

……………いや。と言うより何故二人は私の写真でこのような事をしているのだ！？

「私のターン！ 『シヨツピングでフリフリの可愛い洋服を鏡の前で合わせて嬉しそうにしているリインフォース』を召喚！」

「父上はダメージを回避した」

「なん……………やと……………」

うわあああああああ！？ 主！？ 何故その事を知っているんですか！？ つか、なんで写真を撮ってるんですか！？

「甘いな八神。レグナはクールに見えて実は可愛い物系が好きなのは把握済みだ。ただ、大人になってもそれであるギャップに萌えた」

「くそっ！！ すでに耐性がついたか！？ ならばもうコンボや！ 『実はシグナムもそうだった』を召喚！」

「ちよっ！？ それ反則！？」

「父上は800のダメージを受けた」

……ああ、シグナム。あなたの気持が手に取る様に解ります。だから、そんなに顔を赤くして俯かないでください。

よりによってあなたとそう言った服を見せ合いつこをしているところを写真に撮られるとは……。

「やばい。まさかここまで追い込まれるとは……もう出し惜しみしている場合じゃないな……」

一体全体なにがマスターをあんなに追い込んでいるのだ？

「ならば俺はアルバムを生贄にアイテムを使用する！」

そう言っ取り出したのは映像録画用のデバイスであった。

マスターが素早く操作するとデバイスから映像が映し出される。

『レグナ？ 何してるんだ？』

撮影者はマスター。声だけ聞こえるのはたぶんデバイスを手にして撮影をしているから。そして、写し出されているのは私。姿からしてまだ5、6歳の頃。

『にや〜ん』

「ぐばっ！？」

「八神はやては500のダメージを受けた」

小さい私があるとある方を指さしている。カメラをそちらに向けたマ

スターが写し出したのは猫であった。

……………恥ずかしい。

いくら小さいからと言って猫をそんな風に言った自分が恥ずかしい。

『アレは猫だ』

『じゃっっ』

「八神はやては2000のダメージを受けた」

『猫』

『じゃー』

「八神はやては6000のダメージを受けた」

……………もう、無理。

「……………あ、あかん。かわいすぎる」

「……………べんじゅん勝ち」

「……………封縛」

「「「へ?」」」

……………もう、我慢なりません!!

「ブラッディーダガアアアアアアアアアア!」

「「「ちよ!?! まっ!?! ぎゃあああああ!?!」」

「「「ごめんなさい」」

「……………まったく、とんだ恥さらしです」

レグナの制裁が終わって俺と八神は土下座中。  
しかも、家宝は没収アルバムとデバイスされてしまった。  
ちなみに八神もアルバムを没収されている。

とほほ……………。

「でも、小さいリインフォースさんもかわいいよ」

「ホントだね。かわいい」

「き、貴様等あああああああ！！」

そしてレグナが目を離れた際になのはちゃん達が家のアルバムを見ていた。もちろんレグナはすかさずそれを奪い取る。

にしても、そんなに恥ずかしかったか？

子供なんて親が語る恥ずかしい過去を永遠に語られるもんだぞ。

「なあ？ イツキさん。そろそろ……………」

「ん？ ……………そうだな」

簡潔に何かを言いた気な八神。しかし、俺はそれがなんだかを全て聞く前に理解した。

正座の所為でちょっと足が痺れたが気にせず立ち上がる。

そして、店のカウンターの裏に隠してあった紙袋を取り出した。

「おい、レグナ」

「何ですか！？ まだ、立って良いとは わっ！？」

まだ怒っているようなので無理矢理黙らせる。と言ってもレグナの頭にサンタ帽子をかぶせたただけなんだが。

「「お誕生日！ おめでとー！！」」

「……………え？」

俺達は手にしたクラッカーを思いっきりレグナに向けて引っ張り、

クラッカーのヒモがおもいつきりレグナに絡まっている。

「いや、八神に聞いてさあ。今日がお前の本当の誕生日だって言うじゃん？ いままではお前が正常機能した日を誕生日としてたけど……………」

「え？ いや、え？」

やはりと言っべきか。レグナはもの凄く混乱している。

「せや、今日は『リインフォースがリインフォースになった日』。あの日は辛い思い出でもあったけどあなたが生まれ変わった大切な日でもあるんや。せやから、今日はリインフォースの誕生日！」

「あつ」

八神の言葉でやっと意味を理解したレグナ。

12月25日は『闇の書事件』があった日。俺は当事者では無いのでその詳細は知らないがその日は八神達とレグナにとってとても思い出深い日でもある。

『リインフォースがリインフォースになった日』

まだ名前の無かったこいつに八神から送られたクリスマスプレゼント。

そのおかげで長年共にあった呪いから解き放たれ、一時の祝福を手に入れ、心残りがありながらも眠りに付いた。

「……………あ、ありがとうございます」



「いえいえ」

「なんの」

貰ったプレゼントを大事に抱えながらレグナは恥ずかしそうに俯  
いてしまう。

そしてそんなレグナを見て俺と八神は微笑ましく笑っていた。

「パパー！ 僕達には？」

ん？ なんか皆が感動してしんみりしている所なのに横槍が。  
だが、そんな無粋も許してしまう俺は良いパパ。

「はいはい、ちゃんと用意してありますよ」

「わーい！」

レグナにあげたクリスマスプレゼント兼誕生日プレゼントとは別に隠していた青、紫、赤の三つの袋を子供達の前に並べる。

「ほれほれ、好きな袋を選びなさい」

「我は真ん中のをいただく」

「うーん……………僕はコレ！」

「毎年これは悩みます……………私はこれで」

そんなこんなで紫の袋がディア。青の袋がレヴィ。赤の袋がシュテルに行き渡った。

さて、三人にそれぞれの袋が行き渡った所で開封。

「おおー！ これは我が欲しかった本！ ありがとー親父殿！」

「僕はゲームだあ〜」

「クマのぬいぐるみ。かわいい……………」

どうやら三人共それぞれ欲しい物が行き渡ったようである。

「うわあー……………いいなあ〜」

と、そんなプレゼントで喜ぶ三人娘を羨ましそうしてこっちを見

ていた。

「大丈夫だよヴィヴィオ。家に帰ったらちゃんとサンタさんがプレゼントを用意してくれているから」

「ホント!? フェイトママ!」

ん? サンタさん?

「ヴィヴィオはいい子にしていたからね。ちゃんとサンタさんが用意してくれてるよ」

「わーい!」

なんかサンタさんとやらで話が盛り上がっている高町親子+フェイト。しかし。一体サンタさんとやらは何者だ?

「フェイト、サンタさんって誰?」

俺と同様の疑問を持ったレヴィが俺から貰ったプレゼントを大事そうに抱えてフェイトに質問をしていた。

「サンタさんはね。毎年クリスマスになると子供達にプレゼントを配ってくれるおじいさんだよ」

「ホント!? もう一つプレゼントがもらえるの!?!」

「あっ」

あれ? レヴィの質問に答えていたフェイトはしまったと言わん

表情をしている。

「えーっと……………ギンザンさん」

「ん？ どうした、なのはちゃん。申し訳なさそうな顔をして」

「実はですね……………」

ゴニヨゴニヨとなのはちゃんが俺に耳打ちして来る。瞬間、彼女の耳打ちが終わると衝撃的事実を聞かされた。

「……………マジっ？」

「……………マジです」

チラリとフェイトの方を見れば申し訳なさそうにペコペコと頭を下げていた。

「はあ……………どうした物かね……………」

なのはちゃんが教えてくれた事実は『サンタは親がやるもの』と言う事。

そう言えばそんな話を聞いた事がある。だがいくら地球出身とは言えそれは幼い日の記憶。今となっては記憶が曖昧でうまく思い出せない。仮にサンタが親だとしても俺はすでに子供達にプレゼントをあげてしまったのでサンタからのプレゼントを用意する事も出来ない。

「パパ！ クリスマスってすごいね！ プレゼントがたくさん貰え

る」

レヴィよ。そんな期待の籠った瞳で俺を見るでない。

しかしどうした物か。サンタの存在を信じ切った状態で「実はサンタはいない」などと教えたらガツカリするだろう。

……………むしろ泣くかもしれない。

「んーっと……………レヴィはサンタさんに何を貰いたいんだ？」

念のために何が欲しいか聞いてみることに。

「え？ うーん……………」

数秒間、レヴィはサンタから何を貰うか悩んでいた。まあ、突然親以外から何か貰えると聞かされてアレが欲しいと即答できる訳も無く、必死に考えている。

「特に何もいらない」

が、それは予想外な答えだった。その場にいる一同はそんなレヴィの答えを聞いて鳩が豆鉄砲を食らったかの様になっている。

いや、俺も含めてなのだが……………。

「はあ？ なんで？」

「パパから欲しい物もらったから。サンタさんにはまた決まったらお願いする！」

「えーつと……レヴィ？ サンタさんは今日だけしか来ないんだぞ？ そしたらまた次の年まで来ないんだ。それでも良いのか？」

「そうなの？ うーん……だったら、来年まで我慢する」

「……そうか。じゃ、俺達といい子にしてたら来年サンタさんがすごい物をくれるかもな」

「うん！」

えへへと笑うレヴィは非常に可愛かった。

思わず抱きついてそのまま抱っこした俺は悪く無い。

しかし、レヴィもそんな突然の事に始めは戸惑っていたが次第に嬉しそうにしてくれた。

そしてなんでフェイトは顔を赤くしているのだ？

「さて、パーティの続きをしようか」

そう言ってクリスマスパーティー兼レグナの誕生日会は続行される。

その後は言うとお八神と俺で再びレグナの話になってまたレグナが怒ったり、スバルちゃんとエリオが大食い競争してティアナとキャロちゃんが苦笑いしながらそれを見てたり、ヴォルケンリッターと高町家族を含めて楽しく談笑してたり、やっぱり一番騒がしいのは家の三人娘で途中から皆を巻き込んで遊んだりもした。

笑って、怒って、それでもやっぱり笑って過ごす楽しい一時。

今日は12月25日クリスマス。

俺はそんな一時と家族と共に過ごした。

第十話 模擬戦です 前半(前書き)

GOD買ってやったらマテリアル達の口調がまったく違う!?

でも、そんなの気にしない(オイ

そんな訳で第十話です。



第十話 模擬戦です 前半

氏名：ギンザン・イツキ

時空管理局地上部管理外世界管理課所属

階級：一尉（退役後階級を破棄）

魔導士ランク：陸戦AAA（退役後ライセンス破棄）

経歴

新暦62年 時空管理局入隊

同年 陸士108部隊に配属

新暦66年 時空管理局地上本部直属特殊部隊へ異動

新暦68年 時空管理局地上本部情報一課へ異動

新暦71年 時空管理局魔法開発課へ異動

新暦74年 時空管理局退役

免許

大型4輪免許

大型2輪免許

特殊車両免許  
危険物取扱甲1種  
魔導教員免許  
魔導開発免許1級  
デバイス技師免許  
調理士免許

趣味：読書、料理

特技：特になし

詳細

元は次元漂流者であり、発見当時は記憶が混乱しているためか自分の名前以外の事は全て忘れている状態であった。発見者は時空管理局地上本部直属特殊部隊所属クイント・ナカジマ。以後、彼女の保護を受けミッドで居住。病状に付いては時間の経過と共に記憶を取り戻しつつある。

時空管理局を退役後。自営業をとめないながら民間協力者として戦技教導部隊の座学講師（非常勤）を務める。尚、担当科目は魔法歴史、応用魔導学を担当。

フエイト・T・ハラオウンは自分のデスクの端末からそんなデータを見ていた。

「うわあ〜ギンザンって先生もやってるんだ……………しかも戦技教導部隊って、なのはの所だよね？　なんで、なのは知らないんだろ？」

きっかけはエリオとキャロの二人から貰った旅行の写真を見た時そこに写っていたのはあのマテリアルとリインフォース。もしやこれは事件なのではないだろうか？と疑問に思いながら自分の仕事をシャーリーに押し付けてまでエリオ達に貰った彼女達のいる場所へと向かった。

「なんだかんだで普通の家族って感じ……………心配は無いよね？」

だが、そこに会ったのは以前の彼女達。ではなく日々を楽しんで暮らしている普通の子供の姿だった。

何が彼女達をああさせたのだろうとまた疑問に思っていればそれは彼女達の父親が原因らしい。

ギンザン・イツキ。

それが彼の名前だった。話を聞けば昔管理局で働いていた事があったとか。なので、ちょっととした興味本位で彼の履歴書を手に入れてそれを見ていたのだ。

「フエイトさん」

「あ、ティアナ。どうしたの？」

そんな履歴書を見ていたら背後からティアナに声を掛けられた。

「ちょっと聞きたい事があって……………お取り込み中でしたか？」

「え？ ああ、大した事じゃないよ」

「ギンザン・イツキ……………ああ！ この人！」

「知ってるの？」

ティアナが私の端末に写っていたデータを不意に見てしまって声を上げてしまった。いきなりのティアナの慌て様にちよつとビックリしたけど、何か重要な事でも知っているのではと思いつぐに落ち着きを取り戻し質問してみる。

「えっと……………スバルによく連れて行ってもらおう喫茶店の店主さんです」

「ああ、そうなんだ。ティアナもよく行くんだね。私もこの間その喫茶店に行つて来たんだ」

「そうなんですか？ ギンザンさんが何かしたんですか？」

「ううん、そう言う訳じゃないよ。ちよつとこの人がやってるお店に行つたら昔管理局に務めてたつて話になって気になったから調べただけ」

「気になる事？ まあ、いいです。あの人は昔からなにかしら問題起こしてましたから」

「そうなの？」

「なんて言うかぁー…………子供っぽいって言うか…………それでよく士官学校時代に私とスバルを連れ回して遊んでくれたりしてましたけど……………」

「そうだね。そんな感じの人だった」

「それでよくスバルと…………喧嘩になって…………まあ、それでも最後には仲良くなってるんですけど」

「あはは……………」

肩を落とすティアナを見て自然と苦笑いするしかなかった。あれだけ子供と接するのがうまい人は人と接するのがうまいか思考が子供と似ているかのどちらかだ。

たぶんギンザンは後者の方だろう。

あのマテリアル達を娘として扱い、それでいてその光景はとても楽しそうだった。

「へえ〜ギンザンさんって戦技教導部隊の講師やっているんですか

……………意外……………」

「うん、私も思った。でも、意外と様になってそうだよね？」

「自分ではそんな人に教える才能は無いつて言っていましたけど」

「そうなの？ キャロはおもしろい魔法を使つて言ってたけど…

……………」

「おもしろい魔法？」

「フリードとお話できる念話だったりガリユールが人に変身できたり

……………後」

「後？」

「ううん、なんでもない」

私は思わず闇の書について話してしまいそうになってやめた。何よりティアナには触り程度しか教えておらず、その詳細は教えていない。それにこの事件に付いては管理局から秘匿するように言われているのだ。下手に教えたらティアナの立ち回りが悪くなってしまう。

「そう言えば、ヴィヴィオのデバイスって今日出来あがりでしたっけ？」

「うん、仕事終わってからマリーの所に行って来る」

「喜んでくれると良いですね」

「そうだね。なんかマリーはおまけ機能付きにしておきました！  
って、はしゃいでたけど……………」

「ははっ、ヴィヴィオに過ぎたデバイスじゃなければ良いですけど」

「そうだね」

その後私達はマテリアルズのメニューについてや最近あった出来

事に付いて楽しく談笑していた。その後、休日も仕事をしてげつそりしたシャーリーに「仕事をしてください！」と怒られ適当な所で仕事に戻った。

「ジャーン！ 高町ヴィヴィオ！ ついにデバイスを手に入れました〜！」

喫茶店『マテリアルズ』に突然の来訪者。高町ヴィヴィオが自慢げに店にやって来た。

そしてその手には兎のぬいぐるみが握られている。

「へーおめでとう」

「えへへっ！ こないだね、ママ達が進級祝いでくれたの。名前はセイクリッド・ハート」

そう自己紹介されたセイクリッド・ハートはピシッと敬礼して来た。

「補助型デバイスか？ ふーん……………今のデバイスはこう言った事も出来るんだ」

管理局にいた時なんてこんな可愛らしい外見のデバイスなんて無かったしなあ。

「それでね。ギンザンにお願いがあるの」

「あん？ お願い？」

「私の魔法を見て欲しいんだ」

「魔法？」

「うん。ちょっとセイクリッド・ハート……クリスとの適合がうまくいなくて……」

「んなもん。ママに見てもらえばいいだろ？」

「ギンザンがママって言うと変態っぽい」

黙らっしやい。

「うーん……わかった。とりあえず、まだ店があるからそれからな」

「ほんと！？ やったー！」

そんな訳でヴィヴィオの魔法コーチをする事になりました。



「なんで君達までいるの？」

「にははは、一応ヴィヴィオの親なので」

「私も」

店が終わってからその夜。場所は変わって市民公園内の公共魔法練習所。

ヴィヴィオとの約束でデバイスとの適合調整を手伝う事になったのだが何故が高町さんとハラオウンさんが来ている。

「それに、ギンザンさんって戦技教導部隊の座学講師しているって話じゃないですか。なんで、教えてくれなかったんですか？」

「ん？ 高町さんは戦技教導部隊なの？」

「はい。実技担当ですけど」

「実技じゃ会えないでしょに。しかも俺は月二ぐらいでしか教えてないし……どうも、体を使う指導するのは苦手なんだよね〜」

実際教えているのも教科書通りの事だし、たまに脱線して歴史の小話をしてしまう事もあるがな。

……その時に限って受講生は何やら期待の眼差しをして食い入る様に聞いて来るのは色々問題なのではないかと思う。

「先生！ 今日はよろしくお願いします！」

「「「よろしくお願いしまーす」「」」

何故か目の前のヴィヴィオから先生扱いされた。  
そして娘共よ。何故お前等まで一緒にいるのだ？

「久々にパパと魔法で勝負したい！」

「私ものです」

「我もだ」

なんてこつたい。

「んじゃ、まあ〜セットアップな」

「「「はい！ セットアップ！」「」」

うおっ！？ 眩しっ！？

にしてもなんで女子がセットアップすると服が  
めておこっ。

いや、や

色々な意味でそこには突っ込んではいけない気がする。

「って、ヴィヴィオは身体強化もしてるのか？」

「うん」

光が収まればそこにいたのはバリアジャケットを着た娘達と見知

らぬ女性。ではなく、大人の姿になったヴィヴィオがそこにいたのだ。

「わあ〜ヴィヴィオが大きくなっちゃった」

「なるほど、セットアップ時にオートで魔法をかけているのですね」

「確かにアレなら魔法戦技は使いやすいしな」

まあ、三人の言う通りに身体強化は魔力錬成や身体機能を大幅にアップしてくれるから便利っちゃ便利だな。

「さて、ちよいとそのままにいるよ」

「うん」

大人モードのヴィヴィオにそこでジツとしているように言っていると俺は早速作業を開始する。

### 術式展開

固有名称『セイクリッド・ハート』のステータスを表示。

拡張領域 <small>パスロット</small> 空き容量確認	.....	仕様領域 12%
連続稼働時間	.....	85時間 12分
魔力循環機能	.....	正常
特殊技能	.....	マスターの魔力補助・強化

「ふむふむ。大体は把握出来たかな？ んじゃ、続いては」

マスターとのリンクノイズ…………… 1・6%  
魔力特性理解能力…………… 74%  
魔法構築能力…………… 誤差0・02%  
魔法運用…………… 正常稼働

うわ……………なんだよこれ。

やたらハイスペックすぎんぞ。しかも、ちゃんとマスターのリサーチ済ませてからののかヴィヴィオに付いてちゃんと学習している。さすがハイブリッドインテリジェントデバイスって所か？

「ギンザン？」

「ん？ ああ、ちょっとクリスの事調べてた。うん、クリスに問題は無いな。ヴィヴィオとの適合もバッチリ。後は日々の訓練でもっと良くなるって所だ」

「本当？」

「本当」

頭の中に流れて来る情報を閲覧していたらヴィヴィオに声をかけられて中断。少し不安そうにしていたヴィヴィオだったが俺が問題無いと言えばたちまち表情は明るくなり、「これからがんばるぞー！」と意気込んでいた。

「おつし！ んじゃ、まあ〜シユテル達が退屈しているのでちょっとした訓練を始めますか。レグナ！」

「ここに」

「結界の展開をするから手伝え。あ、後高町さん、ハラウンさん。ちよいとした模擬戦をするけどいい？」

さすがに管理局員の目の前で勝手に魔法を使用するのはいかんしね。一応許可を取っておく。

「結界張るなら……まあ、いいですよ。でも、あまり派手なのはやめてくださいね」

「善処します」

「後、私の事は『なのは』でいいですよ」

「はい？ なんの事？」

「さつきから他人行儀みたいに高町さんって」

「いやいや、実際他人ですからね。」

「あ、じゃあ私もフェイトで」

「あんたもか！？」

「はあ〜……………解りました。じゃ、なのはさんとフェイトさんね。」

どうする？ 結界内に入る？ それとも外にいる？」

「一応危険が無いか見たいので一緒に入れてください」

「私も」

「了解」

さて、本日のお客様は娘達を含めて6人ねっと。

「レグナ」

「はい」

「「ユニゾン・イン！」」

私、高町なのははいきなり現れた世界に見惚れていた。ギンザンさんがレグナとユニゾンすると強い光が発せられてそのまま世界は変わってしまった。

そこは不思議な世界であった。

上を見ればミッドの夜空とは違う満天の星空があり、地面があった場所は地平線の向こうまで水面に変わっている。

「これが？ 結界？」

隣にいたフェイトちゃんがそう呟いた。どうやら私と同じ疑問を持っただけらしい。

通常の結界は結界の外と中を分断するためであり、ここまで風景が変わる事も無い。

しかしなんだろう？

ここはとても心地良い。なんだか魔力が溢れてくる感じがする。

「んじゃ、ルールを説明する」

そんな事を思っているとギンザンさんの声が聞こえた。どうやら子供達との模擬戦が始まるらしいのだけど……………。

「ギンザン髪黒ッ!？」

そう、ギンザンさんの様子が変わっている。

ヴィヴィオが言った通り、先程まで灰色の髪の色をしていたのに今は黒髪になっていた。たぶん、レグナとのユニゾンの影響だよな？

「ユニゾンしてるからな。んな事より説明するぞ」

あ、当たってたの。

でも、バリアジャケットは展開して無いから普通のお兄さんには見えない……………。

「今から俺とお前等四人の模擬戦をする。まあ、どっちかのチームが行動不能になるまでのチームデスマッチな」

「よし！ 今日こそパパを倒してやる！」

「言ってる。じゃ、合図でスタートな。なのはさん、合図お願いしてもいい？」

「はい」

どうやらマテリアルの子達は何度かこの訓練をやっているみたい。そう言えば六課にいた時も似たような訓練をしてたなあ。懐かしい。

「じゃ、行きます！ レディーゴー！ー！ー！ー！」

合図の掛け声と共に動いたのはレヴィとヴィヴィオ。

二人共前衛向けのバトルスタイルだから当然。でも、ギンザンさんはそれが解っていたみたい。バックステップで後ろへ後退。お互いの距離は詰まらなかった。

「パイロシューター！」

後衛二人組の一人シュテルが数十のスフィアバレットを放つ。

それは紅い炎弾。

変換資質でも持っているのだろうか。前にやった時は私と同じ魔光の光でスフィアも一緒だったのに。

「とっ」

しかしそれを防ぐギンザンさん。



シュテルが放った誘導するスフィアバレットをステップで交わしたり、防御壁を張って防いでいる。

「足止めは成功しました！ お願いします！」

「りょーかい！」

「うん」

そしてシュテルの指示の元走り出していたレヴィとヴィヴィオがギンザンさんに追いつき接近戦に持ち込む。

「はあああああああッ！！！」

レヴィは自身のデバイス、バルニフィカスを振り上げ、ヴィヴィオは拳で連撃を加えて行く。対してギンザンさんはヴィヴィオと同じ拳を武器に二人の猛攻を防いでいた。防御壁を張って防ぎ、いなしでかわし、防戦一方。

「でも、ちゃんと二人の攻撃が『視えてる』」

「うん」

防ぎながらもギンザンさんの表情に焦りは無かった。

フェイトちゃんの言う通りちゃんと二人の攻撃が『視えている』からなのだろう。

それよりもどこか余裕そうである。

「レヴィ、大振りばかりじゃ当たらないぞ？ もっと、コンパクトに動け。ヴィヴィオはもっと体全体を使って拳を放て。後、魔力の

流れを体で感じる。腕を伸ばすと同時に拳に魔力を流せ」

「はい！」

やっぱり余裕だった。

二人の攻撃を防ぎながらもちゃんと悪い所を教えている。

「シュテル。あの乱戦で狙えるか？」

「はい。やってみます」

そんな乱戦の中、シュテルがルシフェリオンを構えて数発のスフ  
ィアを放つ。今度は先程の誘導弾とは違い、高速弾であった。それ  
が、一直線にギンザンさん目掛けて飛んで行く。

「っと、あぶな！？」

だが、これも紙一重の所でかわされてしまう。

あの乱戦で正確に狙えるシュテルも凄いけどあの高速弾をかわす  
ギンザンさんは本当に人間かと疑いたくなる。

二人の猛攻に加えてシュテルの狙撃。

さすがのギンザンさんもコレには余裕の態度ではいらなかった。

「もらい！」

一瞬の隙を付いてレヴィィがギンザンさんの脇腹を狙ってバルニフ  
ィカスを突く。

「はい、残念」

「え？ うわっ！？」

だがそれはギンザンさんの回し蹴りがバルニフィカスに当たった事によって阻止された。レヴィは弾かれた衝撃によって大きく体が揺れ、そのまま水面に倒れてしまう。

「レヴィ！？」

「余所見をするなよ？」

「へ？ があつ！？」

レヴィが倒れた事でヴィヴィオが動揺してしまいその隙を付かれた。

一気に懐に潜り込んだギンザンさんはヴィヴィオの鳩尾に拳をめり込ませてヴィヴィオを空中へ飛ばした。

「ヴィヴィオ、仲間が倒れても敵から視線を外すな。でないとな今のでもう二、三発は喰らってるぞ？」

「……………はい」

実際ギンザンさんが放った拳は一発だけ。確かに、格闘戦が得意な人ならあの状態でもう二、三発は相手に拳を打ち込む事ができた。それをしなかったのは彼が教導官と言う立場にあるからだろう。

「ほいほい、第二ラウンドやるぞ」

指でクイクイと挑発的な仕草をしていると水面に倒れていた二人が起き上がる。

「父上。私達をお忘れですか？」

「二人共！ どけ！」

前衛二人はそんな言葉を聞いて全力で後退する。空を見ればそこにはシュテルとディアの二人がいた。

「疾<sup>は</sup>しれ赤星！ 全てを焼き尽くす炎となれ」

「紫天に吠えよ！ 我が鼓動！ 出でよ巨獣！」

お互い魔法詠唱を唱えながらデバイスを構え、魔法陣を展開する。

「真・ルシフェリオン！ ブレイカー—————！！！！」

「ジャガーノート！！！！！！」

そして、巨大な魔力の塊が解き放たれた。

全てを焼き尽くす炎の砲撃と漆黒の魔力爆撃。それは人一人には過ぎる行為であったがさすがのギンザンさんもこれからは逃げる事はできない。

「ってか、やり過ぎじゃない！？」

「……………チツ、やはり防ぐか。さすがは親父殿と言ったところか」

「はい。やはりあなたは尊敬に値する人です」

「うわぁー……………やっぱり、ちょっとやさつとじゃ壊れないかぁ」

「……え？」

皆何を言っているのだろうか？ と私を含めフェイトちゃんもヴィオオも声を揃えて疑問に思った。すかさずあの凄まじい爆炎が舞った中心地を見てみる。

次第に爆煙が晴れるとそこには一人の男性が立っていた。

立っていたのはもちろん彼女達の父親であるギンザン・イツキ。

「うん、二人共良い感じた。だが、まだちょっと魔力に振りまわされている感じがあるな。シュテルは砲撃の放出の際に反動が殺し切れて無い。それじゃ、狙いがズレるぞー。ディア、お前はちよつと威力を重視し過ぎて狙いが甘くなってる。爆撃は狙いを気にせず広域で狙いを付ければいいがお前の場合は少し範囲が広すぎる」

「うむ、心得た」

「はい、善処します」

彼はあれだけの攻撃を食らっても平然と指導をしている。

それはとても座学講師をしている様な人の姿では無かった。

私と同じ実技教導官の様な……………とにかくそんな感じの姿であった。

「……才能あるじゃん」

「はい？」

その時今度ギンザンさんに実技指導を手伝ってもらおうと決心した私であった。

## 第十話 模擬戦です 前半（後書き）

お詫び

最近読者の皆様からのコメントに返信出来ない状態が続いております。

誠にすみません。せっかく書いていただいたのに。

なので今回からはまた真面目に皆さまから寄せられたコメントには積極的に返信したいと思っております。

誠にすみませんでした。

第十一話 模擬戦です 後……って、あれ？（前書き）

内容的に別に前半、後半分ける必要は無かった。

まあ、いいか。

そして、ついに幼……もといあの子を出してしまったw



第十一話 模擬戦です 後……………って、あれ？

それは些細な違和感だった。

「（なんだ？ うまく魔力展開出来ない……………）」

《マスター。術式処理に何やら負荷が掛ってます》

子供達と模擬戦の最中。発動する魔法が自分のイメージしているタイミングと若干のタイムラグが起こっているのだ。なんだろうと思っているとレグナがその原因を教えてくれた。

《闇の書内のシステムエラーはありません。……………なんと言いますか。何か割り込みして来ている感じですか？》

「（いや、疑問形で返されても……………原因わかるか？）」

《調べます》

にしても割り込みってなんだよ？ 俺の知らないシステムが存在している？

いや、闇の書のバグは全てレグナが切り離れたはず。壊れたシステム修正と補完もした。外部からの割り込みなんて持ってたの他。確か

に強力な魔導書ではあるけど今の間の書に以前の様な力は無い。

「とりゃあああああー！」

「っつ」

とりあえず、今は目の前の事に集中する。原因はレグナが調べてくれるらしいし。

そう内心で自己解決させると目の前に迫って来るレヴィを容赦無くいなして投げたのは若干やり過ぎたと思った。

だが、反省も後悔も無い。

「「「「あう」……………「「「「

そんなこんなで俺対チビツ子共の模擬戦が終了。

結果はもちろん俺の勝ちです。まだまだ子供相手に遅れはとりませんよ。

んでもって結界とユニゾンを解除して元の公園にいる訳ですが…

……。

「うん、まあ、ヴィヴィオもお前等も教えた事をすぐ吸収してくから意外と手こずったな。その内俺よりも強くなれるよ」

「……本当!?!?!」

「うおっ、疲れてダウンしていたかと思えば急に元気になりやがった。やっぱり、子供は元気だな。」

「あの……ギンザンさん」

「はい?」

と、いきなりなのはさんが何か申し訳無さそうに声をかけて来た。

「是非、実技の方で教導を!」

「却下します」

大体予想出来たので即答。

「あ、あれだけの戦技があるのにどうしてですか!?!」

「少数ならともかく大多数の生徒を持つのは面倒臭い」

「ええ……」

いや、座学なら一方的にあーだこーだって言うてられるけど実技はそうもいかんでしょに。

「第一、俺が民間協力者として戦技教導隊にいるのはコイツ等のためでもあるんです」

「え？」

なんか意外って顔をされた。心外な……………。

「今でこそ子供の様な成りをしてるけどコイツ等はロストロギアなんだ。そんなのが民間人の手にあること自体おかしいと思わない？」

「確かに」

普通なら過去に大事件を起こしたロストロギアを管理局が放っておく訳がない。しかも、そんなロストロギアを完全制御できるようになったとなれば必然的に戦力として手の内に置いておきたいと思うのが普通。

でもそれを管理、制御できるのも俺だけと言う事実。そんな俺も闇の書を戦いの道具にする気は無く、退役して平穩に暮らそうと思っていた。まあ、そうは問屋が降ろさないって感じで管理局上層部も俺がそんな物を持って退役すると言う事実を知れば「闇の書の制御法だけ教えて去れ」と言ってくる。

なので、情報一課にいた時に集めたネタを披露してちょっとお偉いさんの黒い部分突いて、「いざとなったら敵になる」っと親切かつ丁寧にお話ししたら大人しく闇の書を持って退役を認められた。まあ、民間協力者として管理者としての報告と戦技教導隊の座学講師をやると言う条件付きではあるが。

「そんな訳でそれ以上の事をするつもりはありません」

「うう………もったいない」

「自分が大切だと思った人や物を守る事さえできる技量さえあれば俺は満足ってわけ」

むしろ店やりながら協力しているのだからそっちを褒めて欲しいぜ。

「あ、私も質問」

って、今度はフェイトさんか。

「今の結界魔法は何？」

「ん〜っと、外界と内界の分離である結界魔法にとある特定条件を上乗せした通常の結界魔法の応用と空間転移魔法の複合体みたいな物。………あの風景は応用する際に使った『改造』<sup>リメイク</sup>の影響らしい」

「らしい？」

「自分でもなんであんな風景になるのかよく解らんってこと。………にしても、久々に体動かしたなあ〜………明後日辺り筋肉痛かも………」

「おじさん臭いですよ」

「うっせーよ」

「え？ 痛い痛い！！」

フェイトさんがあまりにも酷い事を言うので両サイドのこめかみをグリグリと圧迫してあげた。

失礼な事を言う人には容赦しないのが俺の信条です。

「んじゃ、ストレッチして帰るか」

「……はい……」

ある程度フェイトさんへのお仕置きが済んでからそう言つと子供達は相変わらず元気な返事をしてくる。

こうして俺とチビッ子たちの模擬戦は終了した。

その日の晩、俺は妙な夢を見た。

そこは一寸先の見えない闇の世界。どちらが上で下なのか解らない。そもそも自分はその場に立っているのか浮いているのかも解らなかった。これが夢だと解ったのは自分の姿が闇の中でもハッキリと見えていたから。そんなでもって、寝間着でいたはずなのに実に懐かしい格好をしている。

それは管理局時代に着ていた自分のバリアジャケット。黒と白のツートンカラーが特徴の魔導服。

「……………なんでまた？」

「誰ですか？」

どうしてと考えていると不意に声が聞こえた。気付けば俺の目の前に一人の少女がいたのだ。

見た目はシュテル達より年下だろう。金の髪は彼女の腰まで伸びており程良いカールをしており、まさかのへそ出しルックス。いかによ、そんな格好では紳士の皆さんがペロペロしに来てしまう。

「ああ、あなたはく」

「待った！」

そんな少女が俺が誰かと解ると名前を言おうとしたが無理矢理待ったをかけた。

「俺はギンザン・イツキ」

「……………ギンザン」

…………危ねえ。

『あの名前』だけは二度と聞きたく無いと思っていたのになんで知ってたんだ？

いや、そもそもこの少女は俺の事を知っているのだろうか？

「ずっと、ここであなたの事を見ました」

「…………ああ、ここは闇の書の中か」

少女が見ていたと言ったので全てを理解する。

ここは闇の書の中。時折、魔法を使用した後はこう言った現象に見舞われる事がある。意識が魔導の知識の中へと入り込む……………みたい。でも、目を覚ますと殆ど覚えていなくて単なる夢としか思っていないかったが。

「今日のシステム介入は君が？」

「…………意識してやった訳では無かったのですが……………すみません」

「謝るなって。別に害をなそうとしたわけじゃないんだろ？」

「……………」

「察するに君は俺を通して何かしたかったのか？」

「……………はい」



「それは何？」

「……………」

うーん……………だんまりですか。会話が進まない。

「なんかすまなかった。危険な物かと思って一方的なシャットダウンをしちまった。気付いていればパスを開いて君を解放してあげたけど」

「それはダメです。……………私が表に出たら……………全てを壊してしま  
う」

なんだそりゃ？

「……………私は闇の書の中に埋もれた存在」

「埋もれた存在？ ああ、それですか」

これも納得。どおりで俺がこの子の事に気付かなかった訳だ。今こうしているのは自分から闇の書の深層部から表層部へと上がって来たってところか。

……………にしても闇の書に深層部なんてあったのか。完全に見落と  
してたな。

「君はあの三基の構築体マテリアルと同じ存在と考えていいか？」

「……………私は無限連環機構……………私の事は古代ベルカが生み出した  
破滅の遺産、と考えていただければいいです」

「納得。つまり、君はあの『闇の書の闇』って事でいいな？」

「そんな感じですか」

「なんで今更出て来たんだ？」

「……………それは、その……………」

ん？　なんでそこで口ごもる？　しかも恥ずかしそうに俯きながら。

「……………王達が、楽しそうにしていたので」

……………え？

「……………えーっと、つまりディア達が外で楽しそうにしているから自分も混ざりたいと？」

「……………」

若干頬を赤く染めながら俯いてしまったのは恥ずかしかったらしい。

何と云うかあの世間を騒がせた『闇の書の闇』が見た目通りの思

考を持っているとは……………。

「……………ふっ、あはははははは！」

「わ、笑わないでください！」

これが笑わずにいられるかっての。

「でも、私は今は不安定な存在。だから、今は外に出る事が出来ません。機能が稼働すれば私は破壊の化身になってしまふ。でもここにいれば誰も傷つけない」

「だから、ここで外を眺めるってか？」

「……………はい」

うーん……………よし！

「ちょっとこっちおいで」

「??？」

俺はその場に座り少女を手招きする。

少女はそれが何だか解らないと言った様子であったが素直にこっちに来てくれた。

「おりゃ」

「きゃっ！…?」

そして手の届く範囲に来た所で俺は少女を捉え無理矢理膝の上に座らせた。

「な、何をするのですか!？」

案の定少女は突然の事に驚き俺の膝の上で暴れる。

「んーちよつと外でのアイツ等の話でもしてあげようかと思って」

「え？」

「見ているって言うっても全部じゃないだろ？ アイツ等が何で笑って、泣いたり、怒ったりとかは知らないだろ？」

「……………はい」

「だから、教えてあげようかと思って。聞きたくない？」

「……………聞きたい、です」

「そうか。それじゃ」

それから俺は色々喋った。

シユテルは機械類に強いが料理がまったくダメで日々頑張っているとか、レヴィは最近公園でガキ大将みたいになって自分より年下を従えて遊んでたりとか、ディアは難しい本の表紙をカバーに使うて絵本を読んだりとか。んで、三人揃って悪い事すると三時のおやつを抜きにすると必死に泣いて謝ったり、寝顔は見た目通りで可愛い。

そう言や、今日の模擬戦の後ヴィヴィオに大人への変身魔法を教  
えてと言い寄ってたけど阻止したな。だってイタズラするのが目に  
見えてるし。でも、成長したアイツ等ってのはちよつと気になるな。  
あ、でもそれってあのなのはさんとフェイトさんと八神になるのか  
なら、将来は安泰だ。

「ふふっ」

そんな話をしていると不意に少女がおかしそうに笑った。

「ん？ なんかおかしかったか？」

「まるで我が子の自慢のようですね」

「ようですねじゃない。アイツ等は俺の子だよ。これからも、これ  
から先も」

「……………少しだけ羨ましいです」

「なら君もそこに来ればいい」

「え？」

少女を膝から降ろして俺は立ち上がる。

「正直、ここからどうやって君を出す事が出来るのか解らないけど  
……………それでも、君の気が向いて外に出て来たいと思った時は協力  
してやるよ」

「……………無理、です。私は破壊の化身ですよ？ あなたの幸せを、壊してしまおう」

「守るために身に付けた魔導の知識だ。……………それに俺はこの闇の書を直したんだぜ？ お前ぐらい直してやるよ」

「……………」

もう一押しでここから出る決意をしてくれるかな？

「じゃ、一つ歴史の小話をしてあげよう」

「え？」

「魔法ってどこから生まれたか知ってるか？ まあ、自己解釈でもあるけど魔法ってのは闇で生まれたと思ってる。真っ暗な闇の中で人が光を求め、その生まれた奇跡の光を人は『魔法』と呼ぶようになった」

そう言つと先程まで先が見えなかった闇の中にポツポツと光が溢れ始めた。

それは夜天。

暗い闇の中で光る星は魔法言う名の光。

「そうだな、君に役目をあげよう。『王』は全ての管理者。『理』は知識の司り者。『力』は勇気ある者。君はこれらを含めた全てを飲み込む闇でもありこれらを生み出した者。だから、この三つをまとめるのは君の役目」

「私が……マテリアルを、ですか？」

「さしずめ創造者か？ いや、『盟主』って所か？ うん、まあそんな感じ」

「……………盟主」

「とにかく、君にはそれだけの力がある。何も破壊だけじゃないさ。その力をどう使うかは君次第」

「……………そうですね。私は、押さえられない自分が怖くて、何もかも壊してしまうのが怖くて、どうしようにも無かった。……………やはりあなたは『二つ名』にふさわしいお方です」

「……………あれはやめる。なんか恥ずかしい」

「かつこいいのに……………」

やめる！ あれは俺にとっては黒歴史的名前だ！

第一！ 自分からそう名乗った覚えは無い！

「つと、そろそろ俺は目覚める時間だな。まあ、気が向いたら来いよ。俺も外から君が出れるように頑張ってみるからさ」

「ありがとうございます」

「あ、そうだ」

「はい？」

「名前。まだ聞いて無かったや」

「名前、ですか。名前は システム『U・D：アンブレイカブル・ダーク』とありますが」

「なんだそりゃ？ それはシステム名じゃん。本当の名前は無いのか？」

「本当の名前……………」

システム『U・D』ってどうしてこつこつもコイツ等は名前らしからぬ名前なんだ？

「思い出しました」

「お」

「あなたがくれた私の役目によって蘇った私の名前。私の名前は

」



「……………変な夢を見たな」

気付けばもう朝。いや、寝ていたのだから目を覚ませば朝になっているのは当たり前なのだが。

「ふあゝ……………えゝつと、何の夢を見てたんだっけ？」

欠伸と同時に凝り固まった筋肉をほぐしながら俺は夢の内容を必死に思いだそうとする。

……………はて？ とても重要な夢を見ていた気がするのだがなんだろう？

「……………ん？」

とりあえず覚えていない物を必死に思いだそうとしてもしょうがないと結論付け、布団から出ようとした時だった。

グイ……………。

何かに掴まれた。

一体何だと思って俺は布団の方を見て見る。

「…………………………」

そしてそこには見知らぬ幼女の姿が。

……………え？

「うみゅ……………」

なんとも可愛らしい声で目を覚ます幼女。  
いや、待て。

君は一体どこの誰だ？  
そしてなんで俺の布団の中にいる？

「……………出てきちゃいました」

テヘ、ペロじゃ無えよ。

あ、夢の内容を思い出した。

第十一話 模擬戦です 後……って、あれ？（後書き）

そんな訳で出て来てしまった。

別にシリアスにする気は無いのであしからず。  
設定も独自解釈的ではありますがご了承を。

## 第十二話 家族が増えました（前書き）

本編の前に一つ。

活動報告でも書きましたが前回登場した『U・D』なのですが本名明かしたらゲームGODのネタバレになるのではと書いた後で気付きどうしようかと思いました。

なのでその事について活動報告のコメントとメールを下さった人の意見を聞いた結果。

思いきってネタバレさせてしまいます。

ゲーム未プレイの方、名前を伏せてくれと申してくださった方々。誠に申し訳ございません。

今後は前書きにネタバレ注意と書くようにいたします。

## 第十二話 家族が増えました

前回のあらすじ。

夢の中で見た少女が夢から出て来た。

マジか。

「システム『U・D』の初期化完了。上書きデータのロード開始。……………これで、何とかなるかな？」

「……………本当に直しちゃった」

さて、夢で見た少女がなんだか呆気なさそうな顔して自分の体をペタペタ触っている。

そんな事しても変にいじくってないからな。あ、変な意味じゃないぞ。

「ありがとうございます」

んで、一通りの作業が終わったら少女がペコリと頭を下げてくる。ついでに俺も頭を下げてしまったのはしょうがない。

「さて、チビ達が起きる前に」

「親父殿！ 朝だー……………ぞ？」

時すでに遅し。

この子に付いての説明をどうしようかと思っていたらディアが文字通り部屋のドアを吹き飛ばして部屋に入って来たのだ。

「王。お久しぶりです」

「……………誰じゃ？」

「えっ！？ わ、私です！」

目の前の少女を目の当たりにして目をパチクリするディア。  
久しぶりと少女が挨拶するもディアはこの子が誰なのか解っていないご様子。

「ディア。この子は闇の書でお前等と一緒にいた子だ」

「一緒におった？ ………………おー！ 思い出した！」

ふー……………どうやら説明の手間が省けそうだ。

「成敗！！」

「何故だあー！？！？」

安心できたと思ったたらいきなりアロンドイト（二次爆破無し）を撃つて来やがった！

一応、俺が防御壁で防いだけど。

「いくら同胞とは言え親父殿と一緒に寝るなど！ くらやま  
ゴホン。破廉恥な！」

「う、ごめんなさい!？」

「いや、好きでこうなってる訳ではないのだが……………」

ああ……………なんかすっかりこの子も怯えちゃってるよ。

「ディア。父上は起きましたか？」

「凄い音がしたけど？」

そして騒ぎを聞きつけてシュテルとレヴィの二人も俺の部屋にや  
つてきた。

「シュテル! レヴィ!」

「え？」

「あ」

そんな二人の登場に先程までディアに怯えていた少女も明るい表  
情になる。

「こ奴。親父殿の部屋で寝とった」

「何、ですって……………」

「なに〜ッ!？」

って、あれ? なんで二人共ディアみたいにデバイスを構えてい

るんですか？

せつかくこの子も明るくなったのにまた怯えちゃってるじゃん。そして君は何故俺の後ろに隠れる。

「「成敗！！」「」

「ちょ、まつ！？」

部屋の中で小さな魔法戦争が行われました。

「王、シュテル、レヴィ、お久しぶりです。ユーリ・エーベルヴァインです」

それが少女の名前。

そんな一騒動が終わった後である。

とりあえず、ユーリの説明をするためレグナ、ガリユーを含めた面々が一階の店のホールに揃っている。ユーリがそう名乗り、先程まで不機嫌だった三人娘は一変してニコニコととても嬉しそうだった。

「やあー！ ユーリもやっと出て来れたんだね」

「歓迎いたします」



「うむ。だが、いくら同胞でも我らの条約を犯せばタダでは済まさん」

条約ってなんだ？ まあ、いいや。

「んで、ディア」

「なんだ？」

「ほい」

俺はディアに一冊の本を手渡す。

「なんだこれは？ 魔道書？」

「お前のデバイス、エルシニアクロイツとセットだった魔導書をリニューアルしておいた。『紫天の書』それがソイツの名前な」

「おおー！ くれるのか！？」

なんかやたら喜ばれた。

「えへへ〜親父殿が我のために作ってくれた魔道書」

しかも凄い緩んだ笑顔になってる！？

「でだ、ディア。お前にユーリの管理を任せようかと思っている。その魔道書はユーリの管理プログラムが入っているからな」

「うん、わかった」

なんか口調までおかしくなってるよ。本当に大丈夫か？

「しかし、マスター。本当によろしいのですか？」

ディアが喜んでそれを見ていたシュテル、レヴィが「いいなあ」と羨んでいる所にレグナが話しかけてくる。

「何が？」

「彼女は『闇の書の闇』と同等の力を持った構築体です。それが具現化しただけでも大事件なのに、それを側に置いて大丈夫なのか？」

「それは大丈夫。一応、構築プログラムを初期化して上書きプログラムをロードさせておいたから。まあ、万が一のための『紫天の書』だよ。あれにはシステム『U-D』の強制シャットダウンできるプログラムが埋め込んである」

「……………そうですか。マスターがそう仰るなら何も言いません」

「すまん。でも、悲劇は起こさせないから」

レグナにとって闇の書の闇とはいい思い出がないからな。危険視するのも当たり前か。

「いいだろー！ 親父殿が我のために作ってくれた魔道書だぞー！」

「……………」

しかし、今後のためと思ってディアに管理を任せようと思って渡したのだが……ガリユー相手になんであんな自慢しているのだろう？ ガリユーも黙って頷いているし。

あ、ちなみにガリユー変身していません。だから、喋りません。

「ふー……さて、今日は皆で出掛けるか」

「……え？」「」

そんな発言をすると何故かチビ四人に驚かれた。

「いや、ユーリの服と日常品買わなきゃいけないだろ？ さすがにその格好ですーっといさせる訳にはいけないし」

見ればユーリは相変わらずのへそ出しルックスである。

さすがにずーっこのままって訳にもいかない。

特に冬とか。

なのでお店が定休日の今日の内に色々揃えようと考えたのだが。

「お出かけ！？ 行く！ 行く！」

「私も新しい服が欲しいです」

「我は書物が欲しい」

「誰もお前等の買い物をするとは言ってない。……けど、いいか」

「……わーい！」

んじゃ、準備をしますかね。

「あ、あのー！」

「ん？」

つかれる子供達とは余所にユーリはなんだか暗い顔をしている。

「本当にいいのですか？ 私なんか一緒にいても……………」

「え？ なんで今更？」

「いくら直してくれたと言っても私は強大な力を持っています。不意にあなたを傷つけてしまうかもしれません」

「……………まあ、その時はその時。修正したのは暴走しないようにコントロールできるようにしていただけだし、お前の言う通りに俺が傷つくかもしれない」

「……………」

……………でも。

「だから自分でコントロールできるように色々俺が教えてやる。いざって時はディア達がいるし、安心して俺等の近くにいればいい」

むしろ一人でいさせる方が余計に不安だったの。

変に力を押さえて爆発させでもしたらそれこそ取り返しのつかない事になる。

「……………ありがとうございます」

そしてそんな俺の言葉を聞いてユーリは破壊の化身とは思えない優しい笑顔を俺に見せてくれた。

さてはて、家から車を走らせて30分。

ミッド南部にある大型デパートへと俺達はやって来た。

……………なのだが。

「親父殿！ 本屋！ 本屋に行くぞ！」

「パパ〜！ あっちに行きたい！」

ディアとレヴィがやたらテンション高めであーだこーだ言っている。さすがのユーリも俺に手を繋がれている状態であったが色々な

物に目移りしてソワソワしていた。

子供ってアレだよね？ こう言う場所に来るとやたらテンション上がるよね？

「まったく。あの二人は……………」

しかし、シュテルはそんなはしゃぐ二人と違って落ち着いている。

「二人共ー！ 先にユーリの服ですよー！」

「「わかってる〜」「」

「本当にわかってるんですかね？」

いや、あれは全然解ってないと思うぞ？

だが、シュテル。父さんはちゃんと見ているぞ。

「お前も自分が欲しい服早く見たいんだろ？」

「……………ナンノコトデスカ？」

凶星か。

「はあ〜……………とりあえず、ガリユー。お金渡しておくからアイツ等確保しといて。騒ぐようなら一っただけ何でも買っていいから。俺達は先に7階の服屋に行ってる」

「……………承知」

あ、ちなみにガリユーは今は変身しています。  
さすがに人前で甲冑姿はいかんでしょ？

そんな訳で先走った二人をガリユーに任せて残りは俺に続いてユ  
ーリの服を求めに行った。

「はあ〜……………」

ここはデパートの一角。そこにある服屋の女性店主は深いため息  
をついていた。

「……………お客がない」

デパート内。お客で溢れかえっている中でその店にだけ店主以外  
の人がいない。

なぜ服屋でここまで客の入りが悪いのかと聞かれればそれは店の  
品揃えと誰もが言うだろう。

この店には子供服しかないのだから。

この女店主。自身が子供好きである事で将来は子供にゆかりある

何かをしたいと思ってこの店を始めた。子供にゆかりある職業なら学校の先生か幼稚園の保育さんになればよかったのにあるうことが子供服専門店を開いてしまったのだ。

しかし、店を開いたものによりによって大型デパートの一角に店を構えてしまったのが運の尽き。周りもデパート客のニーズに答えて若者向けの洋服店や大人、子供と両方を取り揃えている店もある。

つまり、この子供服専門店は完全に顧客確保に失敗して他の店に客を取られてしまったのだ。

「な、なにか打開策をおおおおおお………」

なので、色々考えているのだがどうも思いつかない。しかしこのままでは営業停止と言う死刑宣告をデパートから言い渡されてしまう。それだけは絶対阻止しなくてはとさらにウーウー唸りながら考えているのだが。

「へえ〜子供服専門店なんてあるんだ？」

「そうですね。珍しい」

「わあ〜すごいですう〜！」

「（ん？ お客さん？ 逃がすかあああああ！……！）」

そんな悩みに頭を唸らしていたが久々のお客様。何か買ってもらうなくてはと獲物を狙う猛獣のような思考でありながらスマイル100%でその客の元へ向かった。



もはや羊の皮を被った狼である。

「いらつしゃいま……せ」

だがそんな邪念も目の前にいるお客を見て吹き飛び、なにか衝撃的な衝動に駆けた。

まるで雷に打たれた様な感覚。いや、雷に打たれたらその場で御臨終なのだ。

ともかくその様な感じ。

目の前にいるのは一人の男性と三人の子供。

子供の内一人はもう中学生ぐらいの女の子であるがもう二人は明らかにこの店のニーズに答えてくれる様な子供だった。

しかも二人共恐ろしく可愛らしい。

「こ、これだわ!」

「……はい?」

これで他の店にも勝てる! となにか一人で盛り上がっている店主に対してお客で来た四人はそんな店主のいきなりのテンションについていけなかった。

何故こうなったのだろう？

「などと俺、ギンザン・イツキは過去の事を思い出しながら深い  
め息をつく。……………はあ」

「何言ってるんですか？」

ほんと、何言っているんだろね？

にしてもアレだ。俺達は子供の服を買いに来たはずだ。  
だが、一体どうなったらこんな事になってしまふのだろう。

「いい！ いいわ！！ 二人共最高よ！！」

状況を理解するために色々整理してみよう。

俺達はデパート内の服屋に来ているはずだった。

先程からすっごくハイテンションなお方はいさつきまで居た服  
屋の女店主さん。

シユテルとユーリを見た途端ずっとあのような状態なのである。  
もしかして危ない人？

いや、それよりももっと根本的な所から整理しよう。

なんで場所変えて写真屋のスタジオに来てるの！？

「あ、私の店、子供用の晴れ着のレンタルもやっていますので。二二の写真屋の主人とは仲がいいんです」

「へーそうなんですか。                    じゃなくて!？」

おい、カメラ構えたじーさん。グツとサムズアップしてんじゃねえ。

レグナもなに照明の調整手伝ってんだ!？」

「シュテル。そっちの服も可愛いですね」

「ユーリもとても似合ってますよ」

そして子供達はあの店の商品の洋服を来て写真を撮られている。

「でも助かったわ。これで店の宣伝になるわね」

つまりこう言う事だ。

俺達がやって来た店の店主は現在客足に悩まされていた。

それをどうするかと悩んでいる所に俺達の登場。

何を思ったか店主はシュテルとユーリに広告モデルになってほしいと泣いて頼む。

渋々ながらも承諾したら店の服を何着か持って写真屋に来た。  
今こじ。

OK、状況整理終了。把握できた。

「じゃ、次の服に着替えましょう」

「「はい」」

いや、渋々とは言え親としては子供を見せものにするのはちょっと気が引ける。

今ならまだ間に合うか？ やっぱりこの話は無かった事に……………。

「父上。どうですか？」

「えっと…………… かなりフリフリしてますね」

色々考えていると着替えが済んで再び娘達登場。

今度はちよっとお嬢様を意識したワンピース姿であった。

「店主さん。焼き増しって可能ですか？」

「モチのロンです！」

さすが子供服専門店。あんな可愛い服を用意してあるとは。

あんな最高だ！

「では、子供が疲れる前にちゃっっちゃと済ませてしましましょう」

そんな訳で撮影続行である。

それからもシユテルとユーリは色々な服に着替えて撮影された。

子供らしい服もあれば雑誌で子供がモデルをしている様な服もある。

動物のきぐるみパジャマ、ヴィジュアル系、白ゴシック、黒ゴシ

ツク、小悪魔系、メイド服、チャイナ服、ナース服、修道服、巫女服、騎士甲冑、パーティードレス、ウエディングドレス、サイバー戦士、管理局の軍服、水着、エトセトラエトセトラ……。

と、言った感じでドンドン着替えては撮影を繰り返していた。

あれ？ 初めの二つ以外まともなのが無い。

「ご主人。代えのフィルムはこちらに」

「ありがとよ、お嬢ちゃん。しかしなかなかの手際だ。どうだい？  
ワシの弟子にならんか？」

「いえ、私がお仕えするのは主とマスターだけなので」

そしてレグナよ。なんで長年助手をやってきましたかのようにテキパキと写真屋のじーさんの手伝いをしている？

『……………ギンザン』

「ん？ ガリユールか？」

色々ななかおかしいと疑問に思っているとガリユールから念話が入ってきた。

『……………今、どこだ？』

「ああゝ悪い。今ちよつと変な状況になって5階の写真屋にいる。悪いけどこつちまで来てくれ」

『……………承知』

すっかり忘れていた。ガリユーにディアとレヴィを任せたままだつた。

「お連れの方ですか？」

「ああ、ちよつと別行動していた娘を知人に任せていたので」

「ほう、娘さんですか？」

あれ？　なんでこの店主さん獲物を狙う目をしているの？

……………あ、しまった。

結局、ディアとレヴィが合流して皆で写真を撮られました。

後日、写真の影響で店が繁盛して店主さんが泣いて喜んだとか。それはちよつと先の話。

「ふー、思いのほか安上がりしたな」

撮影が終わると女店主さんは気前良く店の服を何着かくれたのだ。しかもタダで。

まあ、相応の対価だね？ 俺も対価（写真）貰ったし。

「さて、ユーリの日常品も買ったし。飯でも食って帰るか」

時計を見れば丁度6時。なんだかんだで撮影は4時ぐらいまで続き、そこから色々買って今に至る。さすがに今から夕食の準備をしていたら子供達になんて言われる事やら。なのでデパート内のレストランで済ませようと考えたんです。

「「じっはん　じっはん　」

そしてよほど外食が楽しみなのかレヴィは歌っていてそれに便乗してユーリまでもが歌っている。

「いらっしゃいませ。えーっと………7名様でよろしいですか？」

「はい 7名です！」

「ななめいです」

なんかすつかり仲良くなっているな。

うん、これなら今後もうまくやっていけるな。

「あ、イツキさんや」

そしてなんか狸が現れた。

「なんや失礼な事考えてへん？」

「安心しろ。狸は失礼な存在ではない」

「チエストー！」

ふん、遅いな。

と思つて顔を左にずらしたら八神の右フックが見事にクリーンヒット。

まさか初撃がフェイントとは……………。

「皆で飯かあ？」

「……………先程のやり取りは無かつた事にされたか。ファミレスに来て飯食つ以外何があるんだよ？」

「そりゃそりゃ」



「お前は一人かよ？」

「仕事帰りやからな。リインは今日は休みやから家におるけど……  
…私今日お昼抜いてるから空腹でしょうがないんよ」

「司令官も大変だな」

「パパーお腹減ったよー！」

つと、そうでした。

八神と立ち話をしてしているとレヴィが痺れを切らした。  
本格的に駄々こねる前に席に行くか。

「ところでイツキさん」

「あん？」

「その子は誰や？」

「その前にお前は何故俺達と同じテーブルに座る？ 奢らんぞ」

ケチやな。と言いながらピツと俺の隣に座るユーリを指差す八神。  
そんな指で示す先を見ればいつの間にかユーリが俺の腕にしがみ  
付いて八神を警戒している。

「ああ………説明が面倒なので親戚の子供って設定で」

「そう言っている時点で嘘がバレバレやん」

「いや、隠すつもりは無いんだが………場所が場所だけに言いつら

い

ファミレスでシリアス展開なんて嫌だぜ。  
今時のカップルでもファミレスで別れたりしねえよ。

「……………そっか。なら、後日話しを聞くとしよかあ。お嬢さん、お名前は？」

さすが八神。空気を呼んでくれた。

ユーリがあゝの闇の書の闇と同等の力を持った存在だって言ったら何言われる事やら。

一応、力が安定するようにはしてあるから平気だと思っただが。

「は、初めまして夜天の主。私は闇の書の闇。無限連環機構のユーリ・エーベルヴァインです」

「……………はい？」

……………うん。

説明が省けて助かった。

さすがはユーリ。君は本当に混沌カオスを招く存在だな。

「イ・ツ・キ・さ・ん やっぱ氣い変わったから今教えてな」

Oh……………八神よ。

何故笑顔でお仕事フェイスなのですか？

地味に怖いです。

「ちなみに拒否権はあらへんで？ 拒否した場合は無理矢理にでも本部でお話せなあかん」

「……………はい」

こうして俺は取り調べ室の様な雰囲気ですら晩飯を食べる事になった。

そして、八神。

カツ丼注文しているけどネタか？

## 第十二話 家族が増えました（後書き）

明けましておめでとございます。

そして、改めてすみません。

ネタバレが嫌と言う方には本当申し訳無い事をしたと思ってます。

でもユーリを登場させてユーリって名前を使わないのはどうだろうとメッセージを貰ってそれもそうだなと思った次第です。

本当にすみませんでした。

第十三話 おいでませ〜（前書き）

レヴィ「え〜……………注意です。この作品にはゲーム『魔法少女リリカルなのはA・S THE GEARS OF DESTINY』のネタバレが含まれています！ゲームを買ってクリアできなくてもネタバレがOKって人は本編に進んでね」

ギンザン「え？なにこれ？」

## 第十三話 おいでませ〜

最近思つんだ。

神様ってのは本当にいてただ人の暮らしを傍観して、退屈になつたらちよつとイタズラで運命を変えて楽しんでいるのではないかと。

「んでな。後はこの生地を焼いて表面焼けたらひっくり返す。っで、反対も焼けたらそれで出来あがりや」

「……………なんで俺はお好み焼きの作り方を教わっているのだろう？」

時間は遡って昨日。

「イツキさん。ちょっとお話ししようか？」

「……………八神。君が知りたい事は解っている。だが、事が事だ。場所を改めさせて話しをしようというのはどうだ？」

俺達がデパートのファミレスで遭遇するとユーリの自己紹介により俺達の間にはただならぬ空気が漂う。八神は事の説明を要求してくるが俺が言った通り、ここはファミレス。そんな場所でのこの子の話をする様な場所では無い。

まあ、本音はコイツ忙しいみたいだし、この場を乗り切ってうやむやになってしまえばいいと思ったのだが。

「……………それもそうやね」

「わかってくれれば幸いだ」

「そんなら明日家に来て話しを聞かせてもらおうわ」

……………え？



「ちょっと待つてな」

なんか自分の予想をはるかに上回った答えが返って来たと思ったら八神は唐突に自分の端末を取り出してどこかに連絡を入れる。

「あ、八神です。すみません、急なんですけど明日有給にしようと思ってます。仮に私が処理しなくてはいけない物がありましたらデスクに置いておいてください。……はい、はい。あ、それとヴォルケンリッターの四人も有給にしようと思ってください」

「えーっと……八神さん？」

「これでよし。ほんなら今日のご飯食べるだけにしようか」

「あ、あの……」

「ちなみに来いへんかったら家族全員で迎えに行くさかい。ちゃんと来てな。ちなみに明日はお好み焼きパーティーや」

マジか。ヴォルケン一同が俺の家に来てくるとか怖すぎ。

「さあ〜お腹減ったし。ここのかつ丼うまいんやで〜」

人の話を聞いて！！

ってな感じの事があって今に至ります。

「イツキさんなに上の空になってるん？」

「……………もうどうにでもなれ」

「あ、今や。ヘラでお好み焼きひっくり返して！」

「……………はいはい。ほっと！」

うん、見事に小金色に焼けている。

にしても、地球の食文化って面白いな。  
特に日本。

なんか見た目アレだけどなかなか美味しいし、味付けも色々あって面白い。

まア、ミッドも似たような料理が沢山あるけど。

あ、俺も日本出身だったか？

「ああああ！？ テメエ！！ なんて事しやがる！？」

「へっへっへん 僕に勝とうなんて一億光年早いんだよ」

「レヴィ。光年は距離の単位ですよ。あ、烈火の将。そこは右です」  
「う、うむ……………」

さて、俺等がキッチンで好み焼きを焼いているとリビングの方からそんな声が聞こえて来る。幸いキッチンとリビングには壁は無く、その様子がハッキリと見えた。

現在、八神家のヴィータ、シグナムと家のレヴィ、シュテルがテレビゲームで盛り上がっていた。ちなみにゲームは某配管工と愉快的仲間達がレーシングカートに乗ってレースする物。八神の奴が地球から直々に持ってきたとか。

「ディアーチエ。すごいですう〜モフモフですう〜」

「こ、こら、ユーリ！ 噛みつかれたらどうするのだ！」

「大丈夫よ。ザフィーラは噛みついたりしないから」

「……………」

んで、リビングのソファアでは八神家のシャマルさんとザフィーラ（狼モード）と戯れているユーリを心配してディアがワタワタしている。

「ガリユー最近どうなんだ？ ルーラーの所に戻りたいと思わないの？」

「……………問題無い」

「ガリユーは良く働いてくれている」

「そうなんですかあ〜?」

さらにキッチンとリビングの間にあるダイニングテーブルではリ  
イン、アギト、ガリユー、レグナの四人がお話中。

なんだこの家族の日常風景は?

俺はてっきりもっとこうシリアス展開になるかと思っていたのに。

「イツキさん。もうええで? 次焼くからどけてー」

「了解」

にしてもこのお好み焼きはコツをつかまないと難しいな。

十分に焼けていないとひっくり返した時にグシャって具が飛び散  
ってしまう。

いかに焼き具合を見極めるのがポイントだな。

「にしてもイツキさんはやっぱり料理人やな。一回教えただけでポン  
ポン覚えてまう」

ポンポンって……………さすが狸。

「てい」

「あつっ!?! 鉄板の油を飛ばすな!?!」

「なんやイツキさんが失礼な事考えてそうやったから」

あれ? なんか最近俺の考えていることが皆にただ漏れじゃね?  
俺はサトラレなのか?

「にしても八神よ。今日は一体どう言う風の吹きまわしだ?」

「んー?」

そんな話を切り出すも八神の視線は目の前にある食材を切る事に集中していた。

まあ、包丁使いながら余所見は危ないしな。

「昨日の事を言っとするん?」

「うん、まあ」

「それなら気にせんでええよ。あれは『口実』やから」

「はあ?」

「ああでも言わへんとイツキさん来てくれへんやん。あのユーリって子がなんなのかはいまいちわからへんけど。どんな存在でもイツキさんの近くにおつたら大丈夫やと思うし………それにな、今日はレグナの様子を家の皆に見せたかったんよ」

「……………レグナを、ね」

レグナの真名リインフォースは夜天の書の管理者人格である。十数年前に起こった暴走事件の際に大半の機能を切り離し、自身の消滅を選んだ融合騎。そして俺の横で野菜を切り刻んでいるのはその夜天の主だ。

そんな二人がどのように別れたかは知らないが……………きっと大泣きでもしたのだろう。もちろん夜天の守護騎士達も交えて。それでも別れは訪れ、それぞれ歩む道を歩んで今に至っている。

「お前も大変だったんだな」

「え？」

そんな事を考えていたらなんとなく言いたくなくなった。

「安心しろよ。レグナはちゃんと『本当の家族』の元に還してやる」

だからそれまでもうちょっと待ってくれ。

「てい」

「あつつ！？ また鉄板の油が！？」

よりによつて眼球に直撃させやがった！？

「イツキさんはアホやな。ほんまもんのアホの子や」

「な、なんだよ……………」

八神によつて飛んできた油を洗い落していると呆れ顔をされた。

「イツキさんはレグナの事を家族って思ってへんの？ 今の言葉レグナが聞いたら悲しむで？」

「…………… 思つてないわけ無いだろ。あいつは俺にとっての家族だ」  
「ならそれでええやん。今とか元とかやあらへん。その子を想う人がいて、その子の居場所があればそれはもう家族や。せやから、あの子にとつてもイツキさんは家族の一員なんよ？」

……………あぁ、そう言う事。

うん、なんか癪だけどこいつの言うことに納得してしまった。

初めはそんなつもりなかったけど、八神達に出会ってから俺はレグナをいつか還さなくていけないと勝手に考えていた所がある。もちろん、本人がそう言った訳ではない。でも、勝手にそう言う風に考えて、いつか来る日の別れを覚悟していた。

俺はまたレグナに悲しい別れをさせてしまう所だったのかもしれない。

「しかし、家族が二つあるってのもややこしいな」

「えゝそうかあ？ そない気にせんけど」

「なんなら一つにでもなるか」

「ふえっ!?!」

おい、マジで捉えるな。

「冗談だ。ほれ、こいつも焼けたぞ」

「……………アホ」

「ん？ なんか言った？」



「なんでもあらへん！」

はて？ なぜプリプリと怒ってらっしゃるのだろう？

「んじゃ、いただきますかね」

「……いただきます！」「……」

さてはて、出来あがったお好み焼きが並べられているテーブルを皆で囲って……ってさすがに全員って訳にはいかずダイニングテーブル組とリビングテーブル組に別れて夕食をいただく事に。

ちなみにダイニングテーブルには八神、リイン、レグナ、アギト、シグナム、シャマルさんの女性陣6人が座っており、何故かチビツ子四人とヴィータ、ザフィーラ、ガリユール、俺はリビングに用意されたテーブル。

ってか、何故幼女率が高い？

全員の面倒を俺達で見ると？

んで、ザフィーラはともかくヴィータは何でこっちにいるんだ？

ちなみにザフィーラとガリユーは人型になっています。

「んで？ ユーリよ。何故お前は俺の膝の上に座る？」

「ここは私の席です」

俺はお前の椅子と申すか。

心無しかディアが物凄く睨んでくる。

「ほれ、あーん」

「あーん」

仕方ないのでそのままユーリを膝に乗せたまま食事。

行儀が悪いかもしれないが頑なにどいてくれないんじゃないしょうがない。

なので、お好み焼きを一口サイズに切って箸で摘み、ユーリに食べさせた。

「おいしいです」

「そいつは良かった」

うん、教えられながらとは言え自分でもうまく出来たな。

今度ホットプレートでも買って自分で作ってみるか。

「あー！ シュテル！ それは僕が取ろうとしたやつだよー！」

「何を言いますか？ 食卓はいつでも戦場ですよ？ 出遅れた者に栄光はありません」

「むー！」

っと、なんか喧嘩を شدしたのはレヴィとシュテルである。  
どうやらレヴィが狙っていたお好み焼きがシュテルに取られたら  
しい。

「ああもう！ うるせえ。ほら、私のやるから我慢しろ。まだ欲し  
ければ焼いてやるから」

「ほんと！？ 鉄槌の騎士はいい奴だな」

「ふんっ」

でも、なんだかんだで子供達の中で最年長？のヴィータがその場  
を収めてくれた。

レヴィに褒められて恥ずかしいのか若干頬が赤く染まっている。

ってか、今日出会って早々にいがみ合っていたのになんでそんな  
に仲良くなっているんだ？

「ガリユー。すまないがソースを取ってくれないか？」

「……………」

「ん、すまない」

こっちはこっちでザフィーラとガリユーが黙々と食べているし。

「親父殿。そっちの明太子とやらを取ってくれ」

「ほいほい。……って、ディア。口の周りにソースが付いているぞ」

「む、我としたことが」

「はい、ジツとしてる」

「ひゃっ!?!」

しょうがないので近くにあったナプキンで拭き取ってあげる事に。でもなんかビツクリされた。

「ほい、取れた」

「……あ、ありがとう」

「どづいたしまして。それとコレな」

「んっ」

はて? なんでか伏せてしまった。

「父様。次はアレが食べたいです」

「はいはい」

んで、今度はまたユーリがそう言って来た。ちなみに、ユーリは俺の事を『父様』と呼ぶ。まあ、いいけど。

にしても、忙しい。

ふむ、マスターがあつちでディア達の世話に焼いているな。  
私もあつちでお手伝いするべきか……………。

「ほう、では今はレグナと名乗って生活しているのだな」

っと、そうだった。今は懐かしい顔ぶれと話している途中だった。

「ああ。だから、その様に呼んでくれれば幸いだ」

「でも、実際見るまで半信半疑だったけど……………本当によかったわね」

「シャマルいくら懐かしいからと言っても涙を流すこともないだろう。」

「にしてもヴィータがあつちに行くのは意外やったな。てっきり私等と食べると思ったんやけど」

「先程の遊びでマテリアル達と仲良くなったので、それでだと思います」

「それこそ意外やな。会って早々喧嘩みたいになりそうやったからゲームでケリ付けさせようとしたのに」

「最終的には雷光レイウがヴィータと手を組んで勝ちをもち取ってましたよ」

私としてはシグナムがあ場で一緒にゲームをしていたこと自体にビックリなのだが。

あ、そう言えば昔夜中に一人でゲームしていた様な……。

「ふふっ、まあ仲良くなる事はええ事や。あ、ラインこっちの好み焼き食べるかあ？」

「いただきます」

「にしてもラインは最近よう食べるな？」

「いっぱい食べてお姉ちゃんみたいに大きくなるんです」

ん？ 私みたいに？

「えーっと……融合騎は基本成長しないものなのだが」

「うっ！？ でも、お姉ちゃんは日々成長しているって……」

「治療の一環だ。私のリンカーコアは破損していて自動修復すると

同時に元の姿に戻る様になっているんだ。だから、完全に修復が終われば成長も止まってしまっ」

「それでもあのプロポーションは羨ましいです……………」

そう言えば最近また胸がまた大きくなった気がするな。

修復が進んでまた成長しているのだろうか？

でも、成長するにつれ周囲の視線がなんだかいやらしく感じる。

特に学校の男子とか……………。

「そう言えばレグナって学校に通ってるんだろ？　なんで？」

そんな事を考えているとアギトがそんな事を質問して来た。

「マスター曰く、私にはどうも一般常識が欠けているらしい。だから、学校に行つてその知識を学べとのことだ」

「ああ〜そう言えば昔お使い頼んだときキャベツとレタス間違えて買つて来たな」

「あ、主!？」

「プツ、アハハハハ！　なんだよそれ！　さすがのアタシでもそんな間違いしねえよ!」

くっ、まさかの私の恥ずかしい話しを暴露されるとは……………。

「もう！ アギト！ お姉ちゃんを笑うのは許しませんよ！」

「リイン……………」

ああ、なんて事だろう。

さすがは私の妹。

私の意思を継いだけある。

「お姉ちゃんはちょっと天然さんなだけです！」

……………受け継いでいるはずだよな？

はっ！？ いかん、思わず口調がおかしくなってしまった。

「リイン。それはあんまりフォローになってへんよ」

「ふえ？」

私が天然と言うならばそんな所まで受け継いでしまったのだな。

……………私が不甲斐ないばかりに。

「ああ……………レグナ？ 何に気を落とすてるんかわからんけどあんまり気にせんほうがええよ？」



「……………はい」

いかにいかに。

物事を悪い方へと考えるのは私の悪い癖だな。

……………そう言えば最近はその風考えたことなかったな。

「レグナー！ そっちのテーブルにマヨネーズある？」

「あ、はい。マスター」

「にしてもユーリはかわええなあ。お菓子食つか？」

「いただきます」

お好み焼きを食べ終えた俺達は各々の時間を過ごしていた。

八神はまだ俺の膝の上に座るユーリを可愛がりながらなんか餌付けしている。

ちなみにそのお菓子は俺が持ってきた物である。

そんでヴィータ、アギト、リインは我が家のチビツ子達は再びテレビゲームにまた熱中。

シャマルさんとレグナは食器の洗い片付けして、ザフィーラ、シグナムは食後の運動でなんか鍛錬しに外へ行ってしまった。あ、ガリユーもなんか一緒に付いて行ったな。

んで、俺はユーリを膝に乗せて子供達が遊んでいるゲームを眺めていた。

「なあ〜イツキさん。ユーリを抱っこしてもええ？」

「いや、俺に聞くなし」

まるでおもちゃをねだる子供の様な言い草。

まあ、ユーリが可愛いのは認める。

しかし、このユーリ。頑なに俺の膝の上からどここうとしないのだ。現に八神に引き渡そうと抱きかかえようとするど何故か俺の服を掴んで離そうとしない。

「ユーリ。服がシワになるから離してくれ」

「ヤです。離したら私はここを離れてしまいます」

「いいじゃないか。ゴツゴツよりプニプニの方が」

何故か八神からグーパーンを貰った。

「プニプニですか？」

「ああ、きつとプニプニだ」

もう一発グーパーンを貰った。

「私はそないプニプニしてへん！！」

「プニプニじゃないんですか？」

「うっ……………プニプニやらへんけど……………や、柔らかいで」

ぶっ！

自分で柔らかいとか言っちゃったよ。

「あー！ そこ！ 笑うなや！！」

「いや、うめ……………ぶはっ！」

「イツキさんのアホー！」

悪気は無いんだ。

でも、自分で振っておいてアレだけどこれは笑わずにはいられない。

何気に顔を真っ赤にして怒って来る八神が可愛いと思ってしまうが俺の思考は今の状況でかなりおかしくなってしまったらしい。

あ、だめだ。腹筋が割れる。

「くう〜……………なんか仕返しできへんやろうか」

なんかブツブツと物騒な事を考え始めた。

こいつなら管理局の権力使って何かして来そうで怖い。

あ、でも。八神って夜天の書の主って事は闇の書事件の主犯でもあつたんだよな。経歴にマイナスイメージ付いてるのによく今の地位に立ってる様になったもんだ。それはそれでこいつの凄い所なのかも。

ん？ ユーリが俺から離れて八神の方へ行っちゃった。

「ん？ ユーリ？」

「んしょ」

そして何を思ったかユーリは八神の膝の上に座り始めた。

「えへへ、確かに父様と違って柔らかいです」

「……………ユーリ」

どうやらユーリは新たなお気に入りを見つけたらしい。

おめでとう、八神。今日から君も椅子だ。

「イツキさん！ ユーリがメツチャ可愛い！ ちょうだい！！」

「ユーリ！ そいつは危険だ！ すぐにこっちに戻ってきなさい！」

もうなんか鼻息が荒いし、目がヤバい。  
これはもう女のする顔じゃねえよ。

「きゃー！ ユーリ！ 家の子にならへん？ いっぱい可愛がってやるで？」

「え、遠慮しときます………」

ユーリも興奮した八神から逃げ出そうとするがそこはガツチリホルドされて逃げられない。

しょうがないのでそろそろ助けてやろうとしたのだが。

「よいしょ」

「つて、おい。ディアさん？ なぜあなた様が俺の膝の上に座るのですか？」

「ユーリばかりずるいのだ。今度は我が親父殿のここに座る」

なにがずるいのかわからんがこのままではユーリが大変な事になるぞ？

「あー！ ディアアーチエ！ そこは私の場所です。うう………夜天の主！ いい加減離してください！」

「ええ〜もうちょっとだけ。もうちょっとだけこのまま〜。それと夜天の主やのうて私は八神はやてって名前があるんよ？ せやから、そっちで呼んで」

「わかりました！ はやて！ お願いですから離してください！」

「だが断る」

「そんな!？」

にゃ〜ごろにゃ〜と狸らしからぬ猫の様な甘え様。

八神は自分の頬をユーリの頬に擦りつけて愛でていた。  
本当にこいつはユーリを気に入ったのだな。

「八神。それ以上は」

「にゃあああああ!!!」

……………あ。

「う、うわっ!？ なんやこれ!？」

「説明しよう。ユーリは感情が不安定になると紅い霧の様な翼を展開するのだ! そして、その翼はなんかよくわからない魔力で何かを生成する能力があるらしくてな……………まあ〜ユーリの魔法だ」

「いだだだだだっ!?!？ 悠長に説明せんで助けるや! なんやちっこい石がごっつ飛んで来る!？」

「うー!ー! うー!ー!」

ユーリは涙目になりながら紅い霧の翼を展開し、物凄い数の石を八神にぶつけている。だが、石と言っても小粒程度の大きさ。怪我することも無いから放っておこう。

ま、自業自得だしな。

「ふっふっふ……いい気味だの〜夜天の主」

「ディア、とりあえずユーリを止めるよ」

「安心しろ親父殿。ちゃんとユーリの魔法は紫天の書で制御して  
おる。今なら小粒の石がでるくらいだ」

いや、あの行動を止めると言っているのだが……

まあ、いいっか。

第十三話 おいでませ〜（後書き）

ユーリで予想外の反響w

いや、これは必然か!?



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0808y/>

---

魔法少女リリカルなのは マテリアルズ・パニック！！

2012年1月11日01時56分発行